魔法先生ネギま！ -皇帝の後継者-

明日の行方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ - 皇帝の後継者 -

【Nコード】

N3053W

【作者名】

明日の行方

【あらすじ】

その昔、彼女は死にかけてたそしてある男と出会った…その男から死にかけての自分を救う為にある特別な力をもらった…それは大罪を燃やす七つの焰と人の罪を司る悪魔達の欠片…十年後、彼女の物語が動き出す

昔の出会い、今の彼女（前書き）

初のネギま作品です。

指摘・誤字脱字があれば教えてください

昔の出会い、今の彼女

燃え散れ

「燃え散れ」、それが私の聞いた彼の言葉の中で一番印象に残る言葉

その言葉と共に目の前の惨劇は肉の焼ける音と臭いを放ちながら消えていく……

煌々と激しく燃える赤い色の火ではなく、まるで雲一つない青天の空のような澄んだ蒼色の炎…人を燃やしている光景なのに、私は酷くやましい事を考え口に出していた

「綺麗……」

私は目の前の消えていく惨劇を見つめ終えて、彼を見つめた青色の髪と瞳それに似合わない赤いマントと数珠のように連なる銀の髑髏、似合わない……でも顔は綺麗だった

「……よお、ガキンちよ生きてるか？……ってそのざまじゃあ、しゃべれねえな」

え？しゃべれるよ……あれ？声が出ない？何で？

「あゝ気づいていないか、ガキんちょお前はな、あの世に片足？
いや右半身突っ込んでいる状態なんだよ」

そんな…そんな大事な事を髪が掻きながら、めんどくささ丸出しで
言わなくても…………

「このままだと死ぬが、この偉大な俺様が助けて後、すぐ死なれ
ちやあ困る名が廃る…だから、プレゼントだ」

彼は右手で拳を作り、しばらくして拳を解くと右手の中には1cm
ほどの大きさの欠片が色違いで七つ

「これは俺様の力を七つに分けた欠片、【七罪の欠片】これをや
る。そうすりゃあ…………助かるかもな」

かも？…偉そうに名が廃ると言っていたのに、かもなんだ…………まあ、
何もしないで死ぬよりはいいかな…………うん、ほしい

彼は私の心の声が聞こえたのか、笑みを浮かべると欠片を血まみ
れの体に叩きつけると、同時に欠片はそれぞれ光を放ちながら私の
体に溶け込んで…………熱い…とても凄く信じられないくらい！熱い！
！そして刺すように痛い！！

「抵抗すんなよ、ガキんちょ我慢しろ我慢！！！！」

彼は抵抗する私の体を靴で踏みつけた……靴底にスパイクが付いていて一番痛い踏みつけられると欠片は体の中に完全に入り込み溶けると急に息が苦しくなり咳き込んだ

「ごほっ！あ、ぐっうっ……」

「お！良し入ったな……救急車は後で呼んでやるよ。今お前に授けた力は【七つの魔焰】セブン・ブレイズそして死に掛けのお前を助けた偉大な俺様の名は皇帝と呼びな」エンペラー

「七つの……魔……焰？……エンペラー？」

なにそれ、そしてどうして名がエンペラー……？

「七つの魔焰セブン・ブレイズについての詳しい事はこれから新しく生まれる悪魔どもに聞きな……それと警告だ、間違っても悪魔どもに喰われるなよ。じゃあな、ガキんちよ」

「待……………って」

まだ、言いたい事があるのに……………あれ？

彼は立ち止まり振り向くと、何かを思い出したかのような顔を見せると

「ああ、言い忘れた……………七つの魔焰セブン・ブレイズは人を殺す力、慈悲も情けも

なく命を殺す力だ。使うなら……覚悟しろよガキンちょ、誰かを殺したが最後までれほど罪を償う行為をしても、その手を綺麗にする事なんてできない、殺す前のお前には決して戻れないからな」

「……………」

「その内分かるさ……………あばよ」

エンペラー
皇帝のウチに向けての最後の言葉……………当時のウチに言葉の意味は色々と分からなかったけど、真剣なのは分かった……………

そして……………もう遭えないような気もした……………その後はウチの所に救急車が訪れて早々に病院に運ばれた

正直、怪我の前の瞬間なんて正直覚えてない、気が付いたらあの人エンペラーが皇帝が人を燃やしていたのだから……………

「……………コホン、それでは今から明日菜さんの誕生会を始めます。乾杯……………」

乾杯！！の音戸と共にガラスのコップがぶつかり合い、清く澄んだ音が部屋に響く……今日は原宿で友達と買い物に出かけ、その帰り道にクラスメイトの神楽坂明日菜の誕生会をカラオケ店でしようとして明日菜の親友の近衛木乃香と会ってそのまま誕生会に誘われた

そしてカラオケ店に着いたウチら四人（ウチと佐々木まき絵・明石裕奈・大河内アキラ）と明日菜達三人（明日菜・木乃香・ネギ）とクラス委員長の雪広あやか、そして何故かやたらと先導しているチアリーディングの三人（柿崎 美砂・釘宮円・椎名桜子）は一番広い大きな個室を取り、そして手渡り次第に料理を頼んだ

プレゼント用意してへんけど……ええのかな？

「なあ、明日菜？その……急にやから、プレゼント用意してへんのかよ」

「ん？あ、いいよいよ別に気にしないで亜子ちゃん。正直言うとも私もネギ達に言われるまで自分の誕生日が明日なの忘れていた」

うん、良く分かるウチもたまたま気にせんと歳を忘れそうやから……
…別にボケてへんよ

「さっ！料理冷めちゃうからどんどん食べよう。良く分からないけど、釘宮達が半分以上持つらしいから」

そうなんや気前がいいな、クギミー達。なら問題ない、どんどんじ

やんじゃん頼もついでにお持ち帰りも頼もつ

個室の扉に手をかけて通路にいた店員さんに向けてケーキを頼んだ

「すみません〜！お持ち帰り用の【スーパージャイアントホール
ケーキ^{シクマ}】一つ〜！」

「^{シクマ}…五千円！？ちよつと！亜子、それは無し！！…まき絵、あ
んた食つの急ぎ過ぎ〜！」

「ふお？だへ？（訳…え？ダメ？）」

釘宮の指摘通りにまき絵は、ハムスターのように頬をいっぱい膨
らませながら、料理をこれでもかと溜め込んでいた

確かに急ぎすぎ……あれは太るし胃に悪い、所で^{シクマ}がダメならWZ^{ダブルゼット}
はダメ？クギミ〜？

それから、電車の終電前に明日菜の誕生会は終わって

「ところで皆さん。カラオケ店に買い物置き忘れはないですか
？」

それとウチらの中で唯一の男の子なのが、皆から子供先生と言われている九歳でウチら3・Aの担任のネギ・スプリングフィールド淒く頭のいい子で時々、背中に杖を背負っている変わった子、そしてシヨタコンのいいんちよに惚れられている……正真正銘本物の魔法使い

そしてウチがネギ先生が魔法使いだと知ったのは、学園が停電した日の夜……

昔の出会い、今の彼女（後書き）

主役は和泉亜子です

彼女の力はコードブレイカーの七つの炎を参考にしてます
能力と悪魔が同じなのもありますが、未登場の炎の能力も
一応…考え済みです

夜の騒ぎ・？（前書き）

ここからが本編です

時間は修学旅行の前日から始まります

……なるべくキャラ崩壊は避けたいと思います

夜の騒ぎ・？

その日はとても学園が暗く感じる日だった

暗いと言っても精神的なものな感じではなく、夜で今日に限り学園中が停電してるだけ、それでもいつもの夜でも賑やかな学園が静かだと、寂しくも感じるし気持ちも僅かに沈んでいる気がする

真っ暗な夜道を目的地へ向けて一心不乱に走るそれこそ矢のような速さで……目的地の学園と学園外部を繋ぐ大橋を目指して

そして今、橋の入り口の手前で持ってきた双眼鏡でネギ先生とクラスメイトのエヴァンジェリンさんとの魔法戦闘を覗いていた

……勝てる気がしない、エヴァンジェリンさんに首を噛まれた所がまだ痛い

「すご……ネギ先生もエヴァンジェリンさんも強い……勝てへん」

《亜子も魔力を使えば、あのぐらい出来る…教えるぞ?》

「アシユタロス……氣とあんたら使っただけで精一杯」

周りには誰もいない、それでも聞こえる曇った声……七つの魔焰

セブン・ブレイズ

が一柱、悪魔アシユタロス、十年前に皇帝から貰った【七罪の欠片】
から生まれた最初の悪魔

その姿は黒い赤目の大熊で一番最初に懐いてくれた、アシユタロスは人間の大量の【怠惰】を司るらしく、性格はのんびり屋、普段は精神世界？の中で寝ている

そしてに生まれてすぐの時、魔力の事や氣それを使う人達…魔法使いの事を教えてくれた。何でも知識は世界から得たりもらったりしいけど…詳しい事はよく分からない

《どうする？止めるつもりで来た止めるか？》

「ん〜止めなくて、先生はウチらの為に戦ってくれてるその行為を無駄にしたくあらへん」

がんばってネギ先生

覗くのをやめて、学園の女子寮大浴場【涼風】で寝てるアキラの様子を見ようと学園の方を振り向くとアシユタロスが話しかけた

《亜子は優しい……だから他の奴らに舐められる》

「舐められるのは嫌やねんけど……自分の意思は変えたらあかん気がするし」

特にあんたら七柱、相手には簡単に変えられないし負けられない……

エンペラー
皇帝の言葉もある

《心配しなくとも、故郷は喰わない…あの薄汚い羽虫と違う》

「……………心読まんでくれる？」

《……………寝る…用があれば呼べ》

アシユタロスは精神世界に戻って行った……………帰り道に大慌てで、大橋の方へ走って行く明日菜が見えた。その時、ふと思った

……………もしかして明日菜、ネギ先生が魔法使いつて知ってる？

と、ゆう経緯があつてウチはネギ先生が魔法使いだと知り、あの戦いがどうなったとか明日菜はあの後どうしたのかは全く知らんけど、翌日にはネギ先生がやたら機嫌よかつたからきつと先生が勝つたんやろうな良かつた、良かつた

明日菜の誕生会から翌日の放課後、明日の京都四泊五日の修学旅行への最後の準備を終えて机の上の時計を見ながら

「暇やな〜…まき絵、大会の選抜テスト近いから帰ってくるのまだ数時間先やし……久しぶりにやろうかな」

クローゼットの扉を開けて、床に置いてあるダンボール箱を引き出して、中には小説の魔法使いが良く来ている深めの黒いローブ（特注）二着と黒の指だしの手袋（特注）が二双入っている

それぞれ一つずつ取り出して、手袋とロングコートを付けそしてコートの前ボタンも全部しっかり留めてフードも被ると完成、アシユタロスも呼び起し

「サイズは……問題なし、大きめの頼んで正解やった」

《それは肉体が目に見えて成長していないとも言えるぞ？》

「ちゃんと成長しとる……ただ伸びが悪いだけ」

本当にこの悪魔達は気遣いとか、デリカシーとかが無くて困る。シヤワー中に普通に話しかけて来るし視覚が共有だから絶対裸を見てる

《心配しなくても悪魔は魂の器（肉体）の姿に興味は無い。気にする必要ないぞ》

心を読むなと言っているのに……

《それより、その姿で外出るのか？魔法使いもいる危ないぞ？》

「でも、先生も言うてた『たまには自分の力を確認しなさい。そうしなければ知らぬ間に、技術であれ力であれ、錆びてしまう』って確かに言う通り危ないけど、変な事に巻き込まれるのは嫌や」

《亜子がそれでいいなら特に言わない……》

「じゃあ、いくよ」

窓を開けて、夜になっていく外を見つめながら一呼吸して、着地場所を見つめながら窓枠に足をかけて窓から跳んだ……だけど、着地場所の木に跳んだはいいいけど、靴を履き忘れたのに気づいてまた部屋に戻る事になった

- s i d e ? ? ? -

私は今、学園全体を見渡せる展望台の屋根から、自前の高感度スコープで学園の建物の屋根を覗き不審者がいないか眼を光らせているが特に変わった様子はない……

「今の所、異常無し……」

しかし、こう連日平和だと学園に雇われてる身としてあの金額を貰っていいものか……まあ、割引する気はないが

学園の時計塔を見つめ、私の受け持ちの時間は後十分ほどで終り終われば、後は交代の先生方に任せればいい…なにせ明日の朝は遅刻する訳にはいかない、なぜなら明日は修学旅行出来れば定時通りに帰りたいのだが…運の悪い事に見つけてしまった

「世の中そう思い通りには行かないか……」

私はため息をこぼしながら、胸ポケットから携帯を取り出して登録した番号にかける…数秒後にその相手と繋がり

「龍宮だ……高畑先生いた。そっちの方に黒い服が一人向かってるから、よろしく」

伝える事だけ伝えて携帯を切り、私は特注のライフルケースを担ぎながらふと、思った

まあ、様子だけでも見てみようかな

私は展望台の屋根から侵入者を目指して飛び降りた……

·
s
i
d
e
e
d
e
·

夜の騒ぎ・？（後書き）

とりあえず、先に序章分を優先して投稿する予定です
少し訂正しました

夜の騒ぎ・？

- side 亜子 -

女子寮の窓から飛び降りて、一時間ぐらいたってもまき絵からの連絡が来ない…そしてウチは今、街の本屋の屋根にいるけど今の所魔法先生達には見つかっていない

まき絵…まだ帰ってけえへんのかな？それともウチの事忘れてる？

《あのピンク頭は、すぐ忘れるニワトリなのか？》

「ニワトリちゃうけど…忘れやすいんは、否定でけへん」

……………やっぱり、一応電話しよ

ポケットから、携帯を取り出そうと手を入れた時に

「そのまま、動かないでくれるかい？」

「ひゃ!？」

突然の声に驚きも奇声を上げ、急いで振り向くとそこには火がついていないタバコをくわえた元担任の先生がいた思わず名前を呼ば

うとしたけど、声で分かるかもしれないから心で先生の名前を呼んだ

高畑先生……え？もしかして、先生も魔法使い？

《もしかして、ではなく魔法使いだ。亜子》

- s i d e e n d -

- s i d e 高畑 -

龍宮君の連絡から、瞼を閉じて意識を集中させ周囲の気配を探ると一人だけ屋根の上を飛び移っている人物がいる感じる気の質から考えて、それほどの玄人じゃないな……けど、まったくの素人の動きでもない

「結界の警報も鳴らなかったし……かなり前から学園にいたのかな？」

考えても仕方ないので、とりあえず彼？を追うことにした………
…五分ほどで彼？に追いつき思いの他、移動はゆっくりとしている
それに僕がかなりの距離まで近づいても、振り向かないとなると
気配は読めていないようだ…それと彼ではなく彼女だった

十分程して、彼女は街中に入りその中の本屋の屋根の上から道を見下ろしていた

何かするつもりか……もう少し様子を見ようと思ったけど、仕方ないここで声をかけよう

何かつぶやいている為か、僕がタバコをくわえながら彼女の背後に立ったが、やはりまるで気づいている様子もない

…無防備すぎる、隙だらけ

罨と思った矢先、ロープの中のポケットに手を入れたので動きを止める為、彼女に話しかけた

「そのまま、動かないでくれるかい？」

「ひゃ!？」

奇声を上げながら驚き、彼女は僕の方を振り向くが顔はフードで完全に隠れているから分からないが彼女のロープが特注で、声質から彼女が若い子だと分かった恐らくは十代後半あたりだろう

「何者だい?とりあえず、そのフードを取ってくれるかな?」

「……………」

彼女は無言のまま頭を横に振り、拒否の意思を示していた無反応よりはいいけど……

「なら、フードは取らなくてもいい、学園に来た目的を教えてくださいかい？」

「……………」

今度は手を横に振りながら、「ない、ない」と否定している感じがするそれでも、彼女からは敵意などはまったく感じられず、どちらかと言うと知り合い相手に話しかけている感じがする

「君はもしかして……僕の知ってる生徒かい？」

「……」

それを聞いた彼女は驚いたように突如、何も言わずに道を挟んで向かい側にある建物に跳び、急いで逃げ出した

分かりやすい子だなあ

さすがに逃がす訳にもいかないので、くわえていたタバコに火を付けてから彼女を追った

- s i d e e n d -

- s i d e 亜子 -

あかん、あかん。危うくバレるとこや！

《正体は分からないと思うが、少なくとも向こうにこの学園の生徒だとバレた》

それでも、逃げる！！逃げ切る！

《熟練度は向こうが上だぞ…後ろ》

え？後ろ……！？

ウチはアシユタロスの言葉に後ろを振り向くと、目を疑った高畑先生が弾丸のようなスピードで追いかけて来た

はや！？…何、あのスピード！？

《魔力と気を使って強化してる。このままだと確実に追いつかれる》

どないやんかええ！？

《オレの能力を使えばいい、蓄積分を使用すればあいつを撒ける》

…しゃあない、高畑先生から逃げる為や、いくよアシユタロス

《おう》

「かくしゃく きゅうせんてんじつ赫灼の九泉天日」

- s i d e e n d -

- s i d e 高畑 -

彼女まで残り二十メートルほどまで近づいた辺りで、微かに彼女の
声が風に乗って聞こえた

「……………天日てんじつ」

「なつ！？」

眼を疑った…声が聞こえたその瞬間、彼女の全身から薄紅色の焰が噴出したと同時に残像をだけを残し彼女は消えた思わず立ち止まり、周囲を探ったが彼女は僕の範囲にはいなかった

テレポルト
瞬間移動？縮地無疆？…いや、それよりもあの色の焰はまさか七つ
フレイズ
の魔焰……
セブン

僕は懐から携帯を取り出し、麻帆良学園の学園長・近衛近右衛門へ連絡する

「学園長、高畑です先ほどの侵入者の件ですが、すみません取り逃がしました…ですが、もしかすると侵入者はあの皇帝の関係者かもしれません」

悪い予感がした…あの皇帝の関係者だとすれば最悪死者が出る可能性もある学園長に最低限の特徴を伝え、彼女の搜索を再開しようとした時、携帯の着信音が聞こえた

「高畑です……どうしたんだい龍宮君？え？本当かい？分かったすぐ行くよ」

- side 亜子 -

「お前は何者だ？答える」

やっぱり、アシユタロスの言う通りこのロープ姿で、外出るのをやめておけば良かった…と後悔しても後の祭りをつくづく思う

「空を見ながら、何に思いふけているんだ？」

ほんまにどないしたらええやろ？誰かを止めるのいいけど、戦うの嫌や

《亜子、来るぞ》

「悪いがこちらも仕事だ。そちらに敵対の意思が無くても、一方的にやらせてもらおう」

そう言いながら、彼女は……龍宮さんは、凄く本物っぽい、両手の拳銃の銃口をウチに向けると同時に連射し始めた、でも捕まる訳にもいかない

ごめん、龍宮さん……………ほんまに、ごめんなさい…赫灼かくしゃくの九きゅう
うせんでんじつ
泉天日

アシユタロスの焔の能力を発動した瞬間に、龍宮さんの発射した弾丸をかわしそのまま顎を目掛けて掌底を軽く擦るようにぶつけ、直撃した彼女は糸の切れた人形のように崩れるように力なく倒れる…その後、ウチは龍宮さんが気を失っているのを確認して、急いで逃げた

ごめんなさい、龍宮さん

I s i d e e n d .

- s i d e 龍宮 -

……………油断した

私は黒衣の女に意識を刈られた後、約五分ほどで眼を覚ましたが黒衣の女の姿は完全に影も形も無かった…打ち抜かれ痛みが残る顎を触りながら、高畑先生に電話をした多分…数分で彼は来るだろう

あの動き…明らかに常軌を逸失した加速、何よりもあの一瞬に見えた薄紅の焰…まさかとは思うがあの皇帝が関係しているのか……？

「まったく、明日は修学旅行だというのに…これじゃあ、気になつて素直に楽しめないじゃないか」

ため息を漏らしながら、私は黒衣の女が見ていた夜空を見上げながら、こちらに向かっている高畑先生を待った

「やれやれ、本当にこの学園は厄介事に事欠かないな……」

リベンジは必ずさせてもらうぞ、黒衣の女……必ずな

- s i d e e n d -

夜の騒ぎ・？（後書き）

これで序章は終わり、次から京都編です
少し細かく分け過ぎたような気が…

キャラクター設定（一月五日追記）（前書き）

現在の設定です

話が進む毎に書き足したり消します

キャラクター設定（一月五日追記）

和泉亜子

基本的な身体設定は原作のまま

実家の近所で総合武術マッシュアルアートを学び有段者。氣を使わないでの戦闘なら、

古 菲とほぼ互角に戦えるが、あくまで護身用に覚えたその為、基本的に自分から仕掛けない…戦い方はカウンター重視

十年前に皇帝に出会い、命を救われる

七つの魔焰制御の為の訓練中での火傷で何度も入院している

本人の知らぬ間に皇帝の後継者【女帝】エンプレスにされている

麻帆良入学前にアシユタロス、アラストル以外の五柱の悪魔を世界に放った

対価は七柱の内、三柱は払い残り四柱はまだ対価を払っていない

和泉直人

亜子の兄二十歳。神鳴流に所属し数少ない槍使い、宗家の一人を摸擬戦で半殺し現在、破門中

桜咲久遠の先輩であり、天ヶ崎に高額で雇われていたがその後は追われる身に

その後、偶然会った久遠を連れて京都を出ていく事を決めた

必要性のない戦いはしたくない主義

紅き翼アラルプラのジャック・ラカンが認める才覚を持つ

本気を出せば長瀬達を十秒で殺す強さらしい

女性の好みのスタイルは普通サイズより少し上ぐらい

桜咲久遠

刹那の双子の妹、高い身長がコンプレックス

和泉直人の後輩。十年前の刹那との稽古中の事故と木乃香の不安定な治癒の力によって視力を失う。

武器は鐔のない長脇差、本来は弓を使うが失明の為に武器を剣に変えた

目が見えないので気配や風の流れなどで、周囲の状況を判断している
振袖が好きで好んで来ている

歳の割に胸が長瀬・龍宮並に大きい

頭は頑丈

エンペラー
皇帝

亜子の命を助ける為に【七罪の欠片】セラン・ブレイズ七つの魔焰を渡した張本人

実は亜子を助けた皇帝とエヴァンジェリンの知る皇帝は別人

エヴァンジェリンの知る皇帝の代から公に姿を見せ始めたので

賭けられた賞金金額五百万\$はエヴァンジェリンの知る皇帝の金額
呼び名は【悪魔使い】デモン・サモナー【傲慢の王】プライド・オブ・キング【不死の炎】イグニス・ノスフェラトゥ

エヴァンジェリンの知る皇帝は目的を持っての行動が嫌いな為、無計画な旅をする放浪者

亜子の前の代の皇帝は千の呪文の男でさえ引き分けるのがやっとの強さ
サウザント・マスター

セラン・ブレイズ
七つの魔焰

皇帝の【七罪の欠片】から生まれ、亜子の精神世界に住む七柱の悪

魔達の総称

【色の焰】と【真名の焰】の二種類の焰を持ち、さらに皇帝の悪魔達には無い読心と個別の固有能力を持つ
セブン・プレイス
七つの魔焰は心の結晶であり現在の前の後継者の心を糧に進化する
七罪の悪魔達は歴代の後継者の魂の集合体

「アシユタロス」

一柱目の悪魔、姿は黒い5mの大熊。大罪の怠惰を司り、性格はめんどくさがり亜子の事を名前で呼び、七柱の中で一番懐いているので亜子には従順。七柱の内、五体は世界に散ったが護衛として残ったが、罪が怠惰の為か呼ばれる以外は基本的には何もしないで寝ている

【色の焰】

薄紅色、かくしゃく赫灼の九泉天日きゅうせんてんじつ

対象の肉体強化、敵性魔力・気を吸収するたびに身体能力を上げる

固有能力：あらゆる知識を世界から集め、対象に知識を渡す【譲渡】

「アラストル」

六柱目の悪魔、姿は青の瞳に銀の鱗で覆われたドラゴン。大罪は憤怒を司り性格は寡黙

余程の必要性を自身を感じないと亜子の呼びかけにも答ええない出てこない

その為か、一度出ると七柱で一番しゃべる

亜子の精神世界の深層を寢床にしている。亜子の事を「我が魔界」と呼び、七柱の中で作った誓いと規律を守り、他の悪魔が犯せば憤怒に恥じない怒りと強さを見せ罰を下す。（消滅しない程度に手加減）
真名の焰の使用の対価として、亜子の肉体を一時的に使用出来る権利を持つ

エヴァンジェリンのことをキティと呼ぶ

【色の焰】

青色、晴天の煉獄業火

着火すると、いかなる技術・魔法でも消し去ることができない『絶対焼殺』の焰、霊体のように実体を持たない存在に対しては効かない

固有能力：結合の繋がりを例外なく瞬時に切る【裁断】と異なる物を結合し縫い付ける【缝合】

「ベルフェゴール」

二柱目の悪魔、姿は全身黒で統一された妖艶な女性、大罪は色欲を司り性格は寂しがりやのいじぱり
二年近くの間力を使い過ぎて、五歳くらい子供の姿になる
七柱で唯一の紅一点、亜子の事を「母さん」と呼び母である亜子以外はまともに口をきかない
対物に対しては最弱だが対魔に対しては極めて強い

【色の焰】

漆黒に近い黒色、常闇の辺獄烈火

霊体・魔法・気などの物質以外の存在・攻撃などを無力化か破壊する。逆に実体のある魔法、石や氷などに対しては無力、対人に対しては相手の魔力を削る

【真名の焰・裂け目の王】
バアル・ベオル

数十mにわたる巨大な黒翼に捻じれた白い角、亜子の体を一時的に成長させ服装も黒い焰で作られた黒のワンピースと黒いヒールに変わり、髪は伸び黒に染まり眼と唇は鮮やかな鮮血の赤に変わる
攻撃は周囲の魔力を凝縮・圧縮した黒焰の砲撃　私は神秘を否定する
オール・テイナイル

固有能力：他者の精神を無理やり高ぶらせたり、他者に思い込みをさせる【掌握】

バンデモニウム
「万魔殿」

セラフ・ブレイズ
七つの魔焰とはまた存在を違えるもう一つの炎
深淵の底で外を眺める。自身を私と言い亜子をワタシと言う

？ 新幹線（前書き）

ここから京都編が始まります
では、どうぞ

? 新幹線

- side 亜子 -

眠い

龍宮さんと高畑先生に追われた夜から翌日……ウチは今、修学旅行の集合場所の大宮駅にいる

正直、とても眠い……あの後、龍宮さんと高畑先生が来るか分からなくてあまり良く寝られなかった上にようやく寝たのに、まき絵が集合時間よりも数時間も早く起き半ば強引に連れられた

眠い……まき絵くやっぱし来るの速すぎや、先生誰もおらんやん……

《亜子、寝たらいい……体を壊されたらオレ達が困る。亜子はオレ達の故郷なのだから》

悪魔に心配されても嬉しくないけど、他の六柱は絶対にこんな言葉はくれない……とりあえず、ありがとう

ウチがアシユタロスと話しているとまき絵が話しかけてきた

「亜子？大丈夫、ごめんね。その……ネギ君との旅行が楽しみで……ごめん！」

「あ、うん、もうええよ……」

そないに申し訳ない気持ちだが、全身から出てたら許さへん訳にいかないやないか……でもな、まき絵？次は間違つても、夜明け前に起きないで……お願いやから……ほんまにツライから

その後はアキラと裕奈の二人も合流して、それから続々とクラスの皆も来た……待ってる間に小腹が空いたので駅にまで肉まんを持ってきた学園一の天才、超鈴音チャオシンエンから肉まんを買い、その肉まんがあまりに美味しくてつい欲張り大量に買い食べたその結果……肉まんが食べ終わり、新幹線に乗る頃には……

「う……気持ち悪い……」

「亜子、乗る前から酔うなんて弱いんだから……」

「ちやう……肉まんが、肉まんが美味しくて食べ過ぎた……う」

「……お水買つとく？」

寝不足と食べ過ぎのウチの背中を摩られながらアキラの優しさにとても感謝しながら、裕奈に買ってもらった水で喉を潤し飲みながら誓った

もう肉まんなんて嫌いや、大嫌いや……それに、これ肉まんじゃなく、豚まんとかやうんか？

- s i d e e n d -

- s i d e 龍宮 -

昨日は結局、奴を見つけれなかった…出来ればすぐにリベンジしたかったのだが……

黒衣の女に顎を打たれたところを摩りながら、到着した新幹線に乗車しようとドアの前に立つと和泉と大河内が立ち止っていたよく見ると、和泉の背中を大河内が摩っていた

「大丈夫なのか？」

「あ、龍宮さん……亜子が肉まんの食べすぎで気分が悪いだけ……多分」

「う……ぶ……」

「……まあ、もしもの時は保健委員に言えば」

「保健委員は亜子だよ」

「……そうだったな、先生に頼めばいいだろ。多分」

「うふ……」

仕方ない、おぶってやるか……：そう言えば、奴も和泉と同じぐらいの背丈だったな、いや、気のせいか

和泉をおんぶすると言ったが、すぐ隣の車両だった為か和泉に遠慮されその後は大河内に連れられて行った

「遠慮する事はないのだがな……」

「どうした？龍宮」

後ろから声をかけられ特に警戒する必要もなく、私は振り向くとそこには髪をサイドテールに纏め大太刀を背負ったクラスメイトで同じ同業者の桜咲刹那がいた

「いや、和泉が調子が悪いと言って心配しただけだ……それより刹那、お前の班はどうなるんだ？お前の班はザジしか居ないぞ？」

「後でネギ先生に聞くが……多分、別の班と組む事になると思う」

「ちょうど良かったじゃないか、先生に言って近衛の班に組ませてもらったらどうだ？」

私が少しからかう風に言うと刹那は少し、ムっと顔をしかめながら私の横を通り過ぎ言い放つ

「仮に組んだとしても、私は影でお嬢様を守り続けるだけだ、仲良くする気など毛頭ない……」

相変わらず素直じゃない、本当は傍にいたくせに

その後、刹那は近衛の班に組まされて驚いていたが、すぐにいつもの表情に戻り近衛から離れていった

まあ、私には関係ないか………ライフルの手入れでもするか

- s i d e e n d -

- s i d e 亜子 -

ウチは今、東京駅から京都駅を走るひかり213号に乗車中……
京都まで後一時間くらい、気分が悪いのもほとんど治っていた
前の席では裕奈とまき絵が、人気のカードゲームでパル（早乙女ハ
ルナ）と綾瀬夕映の二人と対戦していた

ウチもやりたいけど、まずは体調不良を直す事を優先、まだ万全
とちゃうけど、ちゃんと氣も使えば京都駅までには完治出来るはず
まき絵達にバレないように氣を使いながら、体調を直しているとア
シユタロスが話しかけてきた

《亜子、京都とはどんな所だ？》

ん？ああ、行った事なかったやね……うん、古い寺院や仏像、建物
がある場所かな？

《面白いのかそれは？》

面白いというよりは、歴史的価値がある希少建造物やから後学が目
的やね

《オレに必要ないな、寝る。後はアラストルに任す》

え……アラストル、あんまあの焔を使いたくないんやけど

《奴が決めた事》

それを最後にアシユタロスは呼んでも答えずに、代わりに六柱目の悪魔アラストルが答えた

《我で何か不満か？我が魔界よ》

大ありやから言ってる。それに魔界って呼ばれるんは嫌やってゆうてるやん

《悪魔たる、我らが生まれた故郷、それ即ち母なる魔界…我が魔界よ、それは何度も言っただが？》

……ウチは人間や

《その通りだが、我がいる精神の深層は別の魔界と繋がっている。その気になればお前は人の領域を容易に超える魔力と、数多の魔を従える事が出来るが？》

何度も言うけど……そんな力はいらなし必要ない、それとお前言うなアラストル

《ふつ、細かいな我が魔界よ。だが、お前が望む時に我は手を貸そう》

それを最後にアラストルは精神世界の深層に消えて行った

普段は呼んでも、絶対に答えへんくせに………いつも、ウチの中
でなにしてる

- s i d e e n d -

- s i d e ネギ-

僕は今、新幹線の車内を見回りながら他のクラスの先生達と打ち
合わせなどで、てんでこ舞に動いて今は、3 - Aの車内の見回りを
終えた直後

「あはは、皆にぎやかで楽しいなあ」

あのカードゲーム面白そうだったな……

「よーよー兄貴。そろそろ周囲に気をつけた方がいいんじゃない
か」

僕の肩に乗っているオコジヨ妖精で僕の使い魔のカモ君が注意を呼
びかけてきた

「え？どついついこじとっ？」

「じじいが言っていたじゃねえか。道中で妨害行為があるかもしれねえってさ、もう西からのスパイが入り込んでるかもだぜ？それに皇帝エンペラーって呼ばれてる悪い魔法使いもいるかもしれねえ」

エンペラー 皇帝：昨日の夜に学園に侵入したとされてる悪い魔法使いで、特別な火の魔法を使う事で有名で何度か、父さんサウザント・マスター：千の呪文の男と何度か戦った事のある人

「でもカモ君。その皇帝エンペラーって人は男の人でもう数年前に死んだって…それに昨日の侵入者は女の人だってタカミチが言っていたけど……」

「甘えよ兄貴エンペラー！皇帝の野郎は百年以上前から魔法界にいて、エヴァンジェリン程はねえがそれでも五百万ドルの賞金首なんですぜ！！死んだって言うのも本当かどうか……その女っていうのも奴の幻術かも」

カモ君はそれからさらに多分、まほネットで調べた事を教えてくれた

「いいっすか、兄貴。エンペラー 皇帝は別名【悪魔使い】デモン・サモナー【傲慢の王】プライド・オブ・キング【不ス・ノスフェラトゥスス・ノスフェラトゥス】サウザント・マスター 千の呪文の男でさえ引き分けるのがやっとだっって言われる悪の大魔法使いで、死んだ話しも何の根拠もないんすよ」

「え！？それじゃあ…生きてるかもしれないって事？」

「でも、まほネットの話しじゃあ皇帝は死ぬ前に自分の魔法技術エンペラーを授けた【後継者】がいるって」

「その【後継者】が昨日の侵入者って事？」

「だとしたら凄く危険なんじゃ…西の妨害に皇帝の後継者…：僕一人で相手出来るのかな…」

- side end -

? その時の彼女達

- s i d e 刹那-

さて、この状況…手を貸したのか…

私の目の前に……いや、この新幹線の車内に多くの蛙が跳び回っているその全ては西の妨害によるものそのせいで、3-Aはパニック状態だ

特別、害がある訳ではないし…それに、ネギ先生達が回収しているから蛙の事はまあいいが、恐らくこれは陽動で本命は西の関西呪術協会と東の関東魔法協会の親睦を深める為の親書だろう

正直…お嬢様に害が無ければ余り目立つのも……いや、思いの他ネギ先生が慌ててる……仕方ない手を貸そう

私はスカートのポケットから、呪符を一枚取り出し、小声で呪文を唱える

「キヤーヤ」

呪文を唱えると呪符がわずかに極薄い光を放ち、すぐにその光は消える…それは成功の印、これでこの車両の前後ろの全車両の通路に仕掛けた分身用の式神が発動し、異常があればそれを撃退する恐らくこれで西の者の式神が先生から親書を奪っても、親書の奪還は容易だ

狭い通路を素早く動き親書を奪い取るには、式神は確実に小型で行くしかない…その為、確実に攻撃能力は皆無だろうだから、術者の力の一部を持つ分身の式神には勝てない

そして案の定、ネギ先生が不用意に親書を取り出し、親書を西の者の式神に奪われ慌てて追いかけて行った……

予想どおりになったか、しかし…先生もう少し警戒して下さい……簡単に奪われすぎです

- s i d e e n d -

- s i d e 明日菜 -

「ちよつと！、ネギ！？どこ行く……」

私が気を失っている亜子ちゃんを介護している横をネギが慌てて

走り去っていく…ネギの前に何か小さいのが横ぎったような

それより、あいつこの状況どうするつもり!? 私に押し付けるつもりならあとで覚悟しなさいよ!

私がこの場にいないネギと(ついでにカモ)に、怒りを震わせながらとりあえず今、抱えている亜子ちゃんを起す事にした多分、あまりに驚きすぎたの気絶だと思っから……

「えい!!!」

「あたっ!!!」

とりあえず、おでこを思いっきり叩いてみたパツチン!と乾いた音が聞こえ、亜子ちゃんはおでこを摩りながら眼を覚ました

うん、良かった

「大丈夫?」

「明日菜……? ……なんでやる、おでこが痛いのかけど?」

「あゝそれは、亜子ちゃん起そうと思っておでこを思いっきり叩いちゃった」

「そうなんや、ありがとつ……あゝジンジンしてきた…痛い」

「う、うめん」

とりあえずは、眼を覚まして良かった……それよりネギの奴、何してるのよ先生にくせにほつたらかしにして！

先生の仕事をほつたらかしにしているネギにさらに怒りを震わせてる私に亜子ちゃんは、少し赤みを帯びてるおでこをまだ触りながら質問してきた

「ところで、明日菜？何かあったん？まき絵達なんで、あんなに涙目？」

……あれ？え、え……！も、もしかして…私、強く叩きすぎて記憶が飛んじやった！？念の為に後で病院に！？

「ん…ウチ、東京駅でゆーなが買ってくれた水を飲もうとしてキャップを足元に落としてそれを探して拾って頭を上げようとしたら、前の席が急に倒れて……そこから覚えてない」

あ、そういえば…カエルに驚いて、まきちゃんが座席の背もたれ倒したような……良かったゝ私のせいじゃなくて！

一方……亜子達が蛙騒ぎで混乱している時の、麻帆良学園女子中等部の屋上

・ s i d e エヴァンジェリン ・

「眠い……やはりどうしても。昼間は眠いな……」

何か面白い事でも、無いか……このまま寝るとまたじじい（学園長）に愚痴を言われる

大体あいつも私から見たら、まだまだ若造のクセに生意気な……抜くかあの髭を

「マスター、三十分前にも同じ事を言いましたよ」

「ん？ああ、そうだったか」

私の横に同じ制服を着て立っている我が従者、絡繰茶々丸は何とロボットだ。日々の科学の進歩は目覚ましいものがある…少々、こころは飛躍し過ぎと思う部分もあるが

まあ、元々暇つぶしで超チャオの奴に魔法技術の提供をただけだからな、それで従者が手に入れられた安い買い物だ

「しかし、暇だ…」

「マスター、昨日の侵入者探しをしようでしょうか？高畑先生の言う皇帝と呼ばれる…」

「ふん、当てになるか奴は死んだはずだ。仮にナギ同様に生きてたところで、奴がここに来る理由は無いましてや、奴の関係者などいるはずがない」

「と言いますと？」

「奴は目的に向かって何かするとゆうのが嫌いだ。つまり、目的を持って行動しない。だから目的を持って、ここには来ない…万一年に生きてここに来たとしても、それこそ偶然の出会いレベルだ」

まったく、奴の事を思い出しただけでも腹が立つ…あの馬鹿が

「マスター、イライラしていますか？」

「当たり前だ、あの馬鹿は私……………おい、そこにいるの出てこい」

私は視線を茶々丸から、屋上の出入り口に視線を向けると苦笑いしながらタバコをくわえたタカミチがいた

「いや、バレたか、さすがエヴァ鋭いね」

「何がバレたか…だ。わざとだろ、この眼鏡が泣かすぞ？」

「あはは…君の泣かすは、本当に泣かされるから怖いな」

そう言いながら、タバコに火をつけるな…絶対、怖がってないだ
ろ！

「で？用件は何だ。私は今、思い出したくない奴の事を思い出してイライラしているくならない事だったら、覚悟しろ」

私の言葉にタカミチは、わざと視線をはずし目が上を向いている

タカミチ…皇帝の事を聞ききたな、分かりやすい奴だ

- side end -

- side 高畑 -

うっ、ん、どういいたそう…困ったな

僕の視線には明らかに用件の中身を確信したであろう、エヴァンジェリンが僕が言うのを待っていた

仕方ない…これも学園長の頼みだし、そしてエヴァの怒りは後で学園長に受けてもらおう…うん

「エヴァ…皇帝の事なんだが……」

「ほお。私にあえてイライラの原因の奴を、さらに思い出せと？いい度胸だタカミチ」

目に見えて怒っているな……髪が逆立っているそんなに思い出したくないのか？

「すまないエヴァ、その怒りは学園長にぶつけてくれ」

「ん……まあ、いい」

エヴァンジェリンはそれで納得してくれたのか、いつもの表情に戻った

すいません学園長……これも学園の為です

「話してくれるのかい？」

「暇つぶしだ……私と奴が出会ったのは、そうだな……今から二百年ほど前のロンドンだ。当時の私は私の事を殺そうとした連中の拠点がロンドンにあると知り、殺される前に殺すつもりでチャチャゼ口と共に、そいつらの拠点に攻撃を仕掛けた……内部の中心部に迫る当たりであいつが皇帝が牢屋にいたんだよ……」

あの皇帝が牢屋か……てつきり、敵同士で出会うと思った……いや、それよりまさかエヴァが時計塔の魔法使い達……メガロメセンブリア政府直轄の特殊魔法開発研究所に喧嘩を仕掛けていたなんて……噂じゃあ、魔法の実験中に全員死んだって話だった、だからその時期にエヴァの金額が跳ね上がったのか

歴史の真実に触れて、改めてそれを大規模で誤魔化すMM元老院の力を思い知る

「……続けてくれ」

「本当に気まぐれで、奴を助けたのが悪かった……その後、奴らの切り札と思われる人工的に生み出した魔法剣士モドキに苦戦を強いられた……あんな黒剣を何本も打ち込まれる身になれあの眼鏡女」

「珍しい……百戦錬磨のエヴァが苦戦なんて、最後のは愚痴かい？」

「うるさい黙れ……その時は疲れていたんだよ。野次を入れるなら、話すのやめるぞ」

「もう言わないから、続けて」

「はあ……それで少し追い詰められたフリをして、隙を作り必殺の一撃を加えようとする前に……あの皇帝が、あの大馬鹿が割り込んできた……しかもその私を作った一瞬の隙を突いて魔法剣士モドキを消し去った当然……激怒した私は、奴と戦う……いや、もう話しはここで終わりだ」

突然話すのをやめてしまったエヴァンジェリンに、僕は最期まで話すように頼んだが断固として拒否されたそのまま、茶々丸君を連れて彼女は恐らく学園長のいる執務室へ向かった……怒りをぶつける為

一人残された僕は吸い終わったタバコを携帯灰皿に捨て、新しいタバコを取り出し火をつけながら思った突然、彼女が過去を話すのをやめた理由を

「もしかして、エヴァ……その時に負けたのか？皇帝に」

- s i d e e n d -

？ その時の彼女達（後書き）

次は旅館・嵐山から始まります

まき絵が原因で起こる亜子の不幸は思いつきやすく書きやすい

？
あの子の彼女達（前書き）

少しづつオリジナル展開へ変えてきます
最も最後の結末は同じかも知れませんが…
感想の制限を外し忘れていたので、外しました
改めて感想を下さい

? あの後の彼女達

ホテル・嵐山

- s i d e 亜子 -

頭が痛い

時刻は夕方の四時過ぎ、ウチら四班は四泊五日を泊まる旅館・嵐山に着いて早々ウチはテーブルに身を預けていたズキズキと頭の中を鈍い痛みが軽快なリズムで襲う…原因は一つ、アキラに聞いた清水寺で飲んだ【音羽の滝】の水が水ではなく、お酒だと…どうして水ではなくお酒なのか?…その理由にネギ先生が深く関係している…うな気する

ウチは飲んだ量が少なく、最初の時は酔いつぶれていたけどバスの中に目が覚めたけど…バスの揺れで頭痛が悪化した

ゆーな達のように寝たままが良かった…頭痛い…誰かこれ止めて

《今日は厄日だな。食べ過ぎによる体調不良に蛙騒ぎで気絶して、トドメは二日酔いか》

「うるさい…アラストル、言わんでも分かってる」

《一応、迎え酒がいらしい》

「未成年に酒勧めるなんて最低や」

《悪魔だからな》

その通りだから言い返せない……………この、トカゲ！

《今日は随分と我が魔界の機嫌が悪いな……食事の後で構わないが、三ヶ月ぶりに権利を行使したい》

「……………何で？別に用あらへんやろ」

バレたら、最悪お払いされるのに……………

《仏語とお経程度で消えはしない……………京都の夜道を散歩したい》

「対価やから、しゃあないけど変な事しないでよ」

《誓いは守る、これでも他の奴らを律するのが仕事だからな》

その時、部屋の入り口の襦ひすまの向こう側から歩いて来る足音が聞こえ、直後に襦が開きアキラが両手に水の入ったペットボトルを持って入ってきた

「亜子？今、誰かと話してた？」

「え、独り言…まき絵とゆーながまだ起きないなあ…って、あは

は……」

「？、はい、まだ頭痛いと思うから水買ってきた」

「ありがとう」

アキラから片方の水のペットボトルを受け取りながら、バレていないかなと不安になった

話す相手はアキラには見えない……から、独り言で大丈夫だと思うけど……

《これからは心の中で我らに話しかけるのだな、魔界よ。我ら七柱、心が読めるのだから》

……分かってる、そんな事は何年も前から分かってます

「亜子？目が怖いよ」

「え……そうかな、あはは」

「変な亜子……」

「それより、アキラゆるいな達このまま夜まで寝てるんかな？」

「どうだろう……でも、多分寝ていそう」

「旅行前には散々、「枕投げするぞ〜〜！」って叫んでたし」

「目が覚めた後が怖いと言うよりは、うるさい?」

「…うん」

結局その後も裕奈達は寝たまま、ウチとアキラの二人で夕食に行きその後、ウチが昔アラストルに払った対価が行使された…対価、それは七柱の悪魔達が本当の力を発揮する為にウチが払った代償、ウチがアラストルに払った対価それは、肉体を一時的に使用出来る権利

そう言えば龍宮さんは…?」

- s i d e e n d -

夜、ホテル内・ロビー

- s i d e アスナ -

「それはつまり、また厄介事って事?」

「…はい、すみません」

私は今日の蛙騒ぎ清水寺での落とし穴にお酒…さすがに頭の悪い私だつてネギ関係で起こるのは分かるだから、旅館の休憩処で休んでいたネギとカモを問い詰めると、ネギは学園長に西の魔法使い？と東の魔法使いの親睦の為の親書を渡されていた、それを良く思わない西の人が奪い取る為に今日の騒ぎを起したらしい、それと皇帝と呼ばれている悪い魔法使いもいるらしいとか…

本当、ネギつて厄介事を持ち込んで来るわね……仕方ないなあ、もう

「……いいわよ」

「え？」

「手を貸すつて言ってるの他に頼れる人いないんでしょ？」

「あ、ありがとうございます…！」

ネギは頭を下げたり、ネギの肩にいるカモは跳びはねて喜んでたがカモが、クラスメイトの桜咲さんの事を聞いてきた何でも、彼女は西のスパイかもしれないらしい……

「そう言えば…このかつて桜咲さんと幼馴染つて言っていたよう
な」

「え！マジすか姐さん！」

カモが慌ててクラス名簿を開くと、何か名簿に書かれているのを見つけたらしい

そもそも一体、どこから持って来たのよ…そのクラス名簿

「手伝うのはいいとして……それよりもネギあんた昨日風呂入ったの？」

「え！？……も、もちろんですよ」

ネギの目は振り子のように右往左往している恐らく言い訳でも、考えているのだろう

嘘だ…絶対に嘘をついている

「はぁ……目が泳いでるわよ。馬鹿ネギ、話しより先にさっさと風呂に行く！」

「は、はい！行って来ます！！」

私がネギの背中を叩くと、大急ぎで風呂場へ向かって走り出した…ネギの姿が見えなくなっつつくづく思った

ほんとうに世話が焼けるんだから……………ま、何だかんだと言って世話しちゃう私も私なんだけど

その後、部屋に戻ろうと部屋の方へ歩き始めようとした時に、木乃香に出会いお風呂に誘われその時に思い出した

あ。そうだ、この時間帯は私達五班の風呂の時間だった……………まあ、いいか多分、大丈夫でしょ

- s i d e e n d -

同時刻、嵐山周辺の山中

- s i d e 長瀬 -

ホテルの外の山中で、拙者が日課になっている週一回の修行しているところで嗅ぎつけたか真名が現れ、その肩には見覚えのある大きな茶色のケースを担いでいた

「どうしたでござるか？真名」

「何、対したようじゃないさ……………腕試し程度にどうだ？楓」

「勝負でござるか…うむ、良いでござるよ。食券を十枚でござる？」

本当は四十枚ぐらい賭けたいところだ…生憎今、持ち合わせが無いから仕方ない

食券十枚に対して、真名は不敵な笑みを浮かべながらケースから一挺の拳銃を取り出し、それを右手に持ち、左手に腰のホルスターから野宿などで使うサバイバルナイフを抜いた

珍しいでござるな、銃が主流の真名がナイフとは…

「ふつ、随分と少ないな…なら、私は三十枚賭けよう。それで十分だろ!？」

真名は突然発砲してきたが、拙者もすでに戦闘態勢に入っていたので容易に弾丸をかわしながら近くの木の枝に飛び移り

「危ないでござるな」

「そのセリフは銃弾をかわせない奴が言っべきだ、お前が言っせリフじゃない」

「ニンニン、それもそうでござるな…」

油断は禁物でござるよ？真名

拙者はかわすと同時に、影分身を真名の背後に配置しそのまま真名を捕らえようとしたが……

「甘いぞ。楓」

真名は左手のナイフを瞬時に逆手に持ち替えながら、左腕を後ろに向かい振り上げながら分身の拙者の胸にナイフを突き刺すと、分身の拙者は薄っすらと薄くなり霧のように消える

「楓、この程度の密度の分身で私を捕らえられると思ったのか？」

「ふむ、今日は随分とやる気でござるな」

やはり、あのくらいでは無理でござったか……真名には魔眼もある、最低今の倍以上で……！

真名は考えている隙に、ナイフを投げると同時に右手の拳銃から二発連続で発砲し、その弾丸が拙者の左右の木の幹に当たった瞬間に、弾丸が拙者に向かい跳ね返った

「な!？」

「跳弾さ…お前には初めて見せる私の勝ちだ」

さて…どうしたものでござるか…ふむ

- s i d e e n d -

- s i d e 龍宮 -

私の目の視線の先には、敗北した楓がいるはずだった…今、私の目の前には敗北した楓ではなく私に勝利した楓だった楓は跳弾とナイフの二重の同時攻撃をかわした

そのかわし方は、極めて危険なものだ楓は正面から迫るナイフの前に倒れるように枝から落ち、その寸前でナイフの刃を掴みそのまま地面に着地すると同時に、高速移動術の『瞬動術』を使い刹那の速さで私の懐に入り、掴んだナイフを私の喉元に突ける寸前で止めた

「拙者の勝ちでござるな…」

「……ああ、私の負けだな。いい手だと思ったのだがな」

「いやいや、地面でならば確実に届いていたでござるな」

戦術の選択とタイミングを間違えたか…… まだまだ未熟だな

楓はナイフを私の喉元から外し、ナイフを私の左手に返し私はそのナイフを腰のホルスターに締まった

「ところで楓、手は大丈夫か？」

「ん〜。問題ないでござるよ、この程度」

楓はナイフを掴んだ手の平を見せるとわずかだが、血がにじみ出していた恐らくは氣で強化した状態で掴んだからその程度で済んだのだろう…もし、強化なしの状態でそのまま掴んでいたら確実に血が噴出してたそれこそ病院で何十針も縫うほどの大怪我に

「すまないな……」

「いやいや、拙者もこの程度の怪我で、真名の手の内が見れた上に食券も手に入れたのなら安いものでござるよ。ニンニン」

「そう言ってくれるなら、こちらも気が楽だ」

こちらは食券三十枚は痛い出費だがな……

「では…旅館に戻り早速、食券を」

「《双方、いい勝負だった。実に才に溢れているな》」

「「!?!」」

私と楓が同時に左を振り向くと、視線の先の闇の向こうに光る二つの眼がこちらを見つめていたその瞳の色は、空に広がる青空のような綺麗で澄んだ青色だが同時に、その青色を塗りつぶす深海のよう、暗く沈み黒い感情を含んだ瞳

眼があつた瞬間に私達は戦闘態勢に体と気持ちを切り替えながら、その正体の全貌が見えるのを待ち……ものの一分も経たずに全身が月明かりに晒された

その姿は黒いローブで全身が包まれ、手に白いフィンガーレスのグローブを着けていた……見た瞬間に私は確信した昨日の夜、学園に入った侵入者だと

- side end -

？ あの後の彼女達（後書き）

一万アクセスありがとうございます
次話は真名&楓対アラストル戦です
投稿予定日は明後日

? 人間対悪魔

- s i d e 亜子 -

ああ、どうしてこうなってしまっただろう……

アラストルに体を一時的に貸してから、三十分ぐらいほど過ぎて今は旅館から少し離れた山の近くを散歩していた七柱の悪魔達に体を貸すと、瞳の色がそれぞれの焰の色になる

アラストルの焰の色は青色で、その為ウチの瞳は青色で暗い所にいと瞳が光るようになっていてこれは七柱共通

だから、あんまりその状態で外に出てほしくないけど、夜は怖いからそれに体を貸すと自分から何も出来ないし……時間制限付きだからまだいいけど……でも、今この状況はないやろ、何で龍宮さんと長瀬さんと戦うような事になる？

- s i d e e n d -

- s i d e アラストル -

今、我は魔界（亜子）の級友とにらみ合う状況にいる理由は恐らく、昨日の学園の散歩が原因だろう……こちらは単に二人の戦闘を賞賛しただけなのだが……どう受け取ったのか明らかに警戒していた

「《そう警戒するな、昨日の件は不可抗力だ。こちらはただ散歩しただけだ》」

「それを信じると？……お前は皇帝とどう関係してる？」

疑い深いな……あの色黒、糸目も警戒を解いてない、そもそも皇帝とは誰だ？

「《我はただはじめての京都を散策していただけだ》」

「悪いが、信じられない。それにお前には昨日負けたからなりべンジさせてもらう」

信じてくれず色黒は腰のナイフを抜き、糸目も苦無^{くない}を逆手に持ち構えていた

仕方ない…魔界には悪いが両手を前に広げながら、我は堂々と二人に向かい宣言した

「《相手をしよう…ただし、命の保障はしないぞ？半人半魔^{ハーフデーモン}と忍者？》」

我が色黒の種族を言い当てると、酷く驚き隣の糸目の忍者？は首をかしげている

どうやら、色黒は自分の事を仲間に話していないようだな……ん？

半人半魔ハイフデーモンと忍者は先手必勝とばかりに、攻撃を開始した

人の身のみまで勝てると思っっているのか……色黒？

- side end -

- side 長瀬 -

真名とほぼ同時に、真名はナイフ拙者は苦無くぬいを黒衣の者に投げ飛ばした敵意の類は感じられないがあの者の人でない、物の怪の類が放つ異質な不安感が拙者の心に届き思わず真名につられて投げた
まった

攻撃して良かったものでござろうか……それよりも半人半魔ハイフデーモンとは何でいけるっ？

投げられた二つの刃は真っ直ぐに黒衣の者に届く寸前まで迫り、このままだと頭に刺さってしまうが黒衣の者はかわす様子もなくただ一言つぶやいた

「《【裁断】》」

「「!?!」」

言葉を発した瞬間に、ナイフと苦無はガラスが砕ける音をたてながら二つに分断され力なく地面に落ちた真名も予想外だったらしく驚いていた

だが、黒衣の者は唯一伺える青の瞳に笑みを含んでいた

「《様子見で投げたのなら、損をしたな…この身に傷をつける事は出来ないしさせもしない》」

「この身…お主は何者でござる、もしや魔法使いでござるか?」

「!、楓、お前……」

「《忍者と呼べばいいか、生憎と思っている者とは違う……我はそう…悪魔だ》」

「悪魔とは、また恐ろしいでござるな…十字架を持ってくるべき

かな？」

拙者が、眼を開きながら冗談を言つと黒衣…悪魔は少し笑つたように見えた

「《無知は恐ろしいな…だがこの類の人間は嫌いじゃない、なまじ知識を持ち過ぎると人は悪魔を悪い者と思う輩が多いか…》」

話しの途中で真名が横に飛び連続で三発を発砲し、その弾丸は正面の悪魔ではなく全て木に当たり跳弾して、悪魔に迫るがそれでも悪魔は動かずにただ一言、裁断と……

それだけで三発の弾丸はガラスの碎ける音と共に真つ二つに割れ地面に落ちる

「《危ないな…色黒、我でなければ死んでいたぞ》」

「黙れ…」

「どうしたでござるか真名、いつもの真名ではござらんぞ」

一体、真名に何があった？

「《私の氣に流れる血が当てられたようだな…仕方ない、許せ

我が魔界よ。【縫合】》」

「「！」「」

縫合と悪魔が言った瞬間に真名の体が、磁石のように悪魔の方へ引き寄せられ、慌てて真名の方へ手を伸ばしたが間に合わずに引き寄せられ、悪魔が真名に触れた瞬間

「《【裁断】》」

「がっ！」

真名の体は電気ショックを受けたように、体をビクンとさせて力なく地面に倒れた

「真名！！」

「《安心しろ…【裁断】で一時的に意識を寸断しただけだ》」

「……嘘は無いでござるっな？」

「《誓おう、我が魔界の名誉にかけて…な》」

微妙でござるな、神ではなく魔界とは……また

「《神は嫌いだからな》」

「!?!?.....お主、もしや心を」

悪魔はフードの奥に隠れた鼻で笑いながら、背を向け

「《では、我は散歩の続きをさせてもらおう、長瀬楓……機会があればまたいずれ》」

拙者は去る悪魔に何も言わずに、ただ見つめるだけだった

……結局、あの者は敵意も殺意もなく、拙者達の相手をしただけ……本気は必要ないと思われたのでござるな。しかし……真名に流れる血とは一体……?」

- side end -

- side アラストール -

二人との戦いが終わり、我はさらに三十分ほど散歩をしてホテルに戻るうとホテルの対岸にある【渡月橋】の前まで来るとホテルの方から、何か大きいものが猛スピードで走ってきた

「《サル…?》」

最初は馬鹿に大きいサルと思ったが、それは頭の大きなサルのぬいぐるみを来た眼鏡の女、その手には浴衣を着た黒髪的女子を抱えていた

そのまま橋の中心部分でサル眼鏡と鉢遭い、向こうは何故かこちらを警戒していた

「《確か…近衛木乃香だったか…なぜ?》」

「!、あんたもあいつらの仲間かい!？」

「《何の話しを…》」

「とぼけたって無駄や!邪魔するなら容赦しないえ!前鬼!後鬼!」

サル眼鏡は二枚のお札を投げると、可愛い熊とサルのぬいぐるみが現れた

「《式神…か》」

「そや!詠唱してる暇は与えんてえ!!行け!」

あのサル眼鏡は我を魔法使いだと勘違いしているらしく、彼女が式神を我に向けてきた

まあ、肉体は人間だからな…分からなくもないが、心の中で騒がないでくれ魔界よ

「《自衛だからな、苦情はきかないぞ眼鏡【裁断】》」

「!?!」

裁断を発動して、二体の式神は断てに切り裂きその瞬間、煙が噴出した。ただの紙に戻り、サル眼鏡は突然の反撃に、驚く間にとりあえず近衛木乃香を助けようと【縫合】で磁石のようにこちらに引き寄せた

「な!?! なんやその力!?! あんた何者や!」

「《とりあえず……いや、めんどくさいから名乗りは無しだ【縫合】》」

「ぐへえ!?!」

サル眼鏡をとりあえず橋に縫い付ける…女性とは思えない声を上げながら、サル眼鏡は必死に立ち上がろうとしたが女性の力では、

到底私の【縫合】は解けない

もし解けるとしたら、大魔力で解除魔法を使用するか、もしくは破壊の力がなければまず不可能

「《無理するな、その程度の腕力じゃ不可能だ…天ヶ崎千草》」

「!?、何でわたしの名前を！」

「待てー！ー！！」

天ヶ崎は自分の名前を呼ばれて、当然のように驚いたちよつどその時ホテルの方から声が聞こえた。ここまで届くとしたら余程の大声だ

「!、逃げなあ、あかん！あんたこれ解けえ！」

「《自然に解けるからそれでいいだろ?》」

「あほ〜！ワタシはお嬢様の誘拐犯やで!? 捕まったら牢屋行きや！」

当然ではないのか？それは？

「当然みたいな顔しはるな！顔見えへんやけど！」

天ヶ崎は凄い剣幕で怒鳴る…このまま来るであろう人物に渡してもいいのだが

我も甘いな……

「《分かった、とりあえず逃げられればいいのだから》」

「そ、そっや……」

「《【裁断】》」

「へ？」

我は天ヶ崎の周囲の橋板を囲うように切断したその為、すっぽりと天ヶ崎は下に落ちていくだろう天ヶ崎もそれに気づいたらしく、顔が青ざめその間にも板は音をたてている

「《礼はいらない。下は川だ…少々増水傾向だが、その板なら多分乗り切れるだろう》」

「あ、悪魔や…あなたは悪魔や」

「《悪魔だからな、この場合はグットラック？と言うべきか》」

そして、橋板は天ヶ崎と共に川に落ちて流されて行く……天ヶ崎は何かしゃべろうとしたがその前に川に落ちてしまった為に聞こえ

なかった

ふう〜……我が魔界よ、もう疲れたので体を返す

- side end -

- side 亜子 -

「うわぁ
」

突然アラストルが、このかを抱えたまま体を返した為によるめき倒れそうになった

《あぁ、すまない》

急に返すのは、やめてほしんやけど？

《善処はさせてもらおう魔界よ、お詫びとして我の能力を旅行の間使えるようにしておこう》

なんでそないに気前がええの？

《そう疑うな魔界よ、今日はそれなりに楽しめたからな》

……出来れば戦いたくあらへんのやけど？

《それは気に食わないが運命しだい…それよりも意識をこちらに
向けすぎでは？》

え、何で？

「あ…」

「動くな、このままじっとしてもらおう」

意識を外に向けると、浴衣姿の桜咲さんに刀の刃を喉に付けられ、
その後ろに同じく浴衣姿の明日奈とネギ先生がにらんでいた

ああ、もう何でこうなるのかな……不幸やんウチ

- s i d e e n d -

？ 人間対悪魔（後書き）

戦闘はやっぱり書くのが苦手でした
次で初日は終わる予定です

？ 新たな不安（前書き）

これで初日は終わりです
では、どうぞ

? 新たな不安

- side 刹那 -

「聞いているのか?では、そのままゆっくりとお嬢様を下に置け」

今、私の目の前には昨日の夜に高畑先生より聞いた学園内部に侵入したと思われる黒衣の女が、一番、大切な木乃香お嬢様を抱えていたが私の言葉に従いゆっくりと床に置いた

まさか、京都で会うとは予想外だが、先に縛るべきか…いや、まずはお嬢様を奴から離す

「神楽坂さん、すいませんがお嬢様をこちらの方へ…」

「あ、うん」

「貴様は動くな、もし動けば確実に斬る」

神楽坂さんは、黒衣の女に近づき木乃香お嬢様を抱きかかようとするが、黒衣の女に動きはない。そのまま木乃香お嬢様を抱え、ネギ先生の後ろへ避難した

避難した事を確認し私を捕縛する為、黒衣の女に徐々に近づきながら間合いを詰める、相手は麻帆良学園の?2である高畑先生から

逃げ切る程の人物、油断は禁物

もしかすると、西と繋がりがあるかもしれない……だがまずは顔の確認、高畑先生は学園の生徒かもしれないと言っていた

「そのフードを取り、顔を見せろ」

「……………はあ、そないに睨まんでも取るよ、桜咲さん」

「なに？」

黒衣の女は私に警戒する様子もなく、フードを何気なく取りその素顔を見せた……フードの下にあったのは同じクラスメイトの和泉亜子だった

私だけではなく当然後ろにいるネギ先生達は口を開けて呆然としていた当然と言えば当然、私もまさかクラスメイトが侵入者だとは夢にも思わなかった……

いや、本当に彼女とは限らない……今、目の前にいるのは幻術か式神の類かもしれない

「とりあえず、本人と言う証拠をだせ……………」

「証拠……………ウチの背中には傷があるはダメ？それとも携帯で明日菜に電話する？」

「……いいだろう、なら聞こう。ここにいる目的は？」

私の言葉に彼女は、しばしの沈黙をおいてからはっきりと答えた

「目的なんて無いよ、ウチはただ夜の京都を散歩してただけ……」

彼女はいつも友達に見せる笑顔で答えた

- s i d e e n d -

- s i d e 明日菜 -

私は突然の出来事に驚いてネギと一緒に開いた口が塞がらない……

一体、どうゆう事？亜子ちゃんが魔法使い？だって新幹線の中で気絶してたのに……そもそも全然魔法使いに見えない

「ねえ、亜子ちゃん本当に魔法使いなの？」

「ん〜、多分？」

「多分って…ほら、呪文とか筈で空飛ぶちとか…できないの？」

私の言葉に苦笑いしながら、困ったように答えた

「はは…それが基準ならごめん…明日菜、ウチそれできひん」

謝らなくていいけど…なんかショック

「ねえ、あの時新幹線で気絶したのも嘘なの？」

「嘘やないよ、嘘ついても意味あらへんやん」

それもそうだよな、亜子ちゃん気絶しても意味ないよね

「あの…皆さん、ここで話すのも何ですからホテルに戻りましょう。このかさんも戻って来ましたし」

ネギはホテルに戻ろうと言ってきたが、桜咲さんはまだ刃を亜子ちゃんの喉に付けたまま

「桜咲さん…戻ろう。浴衣のままじゃ私達、風邪引いちゃうよ？」

「…分かりました。話はしてもらっぞ」

「そんなににらまないで、目が怖い」

桜咲さん、すごく目が釣りあがっているけど…亜子ちゃんも全然刃を怖がってない

私達はホテルに戻る途中で、あのサル女の行方も気になったけど橋に開いた穴も気になったちょうど、一人が入る大きさの穴

「ねえ、亜子ちゃん？ここで眼鏡をかけたサルのきぐるみ着た女知らない？」

「あゝ、その人なら橋から落ちて川へ流された…いうよりウチが…流した」

「ええ！どうやって!？」

「正確に言うとウチじゃなくて、アラストルが勝手に動いて本人は気を利かせたつもりだけど、あれは大きなお世話やったな」

「『アラストル?』」

亜子ちゃんの言葉に私達は首をかしげると、「ホテルで話す」と言っ
って詳しく教えてはくれなかった

- side end -

- side ???? -

あゝ、暇やな……なんで、オレ出番ないんかな

オレは今、標的の西の長の娘がいるホテルの近くの川のかなり下流の方にいた

「釣れへんなあゝ」

そもそも、増水した川で釣りするべきじゃないか川底見えへんし……仕方ない、アジトに戻っても暇なんやけど……いんのあの白髪の奴だけだし、直兄ちゃん、眼鏡のねーちゃんもいないし

「ここにいても、釣れんし戻るか」

帰ろうと釣竿の針を手元に戻ろうと竿を引っ張った時に、釣竿が動いた

どうせ、木の枝かなんかやる……ん？引っ張った……また引っ張った

「おお！釣れとる！！にがさへんで〜！！」

オレは釣竿を改めて強く搦んだ、増水した川の力は改めて思いの他強いと感じた……せつかくの大物を逃がすわけにいかない……なぜなら、晩飯がかかっているからだ

「うおりゃあああああ！！！」

オレは気を全開で放出し体を強化して、力の限り竿を振り上げた竿の先には大きな魚……ではなく、泥水に塗れびしょ濡れのオレの雇い主千草姉ちゃんだった

「何してんねん、千草姉ちゃん？…水泳か？」

「あほかあああ！！こんな川で誰が泳ぐかああ！！！」

釣竿の先で怒りの四つ角を浮かべて暴れる千草姉ちゃん、竿がとても激しく揺れている

「姉ちゃん……そないに暴れたら糸が切れるで？」

「へ？」

プッチンと何か切れる音が聞こえた…間違えなくそれは糸が切れる音、何故なら切れる音と共に千草姉ちゃんが川に落ちたから…千草姉ちゃんは何か叫びながら、さらに下流の方へ流されて行く……

「じゃあないな、世話の焼ける雇い主やな。ほんま」

オレは流されてしまった千草姉ちゃんを追った……

- s i d e e n d -

亜子達がホテルのロビーで会話終了後から数十分後の麻帆良学園校長室

- s i d e 高畑 -

本当に色々忙しいな、明日の朝は出張だというのに学園長も人使いが荒いな

僕は学園長に言われ、彼女…和泉くんに関しての資料を学園長の待つ執務室へ歩いていった資料と言っても、分厚くはなく紙がほんの十枚しかない

まさか、和泉くんが皇帝の関係者か…正直予想外だ。それよりも驚くのは彼女が麻帆良に来る前の経歴だ、恐らくは七つの魔焰セブン・ブレイズの為の……

そんな考えをしている内に学園長の待つ執務室のドアの前に着き、ドアを数回叩きながら

「失礼します」

「うむ、高畑くん…でどつじゃ？」

「これです」

執務室の窓で外を見ていた学園長に資料を渡し学園長は、一枚をほんの数秒で読み終わり一分とかがからずに全てを読み終わり、読み終わった学園長は顎のひげを撫でながら

「中々、波乱の人生じゃのう」

「波乱と言うより、痛みばかりの人生ですよ…恐らくこれは七つの魔焰セブン・ブレイズの制御の為だと思います」

「大罪を司る七柱の悪魔達の制御その為に、麻帆良に来る前の八年間で重度の火傷で八回の長期入院、中度の火傷の入院では少なく

ても十回以上さらに…マッシュタル・アーツ総合武術も学んでおるとは……苦痛ばかりじやな」

入院日数だけでも、合計四年近い…和泉くん……辛かっただろうにそれに

「いつも、体の何処かに包帯を巻いていた為か、クラスメイトにかなり気味悪がれたみたいです」

どうして彼女の両親は何もしなかったのかと思うところだが……知る限りの歴史上に、七つのセレン・ブレイズ魔焰を持つていたのは、彼女に【七罪の欠片】を渡した皇帝ただ一人……ほぼ、一般人の彼女の両親にはどうする事もできない

「……彼女の家族は？詳しく書かれておらんかったが？」

やっぱり、聞いてきた

「魔法使いの家系ではありませんでしたが、間接的な関係で魔法の事は認知していたようです。ただ和泉くんには話していませんでした。そうです…それと一つ問題が」

「問題じゃと……なんじゃ？」

「母親に聞いたのですが、和泉くんの兄…和泉直人君は【なあと神鳴流】に所属しているようです。それも今は仕事で京都にいます」

もしかすると……今回の件に關与している可能性もある

学園長もそれに気づいたのか、髭を触るのをやめて夜空を見ながら

「出来ればこちらの思うような、展開にちゃんと良いのお」

「はい…今はネギ君達の頑張りと幸運に期待するしかありません」

「これも運命のいたずらかのお……」

なんとも言えません……こればかりは

- s i d e e n d -

？ 新たな不安（後書き）

原作に存在だけ確認されてる亜子の兄を出します
これから書くペースが落ちるかもしれません

? 次なる手(前書き)

四日ぶりの投稿です

今回は説明が中心の回です

? 次なる手

修学旅行二日目 ホテル・嵐山 ロビー

- side 明日菜 -

「ネギ、これに載っている事本当なの？」

「はい、学園側で簡易的に調べた和泉さんが学園に来る前の経歴です。もう少ししたら、もっと詳しい資料が来るはずですよ」

私とネギそれに桜咲さんあとカモの三人と一匹は、朝食後のロビーでソファアールに座りながら早朝ネギ宛に送られてきた亜子ちゃんの資料に目を通していた

正直、最初は目を疑った。Aで多分本屋ちゃんの次ぐらいに押しが弱い…と思う、亜子ちゃんにこんな過去があったなんてとても信じられなかった

「この七つの魔焰は昨日の夜に亜子ちゃんが言っていた皇帝セブン・プレイズって呼び名の魔法使いからもらった力なのよね？」

私が資料の紙を突付きながら、ネギに質問するとネギよりも先に力モが答えた

「そうっすよ、姐さん。七つの魔焰は、セラン・ブレイス皇帝と呼ばれる悪の大魔法使いが持っていた特殊な炎の魔法でその炎に触れたが最後、魂すら残さない地獄の業火に焼かれると言われているんだ」

「後、この資料には七つの魔焰は七柱の悪魔の総称であり七柱の悪魔がそれぞれ持つ炎の事とも書かれています…これは昨日和泉さんが言いましたね？」

今のね？は、私がちゃんと名前を全部憶えていますか？のつもりなのネギ

「え〜っと、アシユタロス、マモン、アラストル…あ、ベルゼブブと…何だっけ？」

「ベルフェゴール、リヴァイアサン、ベリアルっすよ。姐さん名前くらい憶えてないのはヤバイっすよ？」

カモなんか心配された…ショック…でも、しょうがないでしょ、勉強嫌いなんだから！

カモに頭の心配をされて内心少し傷つきながらも、カモの体を踏みつけ話題を逸らそうと資料の最後のページを黙って見続ける桜咲さんに話しかけた

「どうしたの桜咲さん？さっきからずっと、同じ資料を見て…」

「え……あ、いえ、その少々この和泉さんの兄が私と同じ神鳴流なのが気になって……」

「和泉直人さんですか？聞き覚えがあるのですか？」

ネギの質問に桜咲さんは、はっきりとは答えずに悩みながら思い出すように答えた

「私が学園に来る前の……まだ修行中の時に神鳴流の宗家【青山】の道場の門下生に確か……その名前があった気がするんです……すいません、宗家の道場は七年近く前に見たのではっきりとは……宗家の道場は剣道道場として一般の方も門下生として入門出来るので、たまたま一般の方に同じ同姓同名の名前があった……ならいいのですが、もし和泉さんの兄が宗家【青山】の門下生なら、かなりまずい状況になります」

「ど、どう……まずいのですか？」

真顔で、私達を見つめる桜咲さんにネギが質問すると間を置いて後に説明した

「昨夕お話した通り、私達、【京都神鳴流】は掛け値なしの恐らくは日本最強の戦闘集団です。その中でも【青山】の門下生は、各地の神鳴流道場の中でも選りすぐりの者を集め現・当主自ら指南している場所……つまり、才ある者達の集まりです。その実力は各道場の師範に匹敵すると言われ、さらに中には西洋魔術と神鳴流を組

み合わせて戦う者もいると聞きます…もし、この和泉直人が私の見た【青山】の門下生なら…今の私では恐らく太刀打ちできません」

「え!?!…でも、桜咲さんは岩を真つ二つに出来たじゃないですか。あれでも十分に凄いのに」

「……ありがとうございます。ですが、あの程度の技は初歩の一つです」

ネギの言う通り旅館の露天風呂にある岩を桜咲さんは、刀で真つ二つに斬つたらしい

一般人の私から見たら十分に凄い…そしてその岩をくつつけたネギあんたも凄いわよ

桜咲さんは特に答えずに視線を下を向きながらソファから立ち上がり、私達に背を向けながら

「ネギ先生、神楽坂さん、私は念の為に先に東大寺に行き見回りをして来ます。それでもしもの時はお嬢様をお願いします」

「え!、あ…桜咲さ」

「失礼します」

そして桜咲さんはこちらが言う間もなく、足早に出入り口を通り外へ行ってしまい慌てて、私は後を追ったがすでに外の道にはどこにも桜咲さんの姿はなかった

行く前に私の事を苗字で呼ぶより、名前で呼んで欲しいと言おうとしたのに……

- s i d e e n d -

- s i d e 亜子 -

「どうしよ、アキラ？」

「とりあえず待った方がいいと思う……裕奈はどうしたらいい？」

「うん……思い切って置いていくのはダメかな？どう思う龍宮さん？」

「どちらでもかまわない……だが、あまり遅くなると時間通りには回れなくなるぞ」

ウチら四班はある問題を抱えていた……それは、朝食に起きたネ

ギ先生を誘つての京都巡りで宮崎さんに負けたまき絵と何故かこの部屋にいる、いいんちよと共に負けたのが悔しいのか突如行きたくないと言ひ出した

「なあゝまき絵、はよ行こう……それにいいんちよは自分の部屋に戻つて」

……… 那波さんが怖いから

「うう、まさか本屋ちゃんに負けるなんて……」

「本当にまったくのノーマークでしたわ……ああ！ネギ先生！今何処に！」

まったく聞いてない……完全に自分の世界に入つてる

ウチらが悩んでいると、ドアを叩く音が聞こえウチがドアを開くとそこにはいいんちよと同じ班の長谷川千雨がいかにも、面倒くさい事は嫌いな顔でそこにいた

「和泉か……悪い、ここにいいんちよの奴はいるか？」

「おるよ。ちょうど良かった……ウチらも扱いに困つてるところ」

「そうか、いいんちよの奴、勝手に何処かいきやがって……仕事しろよまったく」

そして長谷川さんは部屋に入ると、早々にいいんちよの服の襟を
掴み何も言わずに、いいんちよを引き釣りながら部屋を出て行った
……途中の通路でいいんちよが抵抗すると、長谷川さんは有無を言
わずに拳骨で大人しくした

ウチには出来ない……まき絵を殴るなんて

その後龍宮さんが護身用のスタンガンを取り出し、まき絵は奇声
を上げて気絶し、力持ちのアキラがまき絵を背負ってウチらようや
く四班の二日目はスタートした

でも、龍宮さん本当にそのスタンガンは護身用？

- s i d e e n d -

同時刻 京都市内 天ヶ崎のアジト

- s i d e 天ヶ崎 -

「へ〜ぐつちゅー!」

「変なくしゃみするな、千草姉ちゃん」

【渡月橋】から川に落とされてから、十数時間後：私は自分のアジトに戻っていたアジトが京都都内のマンションとはさすがの東の奴らも思っまい……

そして今は今回の計画の為に金で雇った三人の内の一人、犬耳の狗族の少年、犬上小太郎が呆れるように私のくしゃみを馬鹿にしていた

「うっさい！、あんたがはよ助けんからやコタロー！」

「しゃないやろ。川の流れが速くて、捕まえられんへんかったんやから、オレに言っな」

「相変わらずガキのくせに生意気やな、もう一人のガキとは大違いやな」

私の言葉にコタローは少しむっと顔をしかめながら、視線を移した

「あいつが変なんや…妙に達観している感じするし、何より鉄火面過ぎや」

まあ、確かにあいつは少しも子供っぽさがまるでない

今回の為に、このコタローを除き金で雇ったのは後二人。小柄で大太刀と小太刀を使う、【京都神鳴流】の使い手月詠…コタローも戦闘好きだが、月詠はそれに以上の戦闘好き、血と戦いを求める戦闘狂で昨日の誘拐計画では京都駅で待機していたが、私が最初に木乃香お嬢様誘拐を失敗した為出番がなくふて腐れていた

そしてもう一人、月詠と同じ【京都神鳴流】の使い手でそのほとんどが太刀を武器にする神鳴流の中でも数少ない槍使い和泉直人…こいつは宗家【青山】のところの元・門下生で三人の内で、一番高く雇った。彼は【青山】の門下生の中でも際立って強かったらしく、詳しくは知らないが宗家の一人を模擬戦で半殺しにしたらしい…それで破門されたと聞いた

その三人とは別に、協力という形で私に手を貸しているコタローが毛嫌いしている子供、西洋の魔法使いで日本にはイスタンブールの研修生として来た白髪の子供、フェイト・アーウェルンクス。正直こいつの正体はよく分からないとにかく謎だらけの奴としか言えない

「なあ？千草姉ちゃん、今日はどうする」

「…決まってる。昨日は邪魔されたやけど、今日はお嬢様の護衛の神鳴流の小娘を叩く…そすればお嬢様を簡単に誘拐できる」

「でも、確かオレと同じ年の魔法使いがあるやろ？あいつどつする？」

コタローの言う魔法使いネギ・スプリングフィールド…大戦の英雄
ナギの息子で木乃香お嬢様のクラスの先生

そもそも、九歳のガキに中学のせんせをやらすなんて東の奴らは何
考えてるねん……

「所詮は見習いの魔法使いや…まあ、大戦の英雄の息子やし魔力
もそれなりにあるみたいやから……コタローあんたに任す。好きに
したらええ」

「……分かった好きにするわ」

そしてコタローは部屋から出て行った……

嬉しそうに尻尾ふって……まあ、ええみとれよ東の奴ら、今に目に
モンみせたる！

- s i d e e n d -

？
襲撃

東大寺 南大門

- side 剎那 -

木乃香お嬢様達が来るまで予定通りなら、後三十分後か……

私は今、東大寺の南大門前の階段に腰を下ろして少しばかりの休憩をしている旅館でネギ先生達と別れてから大体四十分ほどが過ぎ

今の所は、西の者：天ヶ崎千草が仕掛けたと思うような真新しい罠の類は無く、あるのは昔の陰陽師達が仕掛けたと思われる結界などの痕跡だけで、特別に危険な物はなかった

さすがに天ヶ崎千草も国宝や世界遺産を巻き込むような、攻撃性の高い術は仕掛けないだろう：仮にもここは関西呪術協会が寄付している場所の一つであり、京都が世界に誇る物の一つなのだから

とりあえずは、大丈夫だろう：もし、急な襲撃でもお嬢様は必ず守ってみせる、それにネギ先生や神楽坂さんもそばにいてくれるもし、仮に私がいなくなっても：って、何を考えているんだ私は

「もう戻ろう：一人だと変な考えをしてしまう」

立ち上がり、お嬢様の下に戻ろうとした時、ふと耳鳴りが聞こえた瞬間に風を切るような音も聞こえたと同時に、私は頭を右に振ると横を何かが通り過ぎ地面に突き刺さったそれは刃渡り三十cmほどの小太刀だった

愛刀の野太刀【夕凧】を抜き周囲を警戒する……必要はなかった何故なら、敵は私の目の前に堂々と現れたからだ

中学一年生ほどの眼鏡をかけた華奢で非力そうな肢体に長髪、フリルの沢山付いた黒のロリータ姿に、右手には標準的な長さの刀を持っていた

「おはつに、月詠います」

「天ヶ崎千草の手下か……」

ずいぶん変わった服装をしているな

「はい、あなたも神鳴流の先輩さんみたいですけど、雇われたからには本気でいかせてもらいますわ」

「あなたも…貴様も神鳴流の使い手か、生憎ここにお嬢様はいないぞ」

「いえ、今日の仕事は先輩を先に沈めておけと言われたのでお手合わせ願いますわ」

なるほど、護衛の私を先に倒して後でお嬢様を奪うつもりか……

「させると思っているのか？」

「します〜…では〜 行きます〜」

月詠は開始の合図と同時にほぼ完璧な【瞬動】で私に近づきながら、地面に刺さる小太刀を左で抜き取り間合いに入る時には左手の小太刀を振り上げ、右の大太刀を振り下ろすその先には、【夕風】があつた

「にとつ・つじたていつせん〜」

この技は…まずい！

月詠の狙いは二刀で【夕風】を挟み折るつもりだと、バックステップで後ろに下がり直撃は回避したが、スカートの一部が少し切れるがその程度では月詠は満足せずに、さらに追い討ちを仕掛け、今度は大太刀と小太刀を逆手に持ちそのまま飛び上がり高速で前転をしながら近づき、二刀の刃を獣の牙のように私に向けて振り下ろす

「おうぎ〜くうてんそうが〜」

「くっ!」

【夕風】の峰の部分で、月詠の二刀を受け止めると同時に甲高い

金属音が響くと同時に、私は【夕凧】を振り上げて月詠を吹き飛ばすが月詠は空中で一回転して綺麗に着地した

「力持ちですね、先輩」

「斬空閃!!」

すかさず、着地したばかりの月詠めがけて、氣の刃を飛ばす威力よりも速さ重視の斬空閃をそれで月詠の体勢を崩し一気に反撃するつもりだったが……

「えい、れっしゅうざん?」

「な、あの状態で!?!」

月詠は右足を振り上げると、氣の刃を飛ばし私の斬空閃とぶつかり合い相殺して消えた

「危ないですわ、先輩」

強い……かなりの場数も積んでいる……強敵だが負けるわけにはいかない

「雷鳴剣!」

「にとつゝらいせんけん〜」

高圧の雷を帯びた野太刀と、雷光の如き鋭い速さの突きを放つ二本の刃がぶつかりあい雷撃を撒き散らし周囲を破壊していく……

- s i d e e n d -

- s i d e 和泉直人 -

思いの他、良く粘るな…流石は近衛詠春の愛弟子で近衛木乃香の護衛役だな

桜咲と月詠の戦闘を五百mほど離れて観戦していた、おれは一般人が巻き込まれないように広域の空間を隔離する結界を張っていた

空間を隔離する事で、呪術協会の陰陽師や近辺に在住している魔法使い達に魔力を察知されないようにする目的と必要以上の周囲への破壊を抑える為もし、気づく者がいれば、それは鋭敏な魔力感知能力を持っているか余程の使い手だけ

月詠の奴、楽しんでいるな…少し派手にやりすぎだな、いくら隔離

結界があるとはいえ……

視線の先には月詠の連続攻撃を刃で受け止めたり、剣が振られる前に月詠の手を掴み動きを封じる桜咲が映る少し息が上がっているように見え対する月詠は息が上がっているように見えない

まあ、雷鳴剣は大出力の剣技の上、月詠の二刀に目を配らせないといけないからな、精神的な負担もあるのだろうとはいえ月詠みには決定的な弱点があるしな

そこを突かれたら最後と思いながらも、助ける気持ちにはなれなかった…というよりは、助けたら邪魔したと言って攻撃してきそうな気がした

それでも、いざと言う時は助ければいいか……出番はないかもしれないが

それからさらに二人の攻防は続き、ちょうど戦闘から二十分が過ぎたあたりでついに勝敗が決する偶然が起きた

二人は戦いながら移動し、戦いを始めた場所である南大門の前に戻ってきた時に【雷鳴剣】と【二刀・雷閃剣】のぶつかり合いで砕けた地面の破片に桜咲が大きく足を滑らせ、バランスを崩しそこをすかさずに月詠はチャンスとばかりに一撃を加えようとしたが桜咲が足を滑らせた際の破片が月詠の弱点である、眼鏡に当たり結果眼

鏡がズレ月詠は攻撃をやめて眼鏡の位置を直そうとした瞬間桜咲の【烈蹴斬】が月詠の腹部に突き刺さり、月詠は地面に体を擦りつけながら十mほど飛ばされたそして悶えていた

月詠の弱点、それは眼鏡が無いとほぼ何もはつきりとは見えない……だから、月詠は眼鏡のズレなどに凄く過敏に反応する

今回は運が味方してくれたな……だが、ここからは不運だな

「来たれ、槍よ」

おれは魔法使いが使う、杖を呼び出す呪文を唱え本来は杖の部分を武器である槍を呼び出した、呼び出した槍は投擲に向いている刃と柄が極端に短いほぼ、棒手裏剣に近い【手投槍】を呼び出した……そして約五百m弱先にいる桜咲の脇を目掛け投擲した

当たるまで三秒もかからないだろう……

- s i d e e n d -

- s i d e 刹那 -

これで終わったはずだ……

私は十mほど先で腹を押さえ悶える月詠に注意しながら、自分の状態を確認した大きな傷はないが細かい傷は腕と手に集中し、そしてベスト、シャツ、スカートは血で汚れたり破けている為、もう使い物にならない

何処かで調達しないと、このままではお嬢様達に会えない……どうしたのか

その時、脇腹に鋭い痛みが全身を走り抜けた……視線を自分の脇腹に移すとそこには三十cm弱の短い槍が刺さっていたそれを見た瞬間に視界が歪み、私は全身が痺れて地面に倒れた

これは毒か！……油断した、どうして月詠以外に敵がいると考えなかった！！

自分の考えの甘さに苛立つも急いで回復しないとこの状態がまずい事は分かっていた

「解かないと……」

「安心しろ。それには猛毒はない……だから解毒なんてしても無駄

だ」

「誰……だ……」

私の横側から二十歳前後で、茶髪に右耳だけにピアスを付けその手には三mはあるだろう槍を持っている男が現れた

「和泉直人……桜咲刹那、恨みはないがこちらも仕事だ。悪く思
うなよ……」

和泉直人！？まさか和泉さんの兄……神鳴流が二人も……！

意識が突如、途切れようとして慌てて立て直そうとするが毒が強い為
か意識が消えようとする

「耐えるな、素直に堕ちろ。命は取らないせいぜい、戦えないよ
うにするだけだ」

「だれっが……お嬢様……の為に……」

「……はあ」

私の言葉に和泉直人は少し呆れたようにため息を吐き、そして私に
とってとんでもない事を言った

「……お前は桜咲久遠くおんの双子の姉だろ？」

「!!!? …… なっ！」

久遠……だと、まさか、そんな

「意外か? …… 久遠はおれの後輩で今は【青山】の道場にいる」

「ふざ……け……る……久……遠が……くっ」

まずい……意識がもう限界……お嬢様………すいませ………ん

- s i d e e n d -

- s i d e 和泉直人 -

やっと、堕ちたか……本来なら象すら五秒と持たずに、気を失うというのに良く耐えたな

とりあえず仕事を済ませようと、桜咲の右腕を槍の穂先の逆の部

分、石突きで思いつきり叩き付けたと同時に骨が折れる音が聞こえ
気を失った桜咲の顔が痛みに歪んだが、意識は戻らない事を確認し
左足の膝を石突きで砕き続けて右足の脛を砕き、さらに千草から貰
った魔法による治癒を阻害をする力を持つ札を貼り、これで魔法に
よる治癒は効かず自身の治癒能力で治すしかなくなつた

そして今度は痛みで桜咲は目を開け意識を取り戻したが、まだ朦朧
としていた

「あつ……いた……い」

「悪いな、もう右腕と左足の膝と右の脛を砕いた。これでもうお
前は当分戦えない」

「……い……やだ」

朦朧としている意識の中、両目に涙を浮かべてこちらを睨んでいた

恨まれるのも死ぬのも覚悟の上で、この仕事をしているんだろ？…
…涙なんか浮かべるなよ

「なら、翼でも出して戦うか？おれは構わない…だがな、これは
まだりハビリをすれば治る段階の重傷だ。もしその状態で挑むなら、
今度は完全に！二度と戦えないように四肢を切り落とす！」

「……！」

殺気を飛ばしながら強く怒鳴り脅すと、桜咲の少し手は怯えたのか小刻みに震えていた

「それにお前は久遠から大切な物を奪っただろ？それに比べたらまだマシじゃないか」

「!!……おま……えは……どこま」

「一通りはあいつから聞いた。他者に言うつもりはないから安心しろ……正直言つと亜子のクラスメイトを甚振るのは仕事でなければやりたくない」

もう嫌われているだろうが……それでもやらないといけない事がある

「とりあえず、救急車は呼んでやるから後は自力でどうにかしろ……じゃあな」

おれはその後、まだ地面に悶えていた月詠を連れて隔離結界の抜け道を通り東大寺から離れて行った……

- side end -

？ 襲撃（後書き）

刹那に独自設定追加としばらく戦いから退場です。でも出番はあり
オリキャラで、これから出続けるキャラは久遠で終わりの予定で
あまり多いと自分でも、分からなくなるので……

? 迫る手(前書き)

少し他より短めです

? 迫る手

京都市内 天ヶ崎のアジト

- side 天ヶ崎 -

「あつははははは 上出来やえ」

私は今、最高に上機嫌それもそのはず一昨日の仕返しが出来たのだもつとも、あの光る眼の黒服に直接したいのだが今はお嬢様の護衛を倒した事に喜ぼう

「何をクルクルと回りながら喜んでるんだ？天ヶ崎」

「ん、直人はん、よおやってくれたわ、これでお嬢様を奪うのは楽になるから嬉しいんや」

「喜ぶのはいいが、人数的にはこちらが不利だぞ。月詠も二、三日は動けない」

真面目やな…しゃあない

私は回るのがやめて、咳払いをして直人はんの方を向き

「…月詠はんには感謝しとるわ、特別ボーナスも出す」

「あいつはそれよりも、戦いを好むタイプだろうな」

なら外国の戦地にでも送ったろうかな……喜びそうやし

「この後はどうするつもりだ千草？」

「決まっているわ。お嬢様を奪う、そして後は本山の祭壇に眠るあれを起せばバンバンざいや」

「……親書はどうする？英雄の息子が持つてるあれが長に渡れば、最悪お前の目的を潰しに東の魔法使い達が来るぞ？」

「ふん、挑むところや！それこそ私の力とお嬢様の魔力の前にただ平伏すだけや！！」

あはははははは

「……」

喜んでいる私を馬鹿にしているというか呆れているというか、とにかく変な目で見ていた

- side end -

親書をほつとくつもりか……いや、コタローとフェイトの二人に押し付けるつもりか

自信満々と高笑いする千草に呆れた仮にも、詠春を含め高畑や近衛右衛門が居るというのに安易に考え過ぎだ。厄介な事にあの学園には【闇の福音】がいる。いくら封印されているとはいえ月の満ち欠けである程度は力を取り戻すと聞く学園側が何らかの方法で、限りなく完全な状態でこちらに送って来るかもしれない

まあ、それでも仕事の内は戦うが……可能性はつぶしておきたいなおれは護符の一枚を額に当てて念話を送った……五秒ほどの間を置いて念話に小太郎が出た

「『なんや？直兄ちゃん』」

「小太郎、今どこにいる？」

「『ん？ホテルから百mくらい離れた木の上やけど？ネギ言うたか、近衛の姉ちゃん護衛が怪我して入院で大慌てしとったで』」

「だろつな…このまま旅行が中止になって麻帆良へ戻ればいいんだがな」

「『オレつまらんわ…出番ないし』」

「愚痴るな、それよりフェイトはどうした？」

あいつも厄介なんだ…正体不明で

「『知らんわ…どっか行っただわ』」

「そうか、小太郎お前はそのまま奴等が戻るか監視しろ。戻らなかつたら親書を奪うもしくは破け」

「『千草姉ちゃんには好きにしろ言われるけど…了解や任せとき』」

┌

小太郎との念話を切り、まだ笑っている千草がいたがあえて無視をしてみとりあえずフェイトを探す事にした

千草、お前が頭なんだからもつと動け。そして手下の動きを把握しろ

- s i d e e n d -

夜 京都市内 病院

- side 刹那 -

「久遠……………」

お前はまだあきらめてなかったのか……

私は今、京都市内にある病院の一室に即日入院する事になったあの戦いの後、私は朦朧とした意識の中でかろうじて式神を飛ばし、裏と繋がりのある病院に助けを求め……そして今その病院のベットの上にいる

全治四ヶ月の腕の骨折と左脛の複雑骨折…右膝の膝蓋骨骨折が全治半月…重症……自分がこれほど情けない姿はあの時お嬢様が溺れた時になにも出来なかった時以来だ

あのような思いをしたくない、させたくない為に鍛えてきたというのに……

「くそ！」

私は情けない自分への怒りのあまり、手術したばかりの自分の足を叩いてしまい痛みが走り思わず

「痛~~~~っつ!」

「せつちゃん?」

「!?!」

突然の予想外の声に私は驚き、ドアの前に視線を向けるとそこには申し訳なさそうにドアを少しだけ開けこちらを覗くお嬢様がいた……なぜ堂々と入らずに隙間から覗いている? いや、そもそももう面会時間は過ぎていているはず

「あの…お嬢様?」

「入ってええ? 看護師さんに見つかるさかい……」

「え、あ、どうぞ」

困ったな…【夕風】が出したままだ隠さないと………動けない

「お邪魔します」

そしてお嬢様はこそごとと泥棒のように忍び足で部屋に入り、とても静かに音がしないようにドアを閉めた……

「あのお嬢様? ネギ先生達は?」

「ん〜？来てへんよ。ウチ一人でやけど明日菜とかにあいたかったん？」

「え！いや、その……………はい」

一応は先生方には連絡はしたからいいかな……………いや、やっぱりネギ先生には直接会ったほうがいいな

「何、悩んでるん？せつちゃん」

「……………いえ、何でも」

まずいな……………お嬢様はほがらかに見えて意外と勘の鋭いところがある……………この場合はなるべく無言に限る

そして私はお嬢様に悟られる前に、質問には無視するようにした……………何回かすると

「せつちゃん、ウチの事嫌いなん？」

とんでもありません……………大好きですよ

「何で質問に答えてくれへん」

あなたの為です

「……………その刀、お父様のやる何で持ってる？」

あなたの護衛の為、詠春様に譲り受けました

「銃刀法違反とちゃうんかいな？」

見逃してください、私の他にもあのクラスに本物の銃使いがいます

私から質問すると

「あの、お嬢様この修学旅行はどうなりますか」

「……このちゃんって言わな、答えへん」

「……このちゃん、修学旅行はどないなりますか」

この言葉にお嬢様は満面の笑みを浮かべ凄く喜んでいた

「うん、このまま続けるってネギ君が言ったよ。でも、せつちゃんに酷い事する人は許せへん」

そのお気持ちだけで十分です。ですから無茶をしようとししないでください

「お嬢様、私の事は大丈夫なのでこのまま旅行を楽しんでください」

「せつちゃんいないと、つまらんからここにいる」

「そんな事を言わずに……」

「いやや、ウチはここにいる」

……それは困ります

私はとりあえずこの場から、帰ってもらつた為にナースコールを押したそしてすぐに看護士が来るのでお嬢様は慌てて病室から逃げて行った

- s i d e e n d -

- s i d e 木乃香 -

せつちゃん、いじわるや〜

ウチは今、大急ぎで旅館に戻る途中……あのまま病室にいたら怒られるので仕方なく戻る事にしたそれに早く戻らないと、教頭の新田先生に朝までロビーで正座させられる！

明日菜心配してへんかな〜それとも寝てるかな

その途中…防犯灯の光がない真っ暗闇な道があり、少し行くのをためらった

え、行く時は明かりが付いていたのに……どないしょ、ここ通らんと駅に早ういけんし…誰かこへんかいな？

ウチが周りを見渡すとこちらの方に一人の小学校高学年くらいの白髪の少年が、ゆっくりとした足取りでこちらに近づいてきた少年が消えた防犯灯の下に立つと、防犯灯の明かりが点き少年の表情はまるで能面のように、無表情だった…

あの子…怖い、何で？

「…近衛木乃香だね。悪いけど、僕と一緒に来てもらおうよ」

「え、何で……い、いや」

怖い…どうして何でこんなに…

「怯えなくていいよ…怖いなら、目を瞑ればいい」

思わず少年の言葉に目を瞑りそうになったが、瞑るのをやめてウチは真っ暗闇な道の方へ力の限り走り出したが

「やれやれ……手を焼かせないでほしいなお姫様」

「!？」

それは一瞬の出来事だった自分の後ろにいたはずの少年は、ウチの目の前に突如現れそのまま手を出し、ウチの視界を塞ぎ同時に、少年の言葉が聞こえた

ペトローシス
「石化」

少年の手から光が生まれそして、ウチの目の前は光に包まれ……その時、耳に別の声が聞こえた

「何しとる!?!」

「!？」

声と共に光は消えて同時に少年が横から殴られたのか、横に吹き飛んだ

「大丈夫、このか!？」

「誰？」

あかん…光で目がくらんでる。でもこの声は…

目を擦りながら、ぼやける目で前を見るとそこには薄紅色の炎に包まれた知り合いがいた……

「亜子？」

- s i d e e n d -

？ 迫る手（後書き）

次話は亜子対フェイトの予定

? 白髪の少年

- side フェイト -

なるほど…君がそうか……

僕の目の前には、近衛のお姫様と薄紅色の焔に全身を包まれた少女がいた気持ち彼に似ていた

「君が直人さんの妹かい？」

「…やっぱり、桜咲さんを襲ったのは兄貴なん？」

彼女の言葉に後ろのお姫様は驚いていた当然と言えば当然、まさか自分のクラスメイトの兄が自分の友達を襲ったのなら当たり前か

「そうだね。正確には戦いの後に油断した彼女を襲ったのだけど…」

「次はこのかを狙うんか？」

「そうだよ、その為に桜咲刹那を襲った…だから邪魔しないでくれるかい」

「ダメや、本当に桜咲さんを襲ったのが兄貴か確かめるつもりでホテルを抜け出してきたんけど

目的がこのかの為だったなら、妹として責任はとる」

そして彼女は総合武術マーシャルアーツの基本の構えであるキックボクシングのような構えをとった

なるほど…まったくの素人ではないみたいだね

「いいよ…じゃあいくよ。和泉亜子」

- s i d e e n d -

- s i d e 木乃香 -

なんや…これ、夢？

ウチの前には白髪の子と亜子の二人が突然戦いをはじめた、それもとてつもなく速さで……白髪の子が亜子の右側に跳んだと思ったら左側にいて、亜子の横顔に蹴りを仕掛けたり亜子はその蹴りを紙一重でかわして、逆に白髪の子の顎めがけて掌底を当てようとしたけど掌底は空を切り、白髪の子は瞬間移動のように亜子の三mほど

後ろにいた

亜子は軽く、息を吐きながら白髪の子と向き合い再び構え、白髪の子は特に何も構えずにただ手をだらりと垂らして無表情の顔を亜子に向けていた

「七つの魔焰の一つ、身体強化能力だね……純粋な能力なら僕より上みたいだけど、経験の差かな？それとも君の体技が未熟だからかな？どちらにしろその差で君の攻撃は当たらない」

「じゃあないやん…ウチは元々護身用に覚えたんやから攻めは苦手や」

「なら、ここで大人しくやめるべきだね。僕はあまり加減がうまく出来ないから死んでしまいかもしれない」

え…死ぬって、そんなかんたんに

「死ぬ思いは何度もしてる…せやから痛いのは慣れてるから我慢できるけど…死ぬのは無理」

「そう…ここから去るなら、僕はもう手は出さないよ」

白髪の子は、片手を真つ暗闇の道に差し出すと消えていた防犯灯に光が灯った

「君は帰るといい、でもお姫様は帰すわけにはいかないけどね」

そんな…ウチ帰れへんの？

「ウチがきみに何したんいうんか！？」

「別に君が悪い訳じゃないさ…ただ、君が近衛家に生まれたそれだけの事さ」

それだけ…近衛家に生まれたそれだけでウチは襲われてるの？まさか、せつちゃんがお父様の剣を持っていたのは…

「せつちゃんがウチを守ってた…？」

「今頃気づいたのかい？君が知らないだけで、彼女は影でその身を削って君を守っていたんだ」

「…そんな」

「さあ、話しは終わりだよ。和泉亜子、君は帰るといい…」

そして再び、白髪の子は亜子に帰れと言った…けど、亜子は動かずに白髪の子に言い返した

「帰るなんて何時言った？ウチには兄貴の妹として、桜咲さんが治るまでこのかを守る！」

「…仕方ないね、君のその行為は蛮勇じゃない単なる無謀だよ」

白髪の子はポケットから指輪を取り出し、指にはめてここで初めて構えたよくは分からないけど凄い危険な感じがしたウチは震える声で亜子を呼んだ

「亜子……」

「大丈夫…はよ、帰ろう帰らんと新田先生に怒られる」

「う……ん」

本当に大丈夫なのかな……う、うん亜子を信じよう、きっと帰れる！

- s i d e e n d -

- s i d e 亜子 -

でも、どないしょ……あの子はウチより攻撃は速いし当たるかな……

《なら、オレの【真名の焰】を使え、あれなら人の能力でかわす事は出来ないぞ》

でも、アシユタロス、あれ使えるの五分が限界やから……それに使用

後の筋肉痛が酷いし…

《来るぞ、魔法だ》

「え!?!」

白髪の子が、はめていた指輪が光りを放ち、白髪の子は呪文を唱え始めていた

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト、小さき王八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ、その光、我が手に宿し災いなる眼差しで射よ、石化の邪眼」
カコン・オンマ・ペトロセオース

《回避しろ》

言われんでも分かっている!

ウチは真後ろに跳んだ瞬間に白髪の子の一指し指から閃光が生まれ、信じられない速さでさっきまでいた足元に当たりその瞬間にコンクリートの地面の色が変わり瞬く間に砕け散る

「あんなの喰らったら死ぬやん!」

「その覚悟で挑んできたんじゃないのかい?」

「亜子!後ろ上!」

「え!？」

このかの声に後ろを振り向き上を見ると、そこには一本、一本が鋭く太い石の矢をおよそ二百本ほど空中に展開していたそして白髪の子も石の矢と共に宙に浮いていた

飛ぶなんてずるい!

「障壁突破：魔法の射手、連弾、石の二百五矢」

二百五本の石の矢はさまざまな軌道を描きながら、その全てがウチに向かって突進してきたウチは全力でそれから逃げたけれども、追尾機能があるのか石の矢はまだ百五十本近くが追って来た

「しつこいのは嫌いや!【縫合】【裁断】!!」

ウチはアラストルが貸してくれた能力【縫合】で、石の矢を全て一つに纏めた瞬間に【裁断】の連続使用で全てを粉碎破壊したそれを見た白髪の子は、特別に表情は変えず

「セブン・ブレイズそれが君の持つ七つの魔焰ブシ・ブレイズの悪魔の能力みたいだね、彼の七つの魔焰の能力は見た事ないけど……君の悪魔は空間に作用する凄い力みたいだ」

「皇帝の知り合いなん君は？」

「……どうだろうね……でも今は関係ないよ……石の槍」
ドリユ・ペトラス

突如として足元から地面が伸びて、鋭い槍になりとっさの事で体を動かしたが完全にはかわしきれずに脇腹を掠めて服が破け皮膚から血滲んだ

「痛っ！！」

「余所見はダメだよ」

「！！？」

ウチが痛みで、脇腹を押さえ傷口を見たわずかな瞬間に白髪の子は目の前にいて、すでに拳を作り今まさに拳を突き出す瞬間だった

「どんな移動魔法や！速すぎる！？」

「加減はしないよ、君の力は危険過ぎるから」

防御が間に合わない

白髪の子の拳はウチの腹部に当たり、声を上げるまもなく二十m

近く吹き飛ばされその先には運悪く電柱に背中を打ちつけた

「がつ！」

「亜子！」

強い…それになんで、あんなに冷静に動ける？

《経験さとしか言えないな魔界よ》

アラストール…何のようや

《決まってる。あの白髪フェイト・アーウエルンクスを消し去る
為だ》

「殺すのはなし…ダメや」

《同意出来ない、ここで魔界が殺された場合我らは…死ぬこれは
自衛だ》

「逃げればいいん、だから…邪魔しないで大人しくして…この
かを巻き添えにしたくない」

「亜子？誰と話してる？」

倒れているウチの前には、このかが心配そうに見つめていて慌て
て立ち上がりながら、このかの後ろに影のようにフェイト・アーウ
エルンクスが静かに立っていた

「このか！後ろ！」

「へ？」

このかが振り向いた瞬間、フェイトは手の平を見せると同時に再び彼の手が光り

「フリエイ・ペトラ石化のいぶ」

「勝手な事をするな、フェイト」

「「「！？」」」

フェイトの腕は突如現れた直人に掴まれ、直人はフェイトの腕を掴んだままフェイトを後ろに投げ飛ばしたが、慌てる様子もなくフェイトは静かに着地した

「兄貴…なんで」

「この人が…せつちゃんを」

ウチは兄貴を呼んだが視線を送るわけでも、答える様子もなく真っ直ぐにフェイトだけを見つめていたけど少しだけ、このかを見た

気がした

「何のつもりだ」

「別に…ただ僕達の目的の為に、お姫様を奪いに来ただけ」

「今は時期じゃない…勝手な行動をしてこちらの予定を狂わすな
退け」

「……分かったよ、扉^{ゲイト}」

フェイトの周囲に水が囲うように集まりだし、フェイトの姿を隠すと次の瞬間には見る影もなく消えていた。兄貴は少し気が抜けた感じがした…そしてウチらの方を向き

「さっさと帰れ…二人共」

「兄貴、何であんな酷い事するんや！兄貴は仕事で一人暮らしするて……」

「間違っではないんだろ？これがおれの仕事だ…依頼を受けて依頼主の護衛をしたり敵を倒す近衛、お前の護衛も同類だ」

このかは兄貴の言葉に驚きながら、少しずつ気持ちが落ち込みはじめていた

言わんでいい事を……バカ兄貴

「……もつとも桜咲は近衛の護衛専属だったから汚れ仕事はしてないだろうがな」

「え、ほんまに」

「嘘をついても仕方ないだろ……敵の言葉を信じるかはお前次第だが」

兄貴はウチらに背を向けて、それから何も言わずに立ち去った……その後、ウチとこのかはホテルに戻るとネギ先生のキス争奪戦ゲームをしていたらしく、参加者全員が正座していた……当然、ウチらも無断外出が見つかり正座する事になった

ウチの怪我はこのかと口裏合わせて帰りに転んで、たまたま尖った枝に擦った事にした……

- side end -

? 白髪少年(後書き)

これで二回目は終わりです

どっししたら戦闘をつまく書けるだろうか…

よろしければ、感想下さい

? ヘルフェコール(前書き)

四日ぶりの投稿、ご都合展開です

? ヘルフェゴール

朝 京都市内 病院

- side 刹那 -

「…分かりました。お嬢様、詳しい話は詠春様に直接お聞きください…はい、では失礼します」

私は病院内にある公衆電話の受話器を掛け金に置いた

ついにお嬢様にバレてしまった…出来れば知らないままにいて欲しかった。きっと詠春様はお嬢様の忘れられた記憶を呼び戻すだろう…それで御自身の力を嫌ってくれたら自分から関わる事をやめるだろうでも、もしそれを受け止めて関わり続ける道を選んだら…いや、それでもどんな道でも、私は桜咲刹那はあなたについて行きます

「例え、生涯許されないとしても…久遠、お前の代わりに私はお嬢様を守り続けるそれが私に出来るお前へのただ一つの償いだから」

- side end -

関西呪術協会・総本山

- side 近衛詠春 -

関西に住む陰陽師達を統括する機関、関西呪術協会その日本庭園に植えられた季節が過ぎても咲く桜、その花びらが舞う縁側で私は関東魔法協会の長であり、私：近衛詠春の義父、近衛近右衛門と電話越しの会談をしていた

内容は今、こちらに今日中に来るであろう、私の友であり英雄ナギの息子ネギ：彼が持っている東と西の仲違い解消の為の親書について、そして今日の朝に娘の護衛の刹那君から娘の木乃香が昨日の晩に自分が何者かに狙われている事を知った事を

その事にお義父さんは驚いていた：約十年近くの間、孫娘に隠してきた事がついにバレてしまったのだから、それは当然。同時に魔法についても、話さなければならぬ事の意味して：本来ならもっと早い段階で魔法などについて教えるべきだったがそれを私と妻の二人で相談して木乃香には、『普通の女の子として生きてもらいたい』『辛い記憶を忘れて欲しい』：その願いから今の今まで、隠してきた

そして魔法を話す：それは木乃香の記憶の奥に眠っているであろう、彼女：桜咲久遠についても話さなければならぬを示していた

「『婿殿？聞いておるかのお？』」

「え？はい、聞いています…今回の件と久遠君の話しについては、私が責任を持ち対処します…ですので、お義父さん魔法の事は」

「『うむ、学園に戻り次第、わしから直接改めて木乃香に話そう…もしかすると今頃は、ネギ君が話しているかもしれんがのお』」

それはそれで問題な気がしますが…ナギの息子だから仕方ないか…

「それでも、お願いします……すいません、ダメな父親で」

「『謝らんでよろしい。婿殿が決めた事、それに付き合ったわたしも同じじゃよ』」

感謝します。お義父さん

「では、また日を改めてお礼を…」

「『うむ、うまい酒を期待してるぞ婿殿』」

そして電話での会談を終えて、私は自室へと戻ろうとした時に住み込みで働く巫女服の衣装を着た使用人の若い女性が私を呼び止めた

「どうしました？」

「長、【青山】よりお客様がお見えです」

彼女か……思ったより随分と早いな

「……分かりました。では、彼女を私の自室の方へ」

「はい……失礼します」

御辞儀の後に彼女は入り口で待つ客人である彼女の下へ戻って行った……私はその後自室に戻り、彼女が来るのを待ち二分程で障子越しに彼女の影が見えた……影越しに見えた彼女の姿は少し中学生離れたスタイルに見えた

そして彼女は障子の前の廊下で正座して、私に呼ばれるのを待っていた

あの日からおよそ十年ぶりか……

「入りなさい」

「はい」

そして彼女は障子を開き、中へ入って来る……黒い生地に牡丹の花びらを刺繍した振袖、腰ほどに届く長い白髪に170cm近い中学生離れた長身に豊満な胸、そして手に握るのは任侠映画などに良く出てくる、太刀とほぼ変わらない刀身の長さを持つ鏢のない脇差

彼女は再び正座をしそして障子をしっかりと閉め、脇差を自分の横に置き私に頭を下げ挨拶をした

「お久しぶりです、詠春様」

「ええ、久しぶりですね。久遠君、元気でしたか？」

「はい、宗家の方々に日々よくしてもらっています」

彼女は口に笑みを浮かべ、はつきりとした声で答えるが目は笑っていないように感じたが、あえてそこは無視をして話しを続けた

「それは良かった……しかし、随分と背が伸びて…170ぐらいありますか？」

「……174です。背は薄く気にしてるので言わせないで下さい」

174……大きいな

「……それはともかくとして久遠君、今回呼んだのは君にある話しに同席をしてもらいたい為だ」

「同席？」

「木乃香に魔法の事、君の事を話そうと思う…その為に君には一緒にいてもらいたい」

「何故です？お嬢様に魔法の件は話さないつもりだと聞きましたか？」

私は彼女に昨日の昼に刹那君が襲撃されしばらく護衛が出来ない事、その夜に木乃香が誘拐されかけた事を話すと彼女は少しの沈黙の後

「……分かりました。同席はします。ですが、条件があります」

「……条件？」

「はい、私がお嬢様に向けての行動や言葉について一切の文句や制止はしないでください」

「いいでしょう……これは私の責任もありますから、ただ危害は加えないように」

「はい……ありがとうございます……お嬢様は何時頃、こちらに？」

「昼過ぎには来るそうです。それまでは客間で待っていてください」

そして彼女は客間で木乃香達が来るまで待つ事になり、私は最後に彼女に質問した

「久遠君、君はまだ木乃香と刹那君を怨んでいるのですか？」

「詠春様、その質問は聞くだけ無駄です……当たり前です。私から光を奪った二人を怨んでいるに決まっています願わくば、刹那とお嬢様を斬りたいほどに……」

「……………そうですか」

彼女の体からは、憎悪や怒りの感情が滲み出していた……そのまま廊下へ出て行き客間へ向かって行った

桜咲久遠の赤い瞳はもう二度と光に溢れた景色を見る事は出来ない唯一見れるのはひたすらの暗闇だけ……

- s i d e e n d -

ホテル・嵐山 ロビー

- s i d e 亜子 -

「え〜！亜子一緒に来ないの〜!？」

「うん、ごめんな、まき絵……………ちょい気分が……」

ウチはロビーでまき絵達と別行動をとる事を伝えた

本当は気分は全然悪くは無いけれど……昨日の事で体が痛い、特に脇が

「そっか……じゃあ、お土産沢山買ってきてあげる!」

「うん、期待してるよ」

そして玄関の外までまき絵達を手を振りながら見送り、部屋に戻ろうと再びロビーを通りかかるとネギ先生・明日菜・木乃香が休憩処で会議をしているように見える、そこには昨日の夜にキス争奪戦を開催してこっぴどく新田先生に怒られた【学園パラッチ】事、朝倉和美もいた

「明日菜、何してるん?」

「亜子ちゃん?あれ、まきちゃん達とUSJに行っただんじゃなかった?」

「ほんまは行きたかったんやねんけど、昨日の事で体が痛くて……」

「大丈夫ですか?もし良かったら僕が治癒魔法をかけますけど……」

「こら……あんたがそんなに簡単に人前で使うとするから、朝倉な

んかにバレルのよ」

明日菜は軽くネギ先生の頭を小突き、朝倉は笑いながら明日菜に

「ところで明日菜、あんた子供嫌いじゃなかったけ？」

「ガキが嫌いなの…それよりさっさとネガを渡しなさいよ」

「あゝはいはい」

朝倉はネギ先生に封筒に入った写真のネガを渡すと、涙を流しながらネギ先生は喜んでいた

「朝倉って魔法知ってたんか？」

「知ったのは昨日の夕方なんだけど。それよりあんたも魔法使い？」

「ちやうけど…知ってたよ」

「ふん、とりあえずクラスって変なの多くない？茶々丸さん口ポットだし……」

確かに…エヴァンジェリンさんとか吸血鬼やし長瀬さんは忍者

朝倉としゃべりながらウチが傷ついた脇の部分を摩っていると、明日菜の横にいたこのかが申し訳なさそうに少し表情が沈んでいた

「亜子、昨日はありがとな」

「そないに気にしなくてええ、ウチの兄貴が悪いんから」

「でも亜子、ウチを守るとかはせいでええよ…気持ちやけで十分やから」

「……………それだと」

「大丈夫やから……………な？」

「……………うん」

そこまで言われたら…諦めるしかない

その後は明日菜達も、京都巡りに出かけて行った…これでホテルに残っているのは3 - Aでウチだけ他の先生達も出かけてしまった…とりあえず部屋に戻り、テレビを見ながらこの後どうしようか考えていた

どないしようか……………

《ここで我らの焰の熟練度を上げるべきだな、アーウェルンクスがまた来るかもしれない》

アラストル…でも、ここじゃあ危ない下手したら爆発あるし

《なら、ベルフェゴールを探すべきだな。あいつの焰を破るのは魔法使いでは不可能だ》

ベルフェゴール…でも、何処におるか分からんし学生で出来る事なんて限られてる

《大阪で別れて約二年…そろそろ戻ってくると思うぞ。あいつはかなり寂しがりやで、いじぱっりだ》

まあ、そうやけど…そんな都合良く…

その時、窓の方から小さな音が聞こえ気になって窓を見てみると、窓に小石が当たった音だと分かり

「誰や、小石投げるなんて」

ウチは窓を開けて、注意しようと外に顔を出して辺りを見渡すと正面の二m先の草むらの所に恐らく小石を投げた犯人と思う五歳くらいの子…上下真っ黒な服を着て黒い髪に黒い瞳を持ったかわいい子供がこちらをじっと見つめていた

その子と眼が合い嬉しそうにこちらに来ようとしたので…とりあえず窓を閉めて部屋の奥に逃げた

《いいのか？魔界よ》

さて、アラストル……練度を上げる練習しよついでにアシユタロスも起して

「《開けて…よ》」

あかな……知らない声の幻聴が聞こえる

「《開けて…よ…開けて…よ……母さん……》」

ああ、窓を叩く音も聞こえるこれも幻聴や……もしくは夢やこんな都合よく現れる訳がない

再び窓の方を見ると、真つ黒い子供が窓にへばりつくように顔を押し付けて泣いていた

《しかし、相変わらずの非力だな、そう思わないかアシユタロス？》

《仕方ないあいつ、オレ達の中で一番の非力。顕現しても脆弱》

そんな言い方はかわいそうやろ、同じ七つの魔焰セラ・プレイスの支柱なんやから

《亜子が言う言葉じゃない》

《同感だ、かわいそうなら窓を開けるべきだな》

……まあ、そうやね

そしてウチは窓を開けると、真っ黒い子供はウチの腹をめがけて飛びついてきた

痛いなあ……何でこんなに縮んでる？ベルフェゴール

- s i d e e n d -

? ヘルフェゴール(後書き)

感想待ってます

? 関西呪術協会

ホテル・嵐山 四班の部屋

- side 亜子 -

「なあ、ベルフェゴール？なんでそんなにちっこい？」

ウチは今は何故か小さい子供の姿で、目の前にいる七つの魔焰が
一柱【色欲のベルフェゴール】に小さい姿の理由を聞いても、答えないですすり泣くだけで困っていた

どないしょ……なんかいい策ない？

《我らに聞くな魔界よ。子供の相手など経験はない》

《アラストルの言う通り、がんばれ亜子》

ウチに丸投げかい……ほんまに都合の悪い時だけ悪魔やな

《《悪魔だからな》》

もう、ええわ

アシユタロスとアラストルに頼るのを諦めて、とりあえずもう一度ベルフェゴールに理由を聞くと今度はすすり泣きながらも答えてくれた

「《別れた…あと、さい……しょね、楽しかった…けど……》」

「うん」

「《だんだん……ね、寂しくなって……でも、母さん……何処にいるか分からなくて》」

「あゝ確か、別れたの麻帆良に来る少し前やったね」

「《探す……うちに、人間が寄って来て……話すの嫌だから…逃げたり、焰で脅したり……それで》」

《なるほど、それで顕現維持に必要な最低分だけの魔力を残しベリアルが別れの際に渡した魔力全てが無くなりその姿になったと》

アラストルの言葉にベルフェゴールは頷く、ちなみに同じ七つの^{プレイス}魔焰同士なら顕現してる状態でも、ウチの中と意思疎通が出来るらしい…ウチはとりあえず、ベルフェゴールを戻そうと手を差し伸べて

「まあ、とにかく……こうして会えた訳やし、戻ってき」

「《うん》」

頷いた瞬間、ベルフェゴールの姿は歪み禍々しい漆黒の焔に変わりウチが差し出した手の中に吸い込まれて行った……

「……ふう、なんて言うたらええんかな……この失ったものが戻ってきた感じは」

《本来、亜子の持つ力が戻っただけ》

《だが、これでアーウェルンクスを倒せる確率が上がった》

アラストルそんなに倒す気満々なん？

《魔界こそ、何故そんなに戦いに燃えない？》

何度も言うてる、戦いは嫌いって総合武術マッシュアルファだって護身用に覚えたんやから

《……我は戦いを望む、魔界の心から生まれたのだがな……》

え？いま、凄いこと言わなかった

《我は寝る》

それを最後にアラストルは何も答えずに、精神の奥へ消えていくのを感じた……そして再びすることが無くなった

やっぱり、錬度を上げることしかないかな……ベルフェゴールもいるし

- s i d e e n d -

- s i d e 小太郎 -

くっ！何者やこの姉ちゃんは！？

オレはあの気に喰わない西洋の魔法使いのガキ、ネギのクラスが旅行を続ける事を知り、速攻であいつの親書を奪う為に動こうとした矢先に邪魔が突如として入って来た……その女は、糸目の長身で忍者装束を着た女

「ふむ、お主でござるな昨日からホテルを見つめる気配は……」

！？、「なにもんや……いや、そのかつこ……忍か？」

「どうでござろうな……して、お主は何者でござる……もしや刹那を襲った者の仲間でござるかな？」

「へっ！だとしたらなんや！あんたに関係ないわ！」

「うむ……だとしたら、少々手荒なまねをさせてもらおう」

その瞬間、糸目の姉ちゃんの気配が膨れ上がるように感じ、オレは先手必勝と懐から苦無を出したためらわずに糸目の姉ちゃんの心臓へ投げつけるが、その苦無を容易に人差し指と中指で挟み止めた

な！？あんなに簡単に掴みおつた

「危ないでござるよ、ニンニン」

「やっぱ忍者やる姉ちゃん……まあ、ええは速攻であんたを潰して仕事をさせてもらおう」

そしてオレは自分の影から、数匹の黒い狼を出すと糸目の姉ちゃんは「おお」と小さく驚きの声を上げるが焦り慌てる様子はまるで無かった

「うむ…それは式神でござるかな」

「へ……ちやうわ、こいつらは狗神！そしてオレは狗神使いの犬上小太郎や……！」

オレは名乗ると同時に狗神を走らせ、今度こそ糸目の姉ちゃんを仕留めにかかる……が

その余裕も、これで終わりや！

「拙者もこれはまずいでござるな……行くでござるよ、コタロー」
呼び捨てかい……まあ、ええ！どちらにしるオレの勝ちや！！

だが、オレの考えは糸目の姉ちゃんに見事に打ち碎かれた……糸目の姉ちゃんは何処から出したか、身を隠すほどの巨大な風車手裏剣を取り出し一振りで狗神達を振り払い瞬動術で接近し、近接戦闘を仕掛けて来た

「なめんな！！」

オレは我流の氣弾【犬上流・空牙】を放った……この程度はかわされる事は予想済みこの技は囿であり、本命は零距离から放つオレの最強技【狼牙双掌打】をあの顔にぶちこむ為に！

空牙は予想外に糸目の姉ちゃんに当たりひるんだ所にオレは、狼牙双掌打を叩き込みその衝撃で周囲が碎け噴煙が舞う…煙が消えると糸目の姉ちゃんは地面に伏していた

「どや！オレの勝ち……」

「大した威力でござるな」

「!？」

オレが振り向くとそこには無傷の糸目の姉ちゃんが感心したように頷きしていた、オレは倒れていたはずの糸目の姉ちゃんを見るとそこには誰もいない

「影分身…本物と同じ、なんちゅ密度の氣や」

「この勝負、拙者の勝ちでござるな……」

「………しゃっない、オレの負けや」

オレの視界には十人近い影分身の姉ちゃんが囲い、その手には苦無が握られその全てに氣が付加されている

この状態で同時攻撃はどうやっても捌ききれない……くそ

「好きにしる」

「うゝむ………では、これ以上の監視はやめてもらおう。それで十分でござるよ」

「は？そんなんでいいんか？……」

「十分でござるよ。では、機会があればまた会おうコタロー」

「……あなたの名前は？」

「おお、名乗っていなかったでござるな、拙者の名は長瀬楓……では」

それを最後に糸目の姉ちゃん……長瀬楓は姿を消し一人残されたオレは静かにため息を吐いて

どないしょ、千草姉ちゃん知ったらなんて言うか……クビかな

- s i d e e n d -

夕方 関西呪術協会 総本山

- s i d e ネギ -

僕・アスナさん・このかさんは今、関西呪術協会総本山兼このかさんの実家の玄関の前まで来て、目の前には巫女装束の姉さん達が出迎えに来ていた僕達は街中で早乙女さん・綾瀬さん・宮崎さんの三人とこっさり別れたので、今頃は僕達の事を探しているかもしれないけど

今はこっち方を優先させてもらおう…でも、後で謝らないと

「何、考えてるのネギ？」

「あ、いえ、宮崎さん達は今頃僕達の事探しているかもしれない…
…と思つて」

「あゝ、それ、大丈夫よ私がさっきメールしておいたから」

いつのまに……

「で、でも宮崎さんに景品の仮契約カードバクティオーを渡してますし…もし、
敵が勘違いして宮崎さん達を襲うかも……」

「そうなる前にさつさと、このかのお父さんに親書を渡して合流
すればいいじゃん」

「そうですね…行きましよう」

でも、凄く不安を感じるのは何故だろう……

そして僕達はこのかさんの実家の中に入り、巫女さんに連れられて
かなりの大人数が入れる大広間へ案内され……それからしばらく
して奥の上座の方から、ゆつたりとした動作で少しやせ気味の長身
の男の人が現れた

「お待ちせしました……ようこそネギ先生に明日菜君、木乃香の
父親の近衛詠春です」

「お父様、久しぶりや〜」

突如としてこのかさんは、詠春さんに飛びついて甘えていた…

いいな……このかさん

「ほら、ネギ親書」

「あっ！はい」

僕はアスナさんに呼ばれて慌てて、親書を取り出して詠春さんの前に立ち

「東の長、麻帆良学園学園長、近衛近右衛門からの親書です。お受け取りください」

「……確かに承りました」

親書を開き、中身の内容を確認しながら時々は苦笑したりしていた…それから読み終わった、親書を元に戻してから懐にしまい僕の方を見つめ

「……いいでしょう。東の長の意を汲み、私達も東西の仲違い

の解消に尽力するとお伝え下さい。ネギ・スプリングフィールド君

「は、はい！」

「…それと木乃香、後で客間に来なさい。ネギ君、明日菜君には歓迎の宴をご用意しますよ」

詠春さん、やっぱりこのかさんに魔法の事を話すのかな……

その時、一人の巫女のお姉さんが大広間に現れ詠春さんの傍に近づき正座をして

「長、お客様が来ています」

「客人…はて？予定にはないはずですが……誰です？」

「お嬢様と同じ年頃の少女四人組みです」

「そうですか、とりあえず……こちらへ案内してください」

「はい」

それから数分後、複数の足音が聞こえて僕は後ろを向くとそこにいたのは宮崎さん達と朝倉さんがいた

「み、宮崎さん！？それに皆さんもどうしてここに！？」

何で？どつちって……」

驚く僕とアスナさんをよこに朝倉さんが、ポケットから携帯を取り出して

「ふふふ……こんな事もあるつかと明日菜のカバンの中にGPS携帯を忍ばせておいたのさ」

「ちよつと〜！？あんたは何してるのよ!!！」

アスナさんは自分のカバンに勝手にGPSを入れた朝倉さんに、問答無用で拳骨を加えてさらに怒鳴ろうとしたところを僕は、アスナさんを止めようとしたけど僕は僕で早乙女さんと綾瀬さんに詰め寄られていた

「ちよつとネギ君！、ひどいじゃん置いてきぼりなんて!!！」

「す、すみません……用件を済ましたらすぐ戻る予定だったんですが……」

「それにしても、何も言わずに消えるのはどうかと思うです。そしてここは誰の家ですか？」

「こ、このかさんの実家です……綾瀬さんの言う通りですよ。すみません」

どうしよう……なんて言ったらいいんだろ

早乙女さん達の後ろで、どうしたらいいか慌てる宮崎さんが見えてさらにその後ろで、正座をしている朝倉さんを怒鳴っているアスナさんが見えたそれから、しばらくしてようやく早乙女さん達の間い詰めとアスナさんのお説教が終わりその間に詠春さん達は歓迎の宴の準備を終わらせていた

？ 関西呪術協会（後書き）

カモミールは時々ネギと一緒にでています

？ 侵入直前（前書き）

皆様のおかげで五万PVを超えました
ありがとうございます

？ 侵入直前

夜 関西呪術協会 大広間

- side 明日菜 -

このか、遅いなあ……

私達、五班はこのかの実家の大広間でこのかのお父さんの詠春さんが私達の為に歓迎会してくれた。その途中でこのかは詠春さんと一緒に別の部屋へ行ってしまう、それから今まで戻ってきていない

もう、あれから二十分くらい経つのに…何話しているんだろう

私は隣にいるネギの肩にいるカモの背中を掴んで、小声で話しかけた

「ちょっとカモあんた、このか探しに行きなさいよ」

「え！なんでオレっちが？」

「いいじゃない、どうせあんた暇でしょ？」

皆がいるから、下手にしゃべれなくてつままないでしょ？

「姐さん、オレっちも料理食べてる途中…あ、姐さん後ろ」

「何？」

後ろを向くと廊下の所に、このかがこちらを伺つようにこちらを見ていた

「このか！何してるのこっちに来なさいよ」

「あ……うん」

なんでしょぼくれてるのよ…なんかお父さんに言われたの

それからのこのかは、私達に無理に笑っているように見えた……

- s i d e e n d -

関西呪術協会 周辺の山中

- s i d e 天ヶ崎 -

さて、ぼちぼち始めますか……

私は関西呪術協会総本山の近くで、一番大きな木の枝の上にいる。私の隣には昨日まで勝手に動いていたフェイトはんもいる。フェイトはんは、ここに来る間に協会を覆う強固な結界を超えて木乃香お嬢様をさらう事を一人で行うと言いつつ……

「フェイトはん、本当に一人で大丈夫なんか？」

「はい……僕に任せてください」

昨日まで勝手に動きよって……直人はんがおらんかったら予定が狂うところやったわ

「千草さん、どうして昨日の段階で彼女をさらうのを止めさせたんですか？」

「ん……簡単や、昨日の段階でお嬢様をさらっても『あれ』を復活させる確率は昨日より今日の方が高いからや」

「？」

フェイトはんは、無表情で首を少しだけかしげた

少しくらい、表情を変えたらどうや……無表情過ぎや

「『あれ』を復活させるには少しでも、確率が高い方がええのは当たり前やる？」

「はい」

「だから、今日の夜の方が星の巡りから見て昨日より五割増しで、成功の確率が高いから今日さらうんや」

「これでも一流の陰陽師やで、星の巡りから物事の成功と失敗の確率を割り出せるんやで」

「なるほど…それなら確かに昨日の段階では早かったですね」

「納得したか？なら、さっさと行き…腕前見せてもらっわ」

「……はい」

フェイトはんは、小さく返事をして私の前から姿を消した

さて、コタローはどないしよか………まあ、戦力的に多いほうがええしクビにしないでええか

そして私はとりあえずの合流場所である協会近くの川原へ行く事にした

ほんとにフェイトはん、一人で大丈夫やるか？

- side end -

- side フェイト -

千草さんと別れて一分後、僕は協会の周囲に張っている結界の前に立っていた。後、三步も歩けば結界に触れて協会の結界内部に侵入した事が向こうに気付かれるだろう……。この結界を越える方法はいくつかあるが、最も確実に警報を鳴らさずに結界内に侵入する方法は内部からの手まねき

三分後、僕の目の前に協力者である彼女が現れた。彼女の手には鐔の無い刀が、抜刀状態のまま握られていた

「遅かったね……」

「すみませんね……あいにくと色々ありましたから」

「そう……中の様子は？」

「一般人が四人客間にいる。使用人が二十名ほど今は宴の片付けお嬢様は友人と風呂場、彼女達の先生は詠春様と話しをしている」

なら、先に使用人を片付よう…その後は一般人を片付ければいいかな

「分かった、お願い」

彼女は手に持つ刀に氣を付加して、刀を結界に刺し下に振り下ろし刀の動きに沿って結界は切れたが、警報の類が発動した様子はない切れた所を通り結界内部に侵入した…僕は彼女の刀を見つめながら

「それは靈剣かい？」

「……【靈刀・鷹丸】これに斬られた結界は一時的にその機能を無くす」

「へえ、便利な剣だね」

「……私があんたに手を貸すのは、先輩に頼まれたから。これから先はあんた一人です」

「これで十分だよ…ありがとう桜咲久遠」

そして彼女の前を通り過ぎて、協会内部へ侵入した……

- side end -

悪いわね、お嬢様

私は直人先輩に言われて、白髪の少年を結界内部へと手引きした…
少年は一言だけ礼を言って私の前から消えた…

少年に会う数十分前に私は十年ぶりにお嬢様と再会を果たした…
お嬢様はとても驚いた声を上げて最初、私を間違えてせつちゃんと呼んだすぐに私は違うと反論しそれから詠春様は、呪符の力でお嬢様の記憶を掘り起こしその上で、魔法の事を触り程度に教えて本当に細かいことは麻帆良学園の学園長に話してもらうつもりらしい…
…詠春様は私とお嬢様の話し合いの場を作る事が本当の目的できつと魔法の事は、あくまでその場を準備するだけの口実だと思った…
正直お嬢様と話す事なんて、特にない

それでも上からの命令だから従うしかないが…一分ほどで記憶を掘り起こすのが終わったのか、お嬢様は私の事を昔の呼び名の「くーちゃん」と呼んで多分、涙を流して抱きついて「ごめんなさい」と繰り返し謝り続けた……謝罪の言葉を聞いて腹が立った。だから私はお嬢様を突き放して続けざまに、強めに頬にビンタをした多分お嬢様は驚いて

「ふえ？くーちゃん？」

「お嬢様、私はあなたにその呼び名で呼ばれると腹が立つので、非常に不愉快です」

「くーちゃん、なんで……」

「ついさっきまで、私の事を忘れていてそれを急に思い出して、第一声がくーちゃん、ごめんなさい？ふざけるな。私はあなたに謝罪なんか望んでいない」

「でも、原因はウチが……」

「そうです。あなたが私の目の傷をろくに制御も出来ない力で、強引に治療したあげくがこの失明です。おかげで私は本来の武器である弓を捨てなければならなくなりました！」

「………なら、ウチはあの時、どうしたらえかったの……？」

お嬢様はすすり泣き震えながら、聞いてきたので言っちゃった

「何もせずにあの時の刹那のように、ただ呆然と突っ立ってれば良かったんですよ！」

「…そんな」

「まあ、お嬢様よりも私としては刹那の方が悪いと思うんですけどね。刹那が私との稽古中に余所見をしたせいで、打ち合うはずの刃の場所がズレてその結果、私は両目を深く傷つけられた」

「その余所見の原因も、ウチが稽古中のせつちゃんを呼んだから……だから」

「だから全部、自分が悪いと言うつもりですか？あいにくと神鳴流の剣士が予想外の出来事に、的確に反応出来ないなんて許されないですよ。例え、それが修行中の見習いであろうと、だから……あなただけが悪いなんて出来ない。悪いのは稽古で余所見した刹那と……予想外の事に反応出来なかった私自身と、稽古中は呼びかけ禁止と言われていたのに刹那を呼び、さらにやめると言われたのに私を治療したお嬢様の三人です」

割合にしたら刹那四：私一：お嬢様五だと思えますけどね

「事故のその後の事をお嬢様は知っています？」

お嬢様は私の問いに首を小さく振りながら「知らない」と答えたので

「なら、知ってもらいます」

お嬢様に私はさらに事故の後を話し始めた……

「あの後、私は治癒魔法の後遺症なのか丸三日高熱をだして寝込み続け、本来ならお嬢様の護衛役を私がするはずだった……それを私の代わりに刹那が勤める事になり、追い討ちとばかりに私は本家の桜咲家から分家の桜咲家に養子に出された」

「え!？」

「だから、戸籍上は私と刹那は姉妹じゃないんですよ。ただの親戚です」

「どうして……」

「どうしてなんて理由は簡単ですよ。一つは私が義理の親にもう戦えないと思われた。二つ目はその分家の桜咲家に子供が出来なかったからそして、刹那は私に怪我させたのは、ワザとではないかと周りから疑われ周囲からいらないも同然の酷い扱いを受けてきた」

ただでさえ私達の生まれの事で、ずっと酷い扱いを受けて来たのに

「あなたが思ってるよりも、私も刹那も辛いめに会っているんですよ?それでも私達は他に行く当てがないから、生きる場所を失いたくないから十年間苦痛に耐え続けてきた…そしてその苦痛はこれから続きます…お嬢様、私に償う気持ちがあるなら、私を傷つけたその力で多くの人を救ってください」

何言ってるんだろう私は…償う気、なんて言わないですずっと苦しんでほしいはずなのに

私の言葉にお嬢様はすぐに答えなくて、体を震わせてながら強く握り拳を作っているように感じた…感じたとは目が見えないので周囲の気配や風の流れ、音の反響などを肌で感じてその情報を基に頭の中で、可能な限り立体的に周囲の状況をイメージしている。この十年で私が剣技以上に心血を注いで会得した技術だ

そしてお嬢様は私の方を真っ直ぐに見つめて答えた

「うん、償う……ウチの力で多くの人を助けられるのなら、ウチはどんな努力だってしてみせる」

「私が許すなんて言わないかもしれませんが？それに誰かを助ける為に誰かを傷つける覚悟もあつて言ってますか？」

「くーちゃんが許すと言わんでも、ウチは人を助け続けるその為に他の人を傷つけても…ウチは人を助け続ける」

「そうですね……なら、一生続けてください……もう私が言う事はありません。詠春様止めないで最後まで言わせてくれてありがとうございます」とうございました」

「……」

私は詠春様にお礼を言って、そして足早に客間から出て行った。その間に詠春様は何も言わずにただ黙って視線だけを私に向けていた……

そして私は記憶を思い出すのをやめて、少年が消えて行った本山を見つめた。見つめていると所々で一瞬だけ光が見えた。多分あの少年が使用人達を無力化しているのだと思った

私には関係ない事だからいいか……あ、去る前に先輩に挨拶してお
こうかな

- s i d e e n d -

？ 侵入直前（後書き）

後、五話くらいで京都編は終わりの予定です
これからもお付き合いください

? 援軍

ホテル・嵐山

- side 亜子 -

「ふう、ええ湯やった」

露天風呂の湯船から上がりウチは脱衣所で浴衣に着替え、濡れた髪をドライヤーで乾かしながら正面の鏡に映る自分を見つめた四人家族の中で唯一自分だけ髪と瞳の色素が他の人よりも薄い、その事によく小学校のクラスから毛嫌いされていた

まあ…火傷で包帯しながら学校通ったのも原因なんやねんけど、今思うと本当によく耐えてた。昔の自分を褒めたいな

《心が弱かったら、きつと母さんは死んでたはずだよ》

そやるうな…でも、時々自分でも思うよ、少し異常やったなって…普通挫けるやる、あないに入退院を繰り返して……

《でも、挫けなかった。だから私達を制御出来たんだよ?」

制御いうても、リウアイアサン ヘルゼフ四番目と五番目は無理矢理押さえ込んだだけやん…それも一年以上かかってその後のアラストールは随分あっさりとして

いて、ベルゼブブを代わりに押さえ込んでくれたからいいけど…でもその内、自分の力で扱わないとあかん気がする

《その時はまた手伝うから安心してね》

うん、優しいなベルフェゴールはアシユタロスもそうやけど

その後もベルフェゴールと会話をしながら髪を乾かし終わり、ロビーの販売機でジュースを買おうと販売機を指して歩いていると正面に大きなケースを担いだ状態の龍宮さんが現れた

「和泉、少し話がある」

「？、うん、ええけど……」

もしかして、一昨日のリベンジするつもり……それとも旅行前日の事を怒ってる？

龍宮さんの後について行くと、ロビーの所に3-Aのバカレンジャー、バカブルーこと長瀬さんとイエローの古菲が龍宮さんを待っていたようだった

「おお、亜子殿も一緒に来てくれるでござるか」

「へ？何が」

なぜか、嫌な予感が…きつと、とんでもない事に巻き込まれる気がした…そんなウチの気持ちを余所に

「どうして亜子も来るアル？」

「ああ、古^クお前には言い忘れていたが、和泉も相当出来るクチだぞ。多分ほとんどお前と大差ないぐらいにな」

え！ちよつと龍宮さん、それは……

「おお！ほんとアル！？なら勝負よ！」

嬉しそうに独特な中国拳法の構えを見せる古^ク菲を見た長瀬さんが

「これこれ、古今^クはそれぞれどころでござらんよ。バカブラック（綾瀬夕映）の救助に行くのが優先でござるよ」

「救助？綾瀬さんは確か、このかの実家に泊まっているはずやろ？」

何で救助なんか必要？火事でもあつた？

「夕映殿が言うには、謎の少年が突如、現れ皆を瞬く間に石にしたとか……」

「石！？」

それって…あのフェイト君じゃあ……

「私達はとりあえず、近衛の実家にいくが和泉一緒に来るか？」

龍宮さんは、嫌と言っても無理やり連れて行く……そう、眼が強
く言っているように見えたからウチは諦めて

「うん、分かった…着替えてくるから待って」

「うむ、では拙者達は外で待っているでござるよ」

そして長瀬さん達は、外に出て行きウチは部屋に戻りながらどう
やってあのローブを持っていくか考えていた。昨日のように皆が酔
いつぶれていれば簡単だが、今日はそうはいかない

どないしようかな……先生達の夜の見回りは、座布団と毛布を丸
めて布団を被せればいいけど……うーん

《母さん…わたしの固有能力を使おう》

ベルフェゴールの能力って確か……

《精神掌握》

あ、そうそう催眠術やったな……

《それで母さんが先に寝てるとあの三人に思わせればいい、そうすれば夜は自由に出入りできるよ》

……それしかないな、ごめん皆

- s i d e e n d -

関西呪術協会 総本山 近くの川原

- s i d e 明日菜 -

ああ、もう！どうしたらいいのよ！！

私とネギはこのかを誘拐したサル女と白髪のカキを追って来たはいいけど、サル女がこのかを魔力を使って沢山の妖怪を召喚した鬼やら狐やら烏男とか色々、どう見ても百体以上いる

それに対してこっちはネギの魔法と私のハリセン型のアーティファクトエリクソルキザンスハマノツルギの二つだけ

カモは戦力外だし、いくらなんでも多すぎる、どうしたらいいのよ

……

「ラス・テル マ・スキル マギステル！逆巻け、春の嵐我らに風の加護を、フランス・パリエースウェンティ・ウエルテンティス風花旋風・風障壁」

「え、ちよつ！ネギ!？」

ネギが呪文を詠唱すると足元から、風が巻き上がりそれが竜巻に変わり私達を囲うと同時に周囲にいた鬼とかを吹き飛ばした。私は突然の風にスカートを抑えた。ここに来る前に、このかの実家の風呂場で白髪のがきの魔法で下着一式が石になり砕けたのでスカートの下は穿いていないつまりはノーパン状態

ネギの奴、私が穿いていないの忘れてるんじゃないでしょうね！

「ちよつと、ネ……」

「アスナさん！」

「な、何よいきなり……」

「このままだと、多分今以上にマズイ状況になります」

今以上について……今も十分マズイと思うけど、森の向こうに光の柱が出てきたし

「この魔法も後、二分ほどで解けます…森の向こうの光の柱の下に多分、このかさんがいると思いますだから…アスナさんお願いが

あります……その……」

ネギは凄くくやしそうに言い難い様子で、私に何か頼みごとをしようとしていた

「何よ、早く言いなさいよ」

「……選んで下さい。ここに残るかこのかさんを助けに行くかを」

「え……それってつまり、私がこのかを助けるかここで一人、あいつらの相手しろって事？」

「二手に分かれる。それ以外に策が無いんです。すみません……」

そんな事、急に言われても……このかは助けに行きたいけど、ネギ一人でこの大群はいくらなんでも

「ちよつとカモ！あんた何か手はないの！？」

「悪りい姐さん、アニキの策以外にこのかの姐さんを助ける方法はねえよ。二人であいつら倒してる間に奴らの目的が達成されちゃう……せめて、もう一人いれば良かったんだが」

いないんだから、どうしようもないわね……こうなったら仕方ない

「ネギ！！あんたがこのかを助けに行きなさい！そしてすぐに戻って来なさいよ……！」

私の言葉でネギも決心したのか、バクティオー仮契約の契約執行で私を強化して
から

「はい！アスナさん、後は頼みます！ラス・テル マ・スキル
マギステル、来たれ雷精、風の精、雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐
ヨウイス・テンベスターズ・フルゲリエンズ
雷の暴風！！！！」

竜巻が消えると同時に麻帆良の大橋で、エヴァンジェリンとの勝負で使った雷を帯びた竜巻の魔法で鬼達を吹き飛ばすその衝撃で生まれた水煙に紛れて杖で森の向こうへと飛んで行った……そして残された私は両手で、頬を叩き気合を入れて鬼達の向かって啖呵を切った

「さあ、かかって来なさい！！あなた達の相手は私がするわ！」

- side end -

- side 古 -

「おお！思たより上手アル、亜子！」

「え、そうでもないよ…あの二人よりはまだまだやる」

「まあ……そうアルネ」

私達はホテルを出てから電車を經由して、コノカの実家に一番近い駅から森を抜けてコノカの実家を目指そうと、今は森を抜けようとしている最中私と亜子の前には、楓と真名が先行していた

やはり氣の鍛錬が違つとここまで速さが違つアルか…

「ムムム…悔しいアル」

「なんか言つたくーちゃん？」

「な、何でもないアルよ!？」

「?」

亜子は不思議そうに首を傾げていたけど、すぐに前を向いて楓達を追うように加速して私も慌てて三人を追つた……それからしばらくして楓と真名が立ち止まり、私と亜子も止まるとその向こうの森の川原にバカレッドのアスナが大暴れしていた

「何アルか？アスナの周りの変人達は？」

アスナは、どうして変人達をハリセンで叩いてる？

「真名、あやつらは何者でござる？」

「……全てが妖怪だな。しかし、なぜ神楽坂一人で相手を？先生がいてもいいはずだが」

妖怪？本物アル？

「森の向こうの光は何？」

亜子の指差す方を向くと、森の奥に巨大な光の柱が立ち輝き夜を照らしていた

「あれがあるからこんなに明るかったのか……」

「どうするネ？バカレツドを助けに行かないアル？」

さすがにマズイネ、あのままは…

「無論助けるでござるよ。では…これはどうでござる？アスナ殿は古と真名クイが助け、拙者と亜子殿であの光の柱の方へ行きネギ坊主を探す夕映殿は拙者の分身が探すのは？」

「私は特に異論はない」

「ウチもそれでええよ」

「私もいいネ」

といつより、それよりいいの浮かばないヨ

「では、行くでござるよ」

そして私と真名はアスナの方へ向かい、楓と亜子はネギ坊主を探しに多分いるであろう光の柱の方へ向かった

「さて、やるぞ古油断すると怪我するぞ」

「うむ、気をつけるヨ」

そして待ってるヨ、バカレッド！

- side end -

- side 和泉直人 -

「さすがは千の呪文サウザント・マスターの男の息子大した魔力だな」

「くっ！退いて下さい！僕はあなたと戦っている暇なんて…」

「なら、おれを倒せよ。スプリングフィールド」

おれはスプリングフィールドと互いの武器を相手に向けて対峙していた。千草の召喚した鬼共を突破させた際の保険としておれは祭壇と川原の中間あたりで待ち構えていると、案の定スプリングフィールドが空から祭壇に向かうのが見えすかさず槍を投げた。槍は見事、スプリングフィールドの杖に当たりスプリングフィールドは落ちたが予備の杖でも使ったのか風に加護で怪我もなく着地した

「あなたはどうしてあの人（天ヶ崎）に手を貸すのですか！」

「それがおれの仕事だからだ。依頼人の目的を果す為に誰かを守り、時に誰かを傷つけるそれが神鳴流だ」

お前の魔法もそうだろ？

「……あなたを倒してここを通ります」

「それでいい…おれは話して”はいそうですか”と、通すような人間じゃないからな」

それにお前の底力も見たいからな

槍の先端をスプリングフィールドに向けて、瞬動を使つての突きで先制攻撃しようと【入り】に入ろうとした瞬間におれの方にめがけて巨大な風車手裏剣が地面を抉りながら飛んできた

風車手裏剣！小太郎を負かした忍か！

「ちっ、邪魔をするな！」

スプリングフィールドへの瞬動による突きをやめ、おれは槍を迫る風車手裏剣の刃の面部分めがけて振った。風車手裏剣は横に吹き飛ばし、ちょうどスプリングフィールドの方へ都合良く飛んで行った。突然の事でスプリングフィールドは反応出来ないみたいだったが、当たる寸前で手裏剣の持ち主の赤いチャイナ服を着た糸目の忍者が現れて手裏剣を片手で止めた

「危ないでござるな」

「…邪魔をするな女」

いや、確か長瀬楓と言つ名前だったな

「楓さん……どうしてここに？」

「話しは後でござるよ、亜子殿！後は頼むでござるよ」

スプリングフィールドの後ろの木から、薄紅色の焰を纏った亜子が飛び出しスプリングフィールドを抱えると同時に祭壇の方へ走り出した

「亜子！お前」

「行かせないでござるよ」

長瀬は足元に苦無く無いを投げて、おれの最初の踏み出しを止めそのわずかな間に亜子の姿は無かった

ちっ…あのバカ亜子が

「やってくれるな…お前は確か長瀬だったか？」

「うむ、お主には悪いがここより先は行かせないでござるよ」

倒すではなく、行かせないか…少なくともスプリングフィールドよりはずっと強いな

「力量の差が分かるみたいだな…出来るのか？」

「…足止めは少々自信があるでござるよ」

「そうか…なら見せてもらおう」

おれは槍を構えると、長瀬も苦無を逆手に持ち構えかなりの密度の氣を付加していた

なるほど、言うだけのことはある。いい氣の錬度だ……だが、それではやはりおれに勝てないな

おれは長瀬の実力がおれの遠く及ばない事を確信して、速攻で倒す事を決めた

- s i d e e n d -

？ 援軍（後書き）

次も同じくらいの量の予定なので、投稿は多分三、四日後です
残り四話で終わるかな…これ

？ 亜子の弱点

- side 天ヶ崎 -

もう少し…もう少しで、私の願いが叶う…

湖畔に浮かぶ木造の祭壇に祭られている巨大な大岩の前で、お嬢様の魔力を媒介に十八年前に長と千の呪文の男一行に封じられた飛騨の大鬼神【両面宿儺^{リョウメンソクナノカミ}】の復活、それこそ私がお嬢様を攫うとした理由

スクナが完全に復活したその瞬間、私の勝利は確定しそのまま関東の魔法使いの拠点【関東魔法協会】へ攻め込みこの国から魔法使いの奴らを追い出す…そしてその後は、私が西も東も全て支配しこの国の裏の世界の頂点に立つ…だから…だから、この最初の一步でつまり訳にはいかない

私は大岩に氣で刻まれた呪文を呪言を唱えて解除していくが、十メートル近い大岩に刻まれた呪文の量は膨大だった

かれこれ十分以上唱えているのに、ようやく半分…

私の後ろには、護衛の為のフェイトはんが控えている、さらに念の為にコタローも隠れている…もし、あの魔法使いのガキが来ても

必ず対処出来るはず懸念があるとすれば、直人はんの妹の七つの魔焰イリスぐらい……後ろのフェイトはんは、待っているが飽きたのか

セラン・ブレ

「まだですか？」

「もうちょいやー！」

急かすな、これでもかなり急いで唱えているんやで！そこいらの奴なら半分も唱えられへんわ！！

「……そう…彼らが来るよ」

「何！？」

驚くと同時に右側の岸に水柱が上がった瞬間、フェイトはんが紅い光に飲み込まれ反対側の岸の方へ飛ばされて行った

なんや、今の紅いのは！？

「そこまですー！」

「！？」

振り向くと、さっきまでフェイトはんがいた所に赤毛のガキ、英雄の息子ネギ・スプリングフィールドが杖を私に向けて構えながら近づいてきた

くっ！さっきの紅いのは援軍の魔法使いか…

「このかさんを返して下さい！」

「はっ！アホか！返す訳ないやろ！ガキはさっさと家へ帰りい！」

「そうはいきません。ここで捕まえます！ラス・テル マ・スキ
ル マギステル……」

ガキは詠唱を唱え始めようとした瞬間、私の影に潜んでいたコタローは飛び出すと、同時にガキの顎めがけて右のアップパーを放ちそれは見事ガキの顎に当たり、垂直に3mほど跳んだ

突然の事にガキは何も出来ずに、重力に引かれるままに床に自由落下した

「ナイスタイミングや、コタロー」

「当然、ここで失態は取り戻させてもらっわ！」

コタローは指を鳴らしながら、ガキに近づいていくガキの方は気を失ってはいないが、恐らく軽い脳震盪でも起しているのか立ち上がろうとしているのに立ち上がれない状態だった

足に力が入らんようやな…まあ、気絶しなだけ褒めたるわ

「コタロー、後で東の奴らへの見せしめにするから殺したらアカ
ン」

「ん、了解や」

よしゃ！これでは私が呪文を呪言で完全解除するだけや！見とれ
関東の魔法使いども！！

- s i d e e n d -

- s i d e 亜子 -

ウチは湖畔の岸に着きネギ君を降ろしたと同時に、アシユタロス
の焰【赫灼かくしゃくの九泉きゅうせん天日てんじつ】を全開にすると、体を包んでいた薄紅の焰
は紅色に変わり踏み出した瞬間に祭壇に近づき、そのまま祭壇には
止まらずにフェイト君を掴んで反対側の岸へ跳んで行った

本当は森の奥まで連れて行くつもりだったが、フェイト君はウチ
の掴んでいた腕を引き離すと同時に蹴りを入れてきたので反対側の
岸の近くまでしか運べなかった

「驚いたよ、昨日とは雲泥の差のスピードだね」

「その割りにはあんま驚いてへんやろ」

ほんとに無表情過ぎやろ…

「昨日のリベンジのつもりかい？」

「うん、それもあるけどネギ先生がこのか助けるまでウチが君を止める」

「……いいよ、千草さんを守るのは僕以外にもう一人いるから、君の相手をするよ」

フェイト君は手をこちらに向けようとすより速く動き、ウチは手を掴みそのまま半身になって横にスライドさせるように脇めがけて横蹴りを当てると、その衝撃でフェイト君の顔が初めて苦悶の表情を見せたウチは続けて掴んだ腕を離し、腹部めがけて足で蹴り押した…その勢いそのままフェイト君は水煙を出しながら、後ろに二十m以上吹き飛んだのを見て驚いた

ちよっ！？アシユタロス！威力上がり過ぎやろ！？

《当然、ベリアルに渡された一蓄積分（魔力）を全て強化に回した。本当なら今の蹴りで肉体を貫いていたはずだ》

あかん……もう迂闊に蹴りできん

《安心しろ。あいつは普通じゃないから問題ない、それにこの状態は後、十分も過ぎれば消える》

それは敵性魔力による強化じゃないから？

《そつだ……来るぞ》

「……石の五百七十矢」

水煙の中から聞こえたフェイト君の声の先には昨日の夜に見た倍以上の石の矢が、ウチを囲うように襲い掛かってきたそれを見て、アラストルの固有能力だけでは対処出来ないのは目に見えていた

全部直進してくれれば、簡単にかわせるのに……なら！

「焼き尽くせ！晴天の煉獄業火！！」

アラストルの青色の焰を全身から体を守るように放ち、迫り来る石の矢全てを一瞬で灰にしたがそれでもフェイト君の表情は変わらずに淡々としやべりかけた

「……………それは皇帝のと同じ色だ。彼に負けず劣らず凄い焰だね」

「知ってるなら、その能力も分かっとなるやな？」

「着火した対象が完全に燃え尽きるまで、いかなる魔法をもって

しても消せない絶対焼殺の焰」

「そうや、これで物理的な魔法攻撃は完全に防げる。それに今なら身体強化でも君に勝てる」

多分やけどね……うん

「……そう普通の魔法使いなら、ここで引くのが賢明な判断だけど生憎と僕は君の性格を知っている」

「それが何やねん？ウチの性格知っているから言っても……破られる訳がない」

「確かにその焰を純粹に力で破る事は無理だろうね……でも、弱点が使い手の君にある」

ウチの弱点？どうゆう意味？物理攻撃が効かないなら負けたも同然じゃあ

突如、フェイト君は水面に僅かな波紋だけを残すと、次の瞬間にはすでに背後に回りこみその手には巨大な岩を削って作ったような彼には不似合い岩の大剣が握られ、今まさに振り下ろされようとしていた

その石の剣をウチは振り向くと同時に、煉獄業火を纏った手で剣に触れ剣は瞬く間に灰に変わり散ってしまった。それでもフェイト君は止まらずそのまま剣を持っていた手で拳を作り、勢いそのまま脇に拳を当てられその衝撃が全身を駆けた

「うっ痛っ！」

「武器を燃やした程度じゃあ僕は止められないよ」

素早く両手でウチの片腕を掴み手首と肘、肩を極めると同時に足払いをしてバランスを崩れた所に自分の体重をかけて倒れこみ、ウチを水面に強く押し付けそのままの状態で掴んだ腕を上にも勢い良く引き上げ、その瞬間に肘か肩の関節のどちらかが外れたような感じがした直後、拳を当てられた以上の痛みが体を貫いた

その痛みには歯を食いしばりながら痛みを耐え、全身から煉獄業火を放つとすぐさまフェイト君は、掴んでいた両手を離して距離を取りウチが腕を押さえながら立ち上がるまで静かにウチを傍観していた
完全に肘の関節が外れてる……

「こんな事女の子にするなんて最低や、フェイト君」

外れた肘を摩りながら、フェイト君に話しかけると

「戦いの場で僕は男女の差別はしないつもりだから、例え相手が格下でも加減はしない……」

「戦鬪狂」

「僕は戦闘狂じゃないよ、少なくとも取るに足りない人間には言葉もかけないし相手にもしない」

フェイト君は自分の強さに確かな自信があるんやろうな、それにくらべてウチは……

「だから少なくとも、僕は君を取るに足りない相手とは思わない……だけど本気で倒す相手でもないと思ってる」

「……はつきり言うね」

「事実さ、君には少なくとも弱点が三つはあるからね」

「三つも？」

フェイト君は人差し指を立てながら言った

「一つ、君は少量でも自分か他者の血を見ると軽いめまいか失神をする」

兄貴やな、失神の事をしゃべったのは……でも少しぐらいなら、この二年でだいぶ馴れていた。だからクラスで保健委員になったんやから

続けて中指を立て

「二つ、君は人を傷つける事に大きく抵抗がある。だから本気で戦えない」

「そんなん当たり前やる。人を傷つけるのは、いけないだなんて子供だつて知ってる」

「……三つ、君はその手を血に染める事を恐れている。だから僕の剣を灰にした時すぐに青い焰を消した。消さずにそのまま僕を攻撃していれば少なくとも、腕の関節を外される事はなかった」

「そ、そんな人を燃やすなんて事、出来る訳ないやる」

「ふん…だから君は僕に勝てない、能力面では僕を超えていても、人を傷つける事、殺す事のためらいと迷いが枷になり君の行動を鈍らせ遅らせる…誰かを守るつもりなら誰かを傷つける覚悟も必要だと僕は思うよ」

「……」

フェイト君の言葉に無言のまま、ウチはフェイト君を見つけているとフェイト君の視線が、後ろの祭壇に向けられているのに気付く。後ろを向くと、祭壇にある大岩から長い巨大な光る四本の腕が生えていた

「なに……あれ……」

「リョウメンスクナノカミ両面宿儺の腕…あの岩に封じられてる大鬼を蘇らせる事が僕達の目的だった」

「え、鬼！？じゃあ……」

「そう、僕達の勝ちだよ。あれは君の青い焰でも燃やすのは叶わない……その理由は分かるよね。バイバイ」

ウチに別れを告げると、フェイト君の姿は水に変わりその水は水面に落ちて消えた

「え……いまの？」

《今のは水で作った分身だ。本体は祭壇の方へ転移したと思う》

「なら、急がないとネギ先生が！」

《亜子、アラストルの焰が効くのは物体だけ。あれは物理的に接触出来る極めて密度の濃い霊体、倒すにしろダメージにしろ与えられるのはベルフェゴールの焰だけだ。それも【真名の焰】しかない》

「……真名の焰」

詠唱も長いし、何よりウチの意識がつか分からないけど……でも

「このかを助ける為にそれ以外に方法がないんなら、ベルフェゴールやるよ」

《うん、いいよ》

アシユタロスの紅色の焰を消して、ベルフェゴールの漆黒に近い黒の焰を纏いながら体の力を少しずつ抜きながらベルフェゴールの真名の焰を使う為の呪文を唱えはじめ

「わが欲するところのベルフェゴール、今ここに現れ我の身に汝の真なる姿を映せ。恐れたり躊躇することなく、一刻も早くすみやかに映し来たれ、そして我が意を満たし我が意に従い最後まで最後まで行いたまえ」

体を覆う黒焰の色は徐々に濃くなり視界は、少しずつ暗闇に覆われていくがそのまま詠唱は続く

「世界のいかなる場所からであれ、嬉々として、はっきりと、欺くことなくわれに従えこれは魔焰の帝、和泉 亜子が汝に命ずる…
ハアル・ベオル
来たれ！裂け目の王！！」

ベルフェゴールの真名を叫んだその瞬間に視界の全ては、闇に飲み込まれそしてウチの意識も闇に消えた……

- s i d e e n d -

？ 彼女と彼の戦い？（前書き）

大変にお久しぶりです
放置してすいませんでした
実に二ヶ月ぶりの投稿

? 彼女と彼の戦い?

- side - ネギ -

…間に合わなかった!

僕の眼の前には、大岩の中から巨大な上半身を出した筋肉質な体と四本腕を持つ鬼が姿を現した。その肩にはおサルの天ヶ崎とこのかさんの二人を乗せていた。そして鬼の真下、僕の数メートル前には黒髪に犬の耳と尻尾を持った『狗神使い』の犬上小太郎君が、僕に鋭い睨みを効かせていた。

そして、おサルの天ヶ崎はまるで夢を叶えた少年のような高笑いを上げていた

「アハハハハハハ!!もうこれでコワイもんは何も無い!!!どれほどの魔法使い、明日に来る言う応援もこいつの力で還付無きまですに塵芥残さずに蹂躪したるわ!そして、東に巢食う西洋魔術師達も追い出せるわ!」

「そんな事は絶対にさせない!!」

僕は杖を構え鬼が大岩から完全に出る前に呪文詠唱を唱えて食い止めようとしたけど

「オレの事を忘れるんじゃないで!!」

「!!」

コタロー君が凄く速さで走り出し、僕の目の前に立つと同時に腹をめがけて拳を突き出した。その拳を慌てて構えていた杖を盾にして防いだ

「はっ!呪文詠唱はさせへんで!ネギ・スプリングフィールド!」

「くっ!」

コタロー君は手足に気を付加して岩も砕く拳と木をなぎ倒さんばかりの鋭い蹴りを連続して繰り出しながら、僕に呪文詠唱をさせないように意識の集中をさせないように四方八方からの攻撃をして来た。それに合わせて風の障壁の強度を調整しながら攻撃に耐える

森の中一人で頑張っているアスナさんの為にも魔力の消費を抑えないと……でも、このままじゃあ

「よそ見すると怪我するで!」

「!?!?」

ほんの一瞬の気が散ったその瞬間に、コタロー君の拳は風の障壁を突き抜けて僕の頬に突き刺さり横に大きく吹き飛んで床に倒れた

「どや？、障壁突き抜けたで」

コタロー君は拳を握り、ざまあみろと眼で訴えていた。僕は口から血を垂らしながら睨みつけたがコタロー君は驚く様子もなく、逆にかかつて来いと言わんばかりに笑みを浮かべながら手招きをして挑発をしてきた

彼を倒さないと、鬼にもこのかさんにも届かない…でも、どうしたら

「どうした？はよ、来いや」

「くっ…」

「こんのか…やっぱ西洋の奴らは腑抜けやな。前衛の影に、こそこそと隠れてじゃないと呪文の一つさえ唱えられへんのか。息子がこんなじゃあ、父親はお前以上の腑抜けで腰抜けやるな」

「な…父さんは」

「違う言っつか？なら、言ってみろや」父さんは腑抜け腰抜けじゃない”って所を」

「それは……」

僕は続きが言えなかった。父さんが腑抜けじゃない所を…僕が知っているのは、父さんは『世界を救った英雄』、『千の呪文を使う最強の魔法使い』、『でも、本当は魔法は五、六個しか使えない魔法学校の中退生』の三つぐらいしかない…僕が言葉に詰まると、コタロ―君はさらに非難の言葉を浴びせた

「できひんのか…お前の憧れなんてその程度や、ただ周りが褒めて称えるから”きつと父さんは凄い!”と思つてそれ以上の事を調べもしないし知ろうともしない、それで真実を知つて失望する……お前みたいな勝手な憧れを抱いてその中を生き続けて、本当の現実を見ない奴はその憧れに溺れて溺死してしまえや!”

「うるさい!!”

僕は痛む頬や口から流れる血には眼もくれずにコタロ―君に叫びながら、杖に大量の魔力を付加強化し彼に殴りかかった

- s i d e e n d -

- s i d e 和泉直人 -

「スクナが復活したようだな……」

「あれは……鬼でござる……な」

「……そうだ。あれの復活こそが千草の目的だ」

視線の先には鬼神と言われた鬼が岩から上半身を出していた

これでおれの仕事もとりあえずは終わりだな……

視線を正面の目の前の片膝を着き、肩で息をしている長瀬に向けると破けたチャイナ服の下の肌からはうっすらと血が滲んでいるだが、長瀬の細い眼にはまだ諦めの感情は感じ取れなかった

「諦めたらどうだ？おれをここで足止めしても、見ての通り千草の目的は達した。このまま続けても意味は無い体力の無駄な消費だぞ」

「……そもいかない、お主はあの場所へ行くでござろう」

「まあな、悪いか？」

「いかせる訳にはいかない、あそこにお主も加われれば拙者達の……ネギ坊主と亜子殿の敗北は必死」

「ゆえに行かせない…か」

おれを止めた所で、まだフェイトも小太郎も居る、どちらにしるこちらの勝利は揺るがないがな

「……まあ、いいだろう。お前を倒すと決めた手前、完膚なきまでに叩きのめして祭壇へ行くでしょう」

おれは槍の刃先を空に向けていたのを、幾度目かの長瀬に向けさらに雷を付加して状態で走り、走る以上の速さで槍を突き走らせた

「雷瞬槍！」

雷は槍の先端から飛び出し、刃先に合わせて攻撃をかわすつもりだったであろう長瀬は飛び出した雷に慌てた素振りを見せたが素早く服の下から一枚の護符を取り出し札を盾に使い迫る雷を弾き、彼女の後ろにある木に当たりその衝撃で木は大きく折れる

「相変わらずのいい反応だ。だがこれならどうだ？桜点槍々」

続けて神鳴流槍術の奥義、超高速の連続突き…同じ連続攻撃の剣術奥義・百烈桜華斬の槍版、広範囲に攻撃し多数戦に優れた百烈桜華斬とは違い、突きで無作為に対象を攻撃する桜点槍々は対人戦にはとても優れ、何よりも技を繰り出す速さに関して槍術は剣術より

も遙かに速い

「くっ！」

迫り来る突きの嵐を長瀬は両手に苦無を持ち、捌いていくがこちらの突きは遙かに速い最初こそ捌けていたがすぐに対処は追いつかずに長瀬の体を切り裂いて行く、それに合わせて後ろに血が飛散するがそれでも諦めずに長瀬は捌くのをやめなかった

疾風の如き、鋭く鋭利な数百の突きが終わると同時に長瀬は力尽きたのか、再び地面に膝を着き顔をしかめていた。そして全身から血を垂らしていた

「大したものだな。だが大人しくおれの突きに飲み込まれれば苦しまずに楽になれたものを」

「……まだ、まだでござるよ」

しぶとい、予想以上に根性があるなそれに度胸もそこいらの奴よりもずつとある

「仕方ない、許せよ……プラクテ・ピギナル」

「なっ！？詠唱、お主は」

おれが呪文の発動キ―を唱え始めた瞬間に、木の向こうから連続

して発砲音が聞こえ後ろに跳び下がった。おれと長瀬は発砲音の方を向くと、そこには木の枝に立ち褐色の肌に長い黒髪の女がライフルを構えてスコープ越しにこちらを覗いていた

「真…名」

「新手か…余程、あのガキは仲間に恵まれているな」

真名と呼ばれた女は、木から飛び降りながらおれに連続して牽制の射撃をした。牽制の為なので弾丸の軌道はおれに当たる事はなく、あくまで長瀬が自分の傍に来る為の僅かな時間稼ぎだとすぐに分かった案の定、長瀬は真名の傍に跳んでいた

それを見たおれは軽く息を吐いた

やれやれ…どうやらお前と合流するのはもう少し先になるな千草

- s i d e e n d -

- s i d e 明日菜 -

「何よ、あの大きな鬼は！」

「大きいアルネ」

私と古菲、龍宮さんの三人でサル女の呼んだ妖怪達を全部倒して、私と古菲はネギ達の応援に龍宮さんは楓ちゃんの応援に分かれた。その途中の森の中でネギのいるらしい湖の祭壇の方から巨大な四本腕の大鬼が見えた

それよりもさつきからネギにしてもらっていた強化魔法の効果が消えているのが、気になる

「大丈夫よね……ネギ」

「何か言たアルか？」

「えっ…何でも無いわよ。それよりも急ごう」

「うむ」

私達がさらに急ごうと走り出そうとした時、足元に白い影が見えて私は慌てて足を止めるとそこには、ネギと一緒に祭壇へ行ったはずのカモがいた

「姐さん!!」

「カモ! あんたどうしてここにネギと亜子ちゃんはどうしたのよ

!？」

「兄貴が、兄貴が…」

「ネギがどうしたのよ……」

「ネズミがしゃべっているヨ……」

私がカモに話しかける姿を見て、横に居る古菲は驚いたようで啞然としていた

そりゃあ、そうよね…私も最初はそうだったし

「それはとにかく、ネギはどうしたのよ私にかかった魔法も消えちゃったし……カモ！」

「兄貴は…今、サル女の護衛と戦っているんだけどかなり劣勢なんだ。それも二人がかりこのまま行っても多分勝てない」

「何言ってるのよ！だからこうして急いでいるんでしょ！！？」

こうして足を止めて話している間にも、ネギが酷い目に遭っていると考えると私は居てもたっても居られなくなり走り出そうとしたが、カモが尻尾を絡ませて足止めしていた

「離しなさいよ！！バカカモ！」

「姐さん！今のままじゃあ、不安だ。だから姐さんにはもう一度新しい仮契約を……」

「はあ？何言っているのよアンタは」

ネギと仮契約バクティオーをしているのに……

「姐さんは知らないだろうけど、仮契約バクティオーするのは名前通り仮の契約だから別の相手との仮の契約も出来るんだ。つまりは姐さんが今度は従者の方じゃなくて主人の方に……」

カモの視線が、私ではなく隣にいる古菲に向けられているのに気が付き、頭の悪い私でもカモの言いたい事を悟った。つまりカモは私と古菲の二人で仮契約バクティオーを……キスをしろと言うのだ

「いや……流石にそれはちょっと、第一私は魔法使いじゃないし……」

何よりも女の子同士でキスなんて……そんな事、第一古菲がいいと言っ訳が……あ

狼狽する私を余所にバカカモは、古菲の肩に乗り耳打ちをしていたカモの言葉に古菲の顔は茹蛸のように真っ赤になり頭から煙を出していたが、カモは場違いなガッツポーズを取り

「問題無いぜ姐さん！OKだそうだぜ！」

「嘘つけ！！！」

「あべし！」

私は軽快な音をたてながらハリセンで、カモを古菲の肩から地面に叩き落した。しかし、カモは往生際が悪いので仮契約バクテイオウの魔法陣を出してそして力尽きた…残されたのは私と古菲の二人と気まずい空気……その中で先に口を開いたのは古菲だった

「…ア…アスナ、こっ今回はきつ…緊急だからとっ…と特別アルヨ」

「えっ…ええ！？」

驚く私を余所に古菲は、カモの作った魔法陣の上に立った…その表情は頬を紅めて、鬱向き気味に私を見ていたが明らかに恥かしがっていた古菲の恥かしがる姿を見て私も自然と頬が赤くなっていた。そして迷ったそれはもう一秒が数時間に感じる程にそして…私は悩みに悩み苦悩の末に古菲の待つ魔法陣の上に立ちそして向かい合い

「こ…これはノーカウントだからね」

「うむ、わ、分かっているヨ、こ、これはネギ坊主を助ける為に仕方ない事ヨ」

「……じゃ、じゃあ、い、行くわよ」

そして私と古菲は徐々に近づいて、十cm近く身長差があるのでネギの時のように私が少し腰を曲げて唇を近づけあいながら私達は目を閉じたその時、「五万オコジヨ\$ゲット」とカモの蚊の鳴くような弱い声が聞こえたような気がした

- side end -

? 彼女と彼の戦い? (後書き)

サブタイは本文を書いてから考えるので内容とあっていないかもし
れませんが

多分、あってないな…うん

? 彼女と彼の戦い ? (前書き)

やっぱり、まだ終わらない。

? 彼女と彼の戦い ?

- side フェイト -

やれやれ…話しにならないね

和泉亜子との戦いを抜け、千草さんの元へ戻った僕とコタロー二人に無謀にも戦いを挑み、床に這いつくばり顔を僅かに上げ視線だけを僕達を睨みつける彼の息子の姿があった。その姿はとても惨めで弱弱しく、哀れと呼ぶに十分相応しい姿だった……

僕が合流した時には丁度、雑に杖に大量の魔力を付加し酷く大振りで隙だらけの動きで、コタローに襲い掛かる彼の姿が見え思わず失笑してしまっようになった…彼ならあり得ない、いかにも”僕は戦いの素人”であると大きく宣伝でもしているかのように

案の定、コタローに見事なまでの拳のカウンターを喰らい床に体を強く打ち付けたりしながら数m吹き飛ばされた。それでもネギ君は気を失う事はなく素早く立ち上がり、魔法の射手を撃とうとしたので、とりあえず僕は彼の真横に瞬動で近づき脇腹めがけ拳を捻じ込んだ

その衝撃で、彼の体の骨が軋むような音が耳に届いたが聞き流した。その衝撃で詠唱は止まり痛みにうずくまるように両膝を床に着け、口から若干の吐血と酷く荒げた咳をした

「あっ…っほー！げっほー！ごほ…君は…」

「…ネギ君、どうやらここが君の限界のようだね」

「…ど素人のわりには、よおやったけどな」

「くっ……まだ……」

なるほど、頑丈さは彼譲りと言う訳か…が、まだこちらの力量の差を理解してはいないようだ

僕が彼に対しての評価を考えていると、後ろのコタローは少し機嫌が悪いのか目を僅かに細め僕を睨めつけるように見ていた

「……なんだい？」

「お前、直の兄ちゃんの妹はどうした？」

「別に…少し痛めに合わせたただだよ。彼女は多分、今は動いていない」

「ふん…じゃあ、ええわ。それとそいつはおれの相手や、助太刀はいらんわ」

「……」

彼の態度から、考えて恐らくは僕に彼を取られると思ったのか…発想が子供だ

僕はとりあえず、無言でネギ君の隣から離れて千草さんの方へ歩きながらコタローの横を通りながら

「分かったよ。なら僕はスクナが出るまで彼女の警護でもしているよ。でも、彼がこちらに迫ったら僕の相手だよ」

「ああ、そうしてくれや」

納得した様子のコタローの前には、まだ立とうとしているネギ君の気配を感じたが無視をした。

僕は顔を上げるとスクナの肩に乗る千草さんは少しイラついているように見える恐らくは思った以上にスクナが出るのに時間がかかっているからだろう

コタローに千草さんの護衛をすと言ったが、正直な少し退屈だ。恐らく和泉亜子以外にも援軍がいるはずだが、それも恐らく直人が抑えているであろう来る気配がない……気配がないと言えば、和泉亜子の気配がない。僕の知覚の範囲内に彼女がいない

逃げた？…それとも何かしらの攻撃の為に距離を取った？……いや、どちらにしろ僕を倒す事は出来ない。構えていれば何の問題はない

その時、後ろで誰かが床に倒れる音がした。振り向くとほんの数分前まで優位であったはずのコタローが床に伏せている状態で、そ

れを見下ろしているネギ君がいた。その彼は、かなり荒い呼吸をしながら僕を睨みつけるが顔が腫れて迫力に欠けているだ

僕は彼の全身を見ると、コタローを殴ったであろう腕の拳には震えていた…それを見て僕は推論を彼にぶつけた

「自分の体に無理やり仮契約の強化魔法を付加したのかい？」

「……」

咳払いの後の無言が周りに響いた

「正解と受け取るよ…でも、それはリスクの悪い方法だ」

「うるさい、このかさんを……返せ」

彼はふらつきながら痛む体に堪えながら、一步一步と僕に近づいて来る。その姿はかつて傷だらけの状態で巨大な敵に挑んだ彼とダブった

「君の決意は分かった。でも、その要望は届かないよ、本山で言ったように君は僕には勝てない…」

「そんな……の……分からない」

虚勢を張る気には迫力も覇気もまるで足りないよ……でも、いいさ。スクナが出るまでの余興で暇つぶしだ。彼に教えるでしょうコタロ。のような中途半端な実力ではなく、本物の実力者というものをね

そして、僕は彼の間合いに瞬時に入り込み腫れた頬をさらに腫れさせようと拳を振ろうとした時、彼の後ろの森の中から何か飛び出すのが見えた。それは直径は五メートルは優に超えた巨大で赤い塗装がされた棒状の物、それが僕達の頭上を通り過ぎ矢のような速さでスクナの肩めがけて真っ直ぐに伸びて行き、スクナの肩と脇の丁度真ん中部分に直撃した。その衝撃でスクナの体が若干ぐらついていた

「あれは…アーティファクトの」

確か…あれは中国は孫悟空の如意棒を模した神珍鉄シンチンテツジヤイコン自在棍何故あれがここに…いや、それよりも上から誰か来る

上を向き、自在棍の上を走る人物の気配に覚えがあった。それは本山の浴場で僕の石化魔法で石化せず何故か服だけが石化した人物…そう確か名前は

「神楽坂明日菜」

- s i d e e n d -

「姐さん！！このまま全力疾走だ！」

「分かつてるわよ！」

私はカモを肩に乗せ手にハマノツルギ（ハリセン）を持ちながら古菲との仮契約バクティオーで手に入れた古菲のアーティファクトを足場に、このかのある大鬼の…サル女がいる所まで一心不乱にただ全力で走っていた。カモの話しだと、あの大鬼はこのかの魔力で制御されていくらしく、このかさえ取り戻せればサル女は大鬼を操れないらしく、だから古菲のアーティファクトを足場に使ってこのかの所まで行く事にした

「カモ！このかを取り戻した後はどうするのよ！！あの鬼暴れるんじゃないの！？」

「多分大丈夫だ！ああ見えて、あのデカブツはまだ完全に実体化していないから、このか嬢ちゃんがいなくなれば、多分あの岩の中に引き戻されるはずだ」

「多分って……」

でも、他にいい手がないって言うし……とりあえず、まずはこのか
を助ける事を優先しよう！

さらに気合いを入れて、スピードを上げようとした時が十数メートル先に人影が見え目を凝らすとその人物は私の浴衣を石にした白い髪の少年が、突如水たまりから現れ立ち塞がっていた。それを見て止まろうと考えたけど、その間に大鬼がこの棍棒を払ったらこのかを取り戻せなくなるのは目に見えていた。だから私は走りながら怒鳴った

「あんた！邪魔よ！！退きなさいよ！！」

「無理だよ」

「なら、ぶん殴る！！」

「それも無理だよ。君程度の力で僕に拳が届く訳が…」

しゃべり終える前に素早く私は拳を力の限り振ったが、少年は“のれんに腕押し”のようにしなやかに無駄なく糸もたやすく私の拳をかわされた。そしてカウンターとばかりに拳を作り一切のためらいも躊躇なく、私の胸辺りをめがけ弾丸のような速度の拳を突き出した

「くっ！このー！」

咄嗟に体を前に倒れ込むように倒して、ほんの一瞬まで。私の胸があった場所に少年の拳が風を切りながら通過した。そのまま本当に倒れそうにもなるが、毎日の新聞配達で鍛えた足腰でかなり無理

な体勢になっても歯を食いしばり、どうにか踏みとどまった。

そして、すぐさま足に力を籠め力の限り棍棒の地面を蹴り上げ今度こそ最高のスピードになった。それで少年を振り切れると思った…けども少年を振り切ることは出来なく私の後を追ってきた

このままじゃあ、サル女との挟み撃ちになっちゃうどうしたら…

前を向き、視線の先には大鬼の肩までおよそ二百mくらい、そして今のスピードなら後十秒くらいで多分たどり着ける。それまでに後ろの少年が、魔法を使う前にどうにかしないとネギ変わって今度は私が二対一のそれも退路の無い挟み撃ちになってしまふ…足りない頭で必死に考えていてもいい方法が浮かばない

どうしよ…このままじゃあ…このかを助けられない…

その時、肩に乗るカモが突如として叫んだ

「姐さん！！カードの機能を使うんだ！！」

「えっ？カードの機能…：あ！」

そうだ。仮契約カードの機能には

バックティオー

私は頭で浮かびきる前に無我夢中で手が動き、スカートのポケットからつい先ほど出来たばかりのカードの機能を使う為、ぶつつけ本番でカード掲げて叫ぶ…カモが昨日、旅館のロビーの休憩処で言っていた仮契約バクティオが持つている機能…契約者との念話・従者のアーティファクトそして従者を呼び出す機能を！

エウオー・コウオース
「召喚！！古菲！！」

その瞬間、目の前に円陣の中に六芒星が書かれた魔法陣が浮かぶと同時に古菲が現れ、私は走りながら古菲との会話などはできなかつたけど、一言だけは古菲の耳に届ける事は出来た「お願い」その一言で古菲の眼は目の前の状況を理解してくれたのか、少年の方を睨みつけると同時に自慢の中国拳法の構え見せると、後ろから来る少年に対し恐らく手加減なしの本気の一撃を放った

私が見たのはそこまでで、その後は見ていない。何故ならその後は目の前しか見ていないから…

- s i d e e n d -

- s i d e ネギ -

「アスナさん……カモ君」

僕はただ見ている事しか出来なかった。突如として僕と白髪の少年の頭上を通り過ぎ巨大な大鬼に直撃した巨大な棍棒、その上を走り抜けて行ったアスナさんと僕を攻撃しようとしていたはずの少年は、僕には目もくれずに転移魔法でアスナさんを追った

僕は白髪の少年の転移魔法に反応する事も、アスナさんの後を追う事も出来ずに二人の後ろ姿を、腫れた瞼の下の瞳から見事出来なかった……僕は唇を強く噛んだ。それこそ、すでに口の中が血の味でいっぱいだったのも気にせずに、強く、強く

アスナさんにあの妖怪達を任せて、このかさんを助けると約束したはずなのに！……僕はそれすら満足に出来ず、大停電の時と同じでまたアスナさんを危険な目にそしてまた助けてもらっている……僕は3-Aの先生で皆を守らないといけないはずなのに……アスナさんだけじゃない、桜咲さん、このかさん、古菲さん、楓さん、のどかさん、綾瀬さん、早乙女さん、朝倉さん、和泉さんも、僕が至らないからダメな先生だから巻き込んだ……

「僕が……弱いから……頼りないから……」

父さんのような『立派な魔法使い』になる為に、日本に来て修行して一人前の魔法使いになってあの時の父さんのように大勢の誰かを守れるくらいに強くなるって決めたのに……でも、実際、僕は無力だ。危なくなったら、周りに助けってもらってどうにか乗り越えてる……皆は「子供だから」と言っておいてくれるそれに……あれ？

そこまで思っていたら、自然と涙が眼から頬を伝い下へ流れて行く……それだけではなく、僕は膝を床につけていた。立ち上がるうとしたが、力が入らない

どうして……急に……あ

理由はすぐに思いついた。至極単純な事だ。僕の魔力が限界に近きそれに伴って僕の意識が落ちようとしているから……例えるなら大量の電気を一気に使った後わずかでブレイカーが落ちる寸前の状態

気絶する訳にはいかない……無力な僕でも……せめて、せめてこの戦いを最後まで見届けないと！

必死に意識を保とうとしても、体が言うことを聞いてくれない……それでも、必死に決死に戦いが終わるまで見届けようと顔を上げてアスナさんの方を見つめていると

「ふん、ボロボロだな。ぼうや」

「え？」

今の声は……まさか……そんな

後ろを振り向くと、そこにいたのは夜でも輝く金髪を揺らしながら黒いマントを羽織、堂々と毅然とした様子で、僕の背後に腕を組みながら立つエヴァンジェリンさんと影のように静かにその後ろに立つメイド服の茶々丸さんがいた

「エヴァンジェリンさん、茶々丸さん……どうしてここに……」

「じじいに救援を頼んだだろ。生憎と手頃な奴があの時いなかったから、だから仕方なくめんどろだが、私が来てやった……それだけだ」

僕は本山を出る前に、学園長に連絡して救援を求めていたの思いついた。連絡した時は、最初タカミチが来てくれると思っていたが、その時は運悪く出張で海外に出ってしまった。僕は学園からの救助は無いと頭をよぎったが、その後学園長が何かを思いついたのか「もしかするとタカミチ君以上の人材を送れるかもしれん。がんばってくれ！」と言って電話を切った

まさか、エヴァンジェリンさんが……でも、呪いは？学園の外には出られないはずじゃあ

「何だ？呪いの事でも気にしているのか？ぼうやが気にする必要は無い。それもあのじじいの責任だからな」

「??？」

多分、僕の心を読んだエヴァンジェリンさんは素っ気なく答えると、僕の前に近づくと、顔を近づけながら

「まったく、せつかくの奴似の顔が台無しだな。情けない、それでも奴の息子か？」

「あつ痛つ！痛いです！エヴァンジェリンさん！」

「ふん……茶々丸」

「はい、マスター。ネギ先生失礼します」

後ろに控えていた茶々丸は前に出て、僕の前に座り僕の顔に消毒薬を吹きかけた。それは顔全体が腫れている僕にとってとても染みて針で刺されるように痛く、先ほどまで意識が落ちる所までいたのが、嘘のようにはつきりと意識が戻った

僕を余所にエヴァンジェリンは大鬼を見つめてながらつぶやいた

「どうやら、神楽坂明日菜は成功したようだな……が」

「え？あつ！」

僕が眼をエヴァンジェリンさん達に向けている間に、アスナさんはおサルの人からこのかさんを抱きかかえながら取り返していた……そして大鬼の肩から飛び降りていた

「ええええ〜！ちよつ、アスナさん〜！！！！？？」

いくら頑丈なアスナさんでも、その高さはさすがに死んじゃいますよ！？

「あのバカ、どうせ考えなしに飛び降りたな。まったく…バカは死ねばいい」

「え？エ、エヴァンジェリンさん！？」

「恐らく、着地と同時に衝撃で両足の骨折と全身強打で生命が危ういかと…」

「茶々丸さん！？」

慌てる僕を余所に、救いようのないバカを見る目でエヴァンジェリンさんはアスナさんを貶し茶々丸さんはロボットだから冷静沈着にアスナさんが着地した際のダメージを淡々と分析して述べていた

- side end -

？ 私は神秘を否定する（前書き）

ようやく三日目、対スクナ終了！でも、まだ続く！

? 私は神秘を否定する

- side 明日菜 -

ああ……私、死ぬんだ……

「こら！ちよつと！姐さん！！何、諦めているんっすか!?!」

カモ……あんたも道ずれに……あの世へ……

「何、オレっちまであの世に連れて逝こうしてるっすか！まだ姐さん生きてます！」

「え……あつ、ごめんでも……どうしよっか？」

私とこのかにカモの二人と一匹は今、鬼の肩から水面へ勢い良く落ちていく最中だった……サル女の所までたどり着いた私を、突如サル女が札を投げ出した。するとサルとクマの巨大な動くヌイグルミに変わり、それが私に襲い掛かって来た。とりあえず、無我夢中で手に持っていたハマノツルギ（ハリセン）で、思いつきりぶった叩いたら煙を出しながら札に戻っていった

そのまま札を手で払い飛ばして、まだ攻撃を仕掛けようとするサル女に対して、私は肩に乗るカモを空いている手で掴み、それはもう渾身の力を込めて全力の限りを尽くして投げつけた投げる時、カモが何か言おうとしたけど聞き流した

勢い良く投げられたカモは痛そうな音を出してサル女の顔面に見事命中した。さらに私はトドメとばかりに、ハリセンをサル女の頬

めがけて思いきり振り上げ軽快な音を回りに響かせて見事類に命中

目を回しているサル女を無視して、足元にどうゆう原理で浮いているか分からないけど、眠っているこのかを抱きかかえる所までは完ぺきだった……なのに

どうして、飛び降りちゃったかな……私

もと来た道を引き返せば良かったのに、何を思ったか大鬼の肩からこのかを抱えたまま飛び降りてしまった……数秒前の自分を殴りたい

だから、みんなにバカレツトって言われるのかな……もっと考えて行動しよう

そして、今に至る……

「どうしょ！カモ！？」

「何か方法があるはずですよ！姐さん！！」

方法って……多分、数秒で水面に叩きつけられる。確か数十mの高さから水面に落ちるとコンクリートに落ちるのと同じくらいの痛さってテレビで言っていた気が……ああ！私のバカバカ！……どうしたらいいの！？このかを助けられたのに……！！

死ぬ直前は一秒が数時間のように長く感じられる……そんな話をふと思い出して、こうしてカモと話したり考えているのも、本当は一秒にも満たないんじゃないかと思うと、衝突までの時間は非常に苦しくて怖い……良くホラー映画で殺される直前まで恐怖を味わうシーンで「いつその事、早く殺して！」と泣き叫び絶叫しながら死んでしまう脇役の俳優や女優の表情が時々オーバーだと思う時が見てあるけど、実際直面すると恐ろしいこの上ない。それを演技で本当のように表現している俳優達は改めて凄いと思った

そして、こうやって独り心の中でつぶやいている間、まだ私は水面にぶつかってもいない……本当に死ぬまでの数秒は長かった

こんな事になるんだったら……高畑先生に告白でもしておけば良かったな……

死ぬ直前は走馬灯があると良く聞くけど、そんな事が起きる気配も感じも何も訪れない……ならせめて想い人の笑顔を臉に浮かべながら逝こうと、そう思って私は目を瞑った……でも、最後にあいつに謝っておこうと

ごめんね……ネギ……

その瞬間、足元から光を感じた瞬間に私は何かにぶつかった……コンクリートのような硬質感でもなく、水のような冷たさもない。感じるのはそう良く知っているひと肌の温もりだ

私は恐る恐る目を開けると、そこにいたのは顔じゆうを酷く腫らしたネギとその後ろに、まるで行動がバカ過ぎて声もかけるすらも馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの視線を送る、本当なら学園にいるはずのエヴァンジェリンと少し心配したような、表情を見せる茶々丸さんだった

突然の事で訳が分からない私は、とりあえず三人に向かつて一声を放った。それは後々で自分でもバカだったと思う一声だった

「ここ……天国？」

「……………あほか」

「違いますよ、アスナさん。ここは天国じゃありませんよ」

「え…でも、私このか抱えてあのデカイ鬼から飛び降りて…」

「お前が飛び降りた後、ぼつやがバクティオー仮契約の従者呼び出し機能で、お前をここに呼んだんだよ。そのくらい、その足りない頭ですぐに気付…いや、足りないから無理か」

エヴァンジェリンの説明にそうなんだ。納得した気持ちと、頭の悪さをバカにされた事が言い返せない悔しさを感じながらも、とりあえず生きていた事に安堵して隣で寝ているこのかを見てとりあえず気持ちを静めた

でも、後で必ずぎゃふんと言わせてやる！

心に誓いながら、急に白髪の少年の足止めを頼んだ古菲が心配になる頭上の棍棒の方へ顔を向けた

- side end -

- side 古菲 -

「くやしいネ…これほど差がアルとは……」

「いや、一般人でそこまで体技を極めている君は十分賞賛に値するよ。もっとも君と僕とでは決定的なほどに場数が違うから、この結果は当然だけど……いや、結果的に僕を足止めに成功したのだから僕は勝負に勝てたけど、戦いには負けたと言うべきかな」

無表情のまま、膝を着き肩で息をしている私を呼吸を乱さず冷静に状況を分析して、私を見下ろしている白髪の少年……つい数分前にアスナに突如として魔法で、いきなり呼ばれた時は驚き内心慌てたもしていたが、アスナが珍しく真剣な声で私にお願いするからそこはクラスメイトと同じ3-Aのバカレンジャーがレッドとイエロ
ー…バカに余計な言葉はいらない

直感に心を感じるままを頼りに、とりあえずアスナを後ろから追う少年に一発拳を打ち込んでみると少年は私の拳に動じる事もなく、片手で受け止められた瞬間に私の拳法家としての直感が電撃のよう

に全身を駆け巡った

強い……刹那や楓よりもずと強いヨ

戦いに関する勳は先祖代々古家に脈々と受け継がれているその血が告げていた。目の前少年は間違いなく過去最強の実力者であると！

私は躊躇わず躊躇無しの一撃為にさらに氣の密度を上げながら、掴まれている拳を開き掴んでいる少年の手と手組んで、間合いから逃げられないようにすると同時に素早く片足を少年の股の中心まで半歩前まで踏み込み、さらにもう片方を蹴り上げるように力を込めその勢いをもう一方の拳に乗せた馬蹄崩拳マテイーボンチュエアンを少年の腹に放つ

拳は直撃し、衝撃で少年の体はくの字に曲がった。ように見えたが実際は拳は当たる寸前に見えない壁のような物に遮られ、私の拳は届いていなかった

見えない壁に驚く私を余所に、少年は組み合わせている手に力を込め決して離さないと言わんばかりの視線を送りながら

「いい拳だね。でも、君の力は一般人の枠の中だ。枠の外の僕には届かないよ」

「ぐっ、今のは何アル!？」

「魔法障壁。今の君じゃあ決して破れない不可侵の壁だ」

そして少年は組み合わせている手を引き、私を自分の所に引つ張るとお返しとばかりに拳を私の腹に当てようとした。その拳には並外れた威圧感を纏っているのを感じ取れたので咄嗟に氣を一点に集め、体の硬を高める硬気功で防御したが

「うぐっ！あっ…！」

「その程度の硬気功で僕の拳は受け止められないよ」

防御を突き抜け衝撃は私の体の内部に響き同時に、少年の放った拳が氣を相手の内部に流し外からでなく、内側から壊す浸透勁であると悟った

本来なら触れて流す浸透勁を当たる時の一瞬で流すなんて…やはり、この少年は強い！でも負けられないネ！

せっかくの実践、久しぶりの強敵。怖さよりも強くなりたい気持ちと戦いに対する鼓舞が怖さに勝り、何よりも友人の頼みを叶える思いに応える為に自然と怖さも消えっっていく…

私は掴まれている手を握り返しながら、今度は私が少年に浸透勁を放つ為に少年に触れようと手を伸ばすも、さすがに少年もバカではないので手を弾かれカウンターとばかりに蹴りを打ち込まれる。その蹴りも鎌のように鋭いながらも鋼鉄の鉄槌のように重い、それでも私が手を離さずに攻撃も止めずに一心不乱猪突猛進に少年に攻

撃を続けた。時間にすればほんの数分、打数にすれば十数打。それでも、私には圧倒的な実力差を感じられずにはいられない……それでも攻撃をやめなかったのは、きっと私はアスナ並にバカでニブチンだからだったかもしれないが……最後は私が手を離し、膝を着く事になり負けたが勝利に少年はさして興味もなく淡々と結果を述べて最初の会話に戻る

そして少年は私から視線を外し、後ろにいる鬼を見つめていたが小さくため息を吐き

「僕が手を貸してあげたのに千草さんもあんな簡単にお嬢様を取り戻されるなんて、情けないと思わないかい？……真祖の吸血鬼？」

ハイデライト・ウォーカー
真祖の吸血鬼？急に何を……あ

「ふん、そんな事私が知るか、小僧」

いつの間にか、少年の後ろに伸びる影に寄り添うように静かに旅行を欠席したはずのエヴァンジェリンが背後に立っていた。その気配は私の知る彼女とは似ても似つかないほど、夜空に浮かぶ月と地を歩くすっぱんのような圧倒的な威圧差を感じる。少年も威圧感を感じているはずなのに、それでも動じる様子はなく彼女に視線を送りながら

「君が相手だと分が悪い……千草さんには悪いけど、ここで退かせてもらおうかな」

「逃がすと思つのか？」

「……ここで君と戦っても僕には何のメリットもないのはデメリットだけ。それに君も分かっているだろう？僕を倒しても事態に変化はない事ぐらいは」

少年の言葉にエヴァンジェリンはしばしの沈黙の後に

「……いいだろう。今回は見逃してやる。さっさと何処へでも行け」

えっ！？大丈夫アル逃がして…？

「そうさせてもらうよ……それと、最後に名乗らせてもらうよ。僕はフェイト。フェイト・アーウェルンクス。小僧じゃないよ真祖ハイデインの吸血鬼」

それを最後に少年の体は水に変わり、あとに残ったのは小さな水たまりだけだった

「ふん、私に言わせれば貴様は小僧だ」

少し落胆したような感じをしたエヴァンジェリンは私の方に視線を向けると、いきなり

「ん、何だそこにいたのか。バカその二」

「むっ、失礼アルネ。さきからここにいたヨ」

確かにバカアルが

「そうか、神楽坂明日菜はぼう…先生の所に戻っている。お前もささっと戻れ」

「いつの間に…それよりもあのでっかい鬼はどうするヨ?」

私が大きな鬼を指さすと、エヴァンジェリンはさも当然のような口ぶりで堂々と

「お前が心配する必要は無い。あのデカブツは私が…!」

「どうしたアル…!?!」

急に悪寒が体を駆け抜け、顔を空に向けると星空で覆われていた空から星明かりが消えた。その代わりに膨大で濁流の様に荒れ狂いながら押し寄せる濁り淀んだ不安。心を潰すような悪意。そして冷氷の刺すような冷たさが、生ぬるいと感じる程の微塵の暖かさも温もりも無い殺意が、万力のように強く重く空気に周囲に等しく締め付ける

私は初めてその混沌で冷たすぎる気配に硬直し顔を空から外す事

も、目を逸らす事も出来ずにいた…怯えながらも私は見つけた

上空を覆い隠すほど巨大で光さえも飲み込むほどの底知れない暗闇色に染まった蝙蝠の翼のような、一對の黒翼が空に佇んでいるのが見え同時に悟った。この他を寄せ付けられない冷酷な殺意と不安感はその翼の持ち主が放っている事を……

- s i d e e n d -

- s i d e 和泉直人 -

「何だ…この殺意と押し寄せる不安は」

おれは湖周囲に押し掛かる殺意と不安に驚きながらもその原因が空にいる事を感じ、見上げるとそこには短く見ても全長数十m、幅は5mは軽く見積もってもある暗闇色の巨大な蝙蝠の翼を見つけた。そしてその黒翼の根本に自分の妹がいる事も遠目の魔法で視て分かった

亜子…一体何をした？

妹の容姿は変わっていた。先ほど会った時のローブを着た姿から、黒い焰で作られた黒いワンピースに足には同じ黒い焰のヒール、そして生まれつき色素の薄い髪は黒くショートヘアの髪は踵ほどまで伸び、眼と唇は血を垂らしたかのような口紅などでは到底再現する事も生み出せないであろう鮮やかな鮮血の赤になっていた。これでも十分な変化だが、一番の変化は体格とこめかみから生える白く捻

じれた角だ

元々お世辞にも恵まれた体格じゃなかった亜子の体は、それこそオレの足元で気を失っている忍者の長瀬と真名と呼ばれた褐色の銃使い、後輩の桜咲久遠のように、年齢とは不釣り合いのように妖艶に豊かに成長し身長も遠目で二十cm位は伸びている

その亜子は上半身を大岩から出しているスクナに向けて両手を伸ばすと、そのまま手を合わせ再び手を開くと手と手の間にソフトボール大の黒い球体が生まれ、それはさながら宇宙に浮かぶブラックホールのように周囲の魔力を吸収し始め徐々に巨大化していき瞬間に、バレーボール大から大玉のスイカほどに変わりそれに比例して、魔力の吸収するスピードを上げていきものの十秒ほどで、亜子の体を遥かに超えた五十mほどの球体に成長した

それほどになると、周囲に魔力など微塵も無く杖で浮いている者ならば、身を守る術なく地面に落とされる事は間違いないだろう

あの球体をスクナにぶつけるつもりか？……いや、違うな

球体は一回りずつ、徐々に小さく萎んでいき瞬く間に元のソフトボール大に戻り同時にオレは小さいながらもあの黒い球体に恐怖を感じた。あれは萎縮したのではなく、考えられないほどに凝縮・圧縮した魔力の塊：爆弾であると、ひとたび圧縮から解放し弾ければこの湖など驚くほど容易に吹き飛び、その余波で周囲の地面はひっくり返る。それはさながら以前アメリカはアリゾナで見たバリンジャー・クレーターのようになるだろう

「亜子!!よせ!!」

上空、数十mにいる妹に声が届くはずがないのにおれは声を出し叫んだ……しかし、予想に反して亜子はおれの方を向き何かを口ずさんだ。その赤い眼には笑みが込められ、そして再びスクナに視線を向けると、聞こえるはずのない亜子の声が周囲に響いた「大丈夫」と……

- s i d e e n d -

- s i d e 亜子 -

兄貴も心配性やね……な?ベルフェゴール?

《そうだね。でも、これの凄さが分かるから叫んだんだよ。よせ
って》

そうなんか……でも、大丈夫なんやろ?

《そう。私の焔に人を殺める力も世界を傷つける力もない……あるのは、この世にあるべきではない、非存在の力を殺す力》

それがあの鬼達や魔法?

《そうだよ。だからあとは叫べばいい、技名をね》

技名……なんや、恥ずかしい

《大丈夫だよ。この高さなら誰も聞こえないから……さあ、母さん》
えつと、じゃあ……

ウチは小さく咳払いをして技名をつぶやいた

「オール・テイナイル私は神秘を否定する」

- s i d e e n d -

？ 戦いの後（前書き）

今年最後の投稿です。来年も不定期ですが続けていきますので、よろしくお願いします。そして最後に一言だけ、コミケ人多過ぎ。

？ 戦いの後

side 月詠 -

千草はんはうまくいったやろか

ウチは千草はんのアジトで怪我の治療中で布団の中、一昨日の先輩（刹那）との戦いでウチは腹を斬られた。その事に関して恨むつもりは無い、もとより正々堂々とした戦いでなくこっちの不意打ちから始まった斬り合いで殺し合い、仮に殺されても文句などあるはずもなく、むしろウチの性は真性の戦闘^{バトルマニア}狂故に戦いの中で死ねるのなら、それはそれは大願成就と呼んでもいい

といつても、ウチを満足させるお人は早々おらへんのが残念やけど

周りは自分の事を『狂人』『人ならざる人』と言うけれど、ウチは手に武器を持つ人々は大なり小なりに、人を斬る事殺す事に悦を覚えていると思う。でなければ人を殺すという発想も傷つける思想も浮かぶはずがない……ただ、自分の場合は人を斬る殺すが他人より悦が少し大きいだけだと思う

うん、一人だと色々考えてしまいますわ

ウチにとってどうでもいい事だからと、考えるのをやめて布団に潜り再び寝る事にした時、ウチのいる四畳半の和室の襖の向こう六畳の和室に誰かいる気配を感じた。ウチはその気配に覚えがないので、もしかすると本山の陰陽師がウチを捕まえに来たかもしれない。そう思い誰かに向かって声をかけた

「誰ですか？本山の人ですか？」

だが、返事はない……ウチは手元にある小太刀を手に取り立ち上がり、まだ痛む腹を労りながら思いきつて襖を開けた。そこには誰もいない……あるのはその辺のスーパーで売っているような少人数用の茶色のテーブルとその上に置いてある湯呑一式のみ。特に変化した所もない

気のせい？ウチの勘違い？

首をかしげてながらもう一度、周囲を見るも変化はなかった。やっぱり、ただの勘違いだと踵を返して部屋に戻ろうとした時だった。チクリと針に刺さったような鋭い痛みを胸に感じた

疑問に思いふいに胸を触ると、滑り気のある赤い液体が付いていた。それはウチがとても馴れ久しんでいる物で、ウチの好物………血だった

その瞬間、口の中は血が溢れ漏れた血が畳の床を血に染め上げ、そして理解したこの血はウチの物でウチは胸を何かで貫かれたと

咄嗟に氣で体を強化して持ち堪え、再び六畳の和室を見るとそこ

には、つい今しが誰もいなかったはずの和室に黒い誰かがいた。全身を黒衣のロープで覆い隠し顔は眼しか付いていない白い仮面を被り、足元からは紙のように薄い影がまるで意思を持っているかのようにつくねくと触手のように動き、その一本に血が付いていた

ウチはあれがウチの胸を貫いた事を悟りながら弱弱しい声で黒衣の男に話かけた

「誰…ですか…」

「小娘よ。ご苦勞であつた」

「……フェイトはんの…お仲間ですか？」

その問いに黒衣の男は答えない

図星やる

「そうやる…フェイトはんと同じで、何や作り物の臭いがするわ」

「知る必要は無い。必要の無い駒は捨てるのが常であろう？」

そう言いながら、影から太く筋肉質の黒い腕が現れその手には人体を縦に裂くには十分過ぎる刃が握られていた。それを見てウチは思った

つとも近衛詠春サムライマスターと比べたら、未熟としか言えないが……

いや、小娘の事はもういい考えるだけ糖分の無駄だ

我にはまだやるべき事が残っている。今は、かの地に眠る我が主の復活と我らの大願である”世界を救う”その二つを叶える為にやる事は多々あるのだから……そして我にはそれとは別にやるべき事がある……憎き眼鏡の二人に復讐するという目的が！

テルティウム
三番目はきちんと奴を送ったであろうか……

- side end -

- side 天ヶ崎 -

ありえへん……こんな……こんな……こんなことになるなんてありえへんやろ……！

私は無我夢中で山の中を突き進んでいた。昨日の夜、苦勞の末に復活させた鬼神スケナがまさか、簡単に殺されてしまうなど予想もしなかった

あのハリセン娘にお嬢様を奪い返られた時は、さすがに焦ったが

それでもすぐにスクナの力を用いれば簡単に奪い返す事は訳なかった……あの悪魔が現れるまでは

あの身の毛もよだつ悪寒、不安、殺意を引き連れ現れた捻じれた角の悪魔は、わずか一撃の黒い焰を帯びた魔力の砲撃でスクナの上半身を消し飛ばすほどの大破壊をやつてのけた。それも倒すではなく、殺した神格化した霊体は倒しても時間……年月の流れと共に復活する。故に殺す事は人の手では叶わず、最強を誇っていた魔法使いナギとその一行は封印という形で十八年前にスクナを倒した

何者にも与える事が不可能な死を最期をあつた悪魔は与えた……これを恐れずにはいられないが、諦める訳にはいかない。この国から憎き魔法使い共を追い払うまでは！

鬼神がダメでも、まだこの国には鬼神に匹敵する神格を持った化物達はおる！因幡の雷龍に出雲の高志之八ヤマタノオロチ俣遠呂知、怨霊神の崇徳天皇もいる。今度こそ今度こそは……！？

私は考えながら走るのをやめると、森の開けた場所に出ていた。そこには日の光が当たり、そこだけがまるで周囲の森とは別の場所を感じた。そして、その中心にはいつの間にか姿を消していたフェイトはんがこちらに視線を向けていた

「フェイトはん……」

「千草さん、残念でしたね」

「ふん、よお言っわ。抜け抜けと途中で逃げたクセに」

「……」

私の嫌味にフェイトはんは、特に応えずに私を見つめていた。それが私を余計にイラつかせ思わず怒鳴った

「あんたや直人はんが、しっかり守ってくれたら！今頃、本山を制圧いてたわ！役立たず！！」

「否定はしないよ。確かに今回は僕が和泉亜子をきちんと足止めせずに、取るに足らない相手と過少評価して放置したのが原因だろうね…直人の方はしっかりと仕事をしたみたいだけど…」

「なら！次も手を貸し！そしたら…」

「それは出来ないよ。僕はもう君に手を貸す気はないから」

「な！？なんやて！？、！？」

私が驚きの声を上げたその瞬間に、フェイトはんの周囲の空気が変わった。それは先程まで、静寂な湖畔に荒れ狂う風が押し寄せ水面を大きく揺らすような水面の乱れ

思わず懐から呪符を取り出そうとした瞬間フェイトはんの姿は消えると同時に急に足元がおぼつかなくなり、地面に倒れる

何や…この強烈な眠気は…西洋魔法の眠りの霧？

「千草さん…聞こえてますか？」

ぐっ、声がでえへん…私に何しよった

「あなたの出番は終わり……ました。あなたへ…のせて…の贈り物として、あなたに【幸福の世界】を差し上げ…。あなたはそ…ここで終わりな…福を味わって…さい」

薄れていく意識の中でフェイトはんの言葉が途切れ途切れに響き、同時に自分の意思が体から離れていくような魂が抜ける幽体離脱と言っても違いないような虚脱感

幸福の世界……？何を言うて……あかん、意識が…き…え……てし…

「最後に、この魔法の名は完全なる世界」
コスモ・エンテレケイヤ

- s i d e e n d -

- s i d e フェイト -

「お休み千草さん、いい夢を…」

僕の視線には、眠るようにこの世を去った千草さんの亡骸があった。正確には去ったではなく、送った。決して争いの無い永遠の幸福の世界…コスモ・エンテレケイヤ完全なる世界へ。でも、流石にこのまま彼女の亡骸を放置するつもりはない、せめて葬儀ぐらいは挙げないと僕でも目覚めは悪い…

彼女の亡骸を抱きかかえて、その場を去ろうとした時僕の後ろに彼の気配があった。背後から送られる視線には、怒りや戸惑いの気配はせずただ僕を見つめている視線だけ

「何か用かい？直人」

「呼び捨てか…千草をどうするつもりだ」

「別にただ、弔うだけさ…ここに放置は忍びないからね」

「……そうか、ところでフェイト？お前は何かだ？」

「……道具さ、神様の手足となって”世界を救う”ただその大義の為にいる神の使徒だよ」

「なるほど、あれの残党か、千草も運がない」

僕の説明に彼は納得した様子で頷き、同時に僕達の事も理解したようだった

「それでどうする？ここで雇い主の仇でも取るかい？」

僕は構わないけど…君は強いから楽しい戦いが出来ると思うからね

僕の軽い挑発に彼は特に殺気を生むでもその手に握る武器を構える訳もなく、先ほどと変わらずの口調で

「まあ…何だ。仇を取る気持ちが全くないわけでもないが…やめておく」

「どうして?」

「オレは基本は無用な戦いは避ける主義だ。それに、お前相手だと軽傷で済む気がしない」

「そう…残念だ。君はこれからどうする?もう追われる身だろ?」

「本山連中と交えるのも、悪くはない…:…:と言っわけないだろう。誰がやるか、そんな面倒な事」

なんだ、君なら十分に出来ると思うけど

「そう。まあ、短い付き合いだったけどお疲れ様」

僕がささやかに労いの言葉をかけると、彼も静かに答えた

「ああ、機会があればまた。今度は相手をしてもらおう」

「…期待してるよ。直人」

そして彼は僕の背後から忽然と姿を消した……思った。彼とはまた会うと……

- s i d e e n d -

- s i d e 和泉直人 -

フェイトと別れて数時間後、オレは京都都内の雑貨店の中にいた。フェイトの言う通りこれからは追われる身。それなりの準備をしないといけない……その為の買い貯めだ

さすがにこの中で戦闘を始めるほど本山も馬鹿ではないし、何よりここには大勢の一般人がいる。しかも一応オレは、宗家・青山の道場の元門下生。その強さが分からない連中でもない……が、もし来たらやりたくないが人質を取って逃げる事も考えている

そんな考えをしながらオレは買い物を終えて、とりあえずは京都を離れて実家に戻ろうと考えている。両親にはかれこれ五年ほど会っていない……勿論、それを懇情の別れにする気は毛頭無いが

さて、買い物も終わった。とりあえず実家に帰るか……

荷物を持ちながらお店を出ると、予想外の奴に出くわした

「直人先輩？」

「!？」

この声……この気配……まさか…

振り返り、そこにいたのはあいつだった。腰まで伸びた白い髪にあいつが好き好んで着ている振袖に手に持つ竹刀袋……間違いなかった

「久遠」

「はい、久遠です。先輩」

そう答えるとあいつは嬉しそうに笑顔でオレに近寄って来た。それに対して、オレはこいつに対してのいつも通りの素っ気ない態度で話しかける

「何だ。オレを捕まえに来たのか？」

「あつ、いえ、そんな滅相ありません。私程度が先輩ほどの手練れを捕えるなんて出来るわけじゃないじゃないですか」

よく言う。十一歳の時、門下生五人を病院送りにしたくせに…オレ

の半殺しより夕チが悪いだろ

「あつ、失礼な事考えてますね」

そう言いながら、オレの腕に体を抱きつけて来る。それによって久遠の歳の割には、かなりデカイ胸が当たる…あの忍者と銃使いといい、最近の中学生は発育が良すぎる気がする

まあ…その点、あいつは普通以下だったな

頭に浮かぶは妹の姿を浮かべながら、しみじみ思う。普通より少し上くらいが丁度いいと…それはさておき

「久遠、何のようだ。買い物があるんだったら、さっさと去れよ」

「酷い…それがかつての相部屋相手に言う言葉ですか!？」

知らねえよ。そんな事は……

こいつの性格は正直苦手だ。どちらかと言えば姉の性格のような寡黙でお淑やかな性格が好きだ。こいつの何処か猫を被って、愛想がいい性格は苦手というか嫌いだ

それにオレはこいつの先輩とはいえ、こいつの他に数人いた後輩達はそれなりにオレを避けて結果。他の奴らについて行ったのに対

して、こいつは何故かオレについて来る

「用ないなら、帰れ。しっしっ！」

「私は犬じゃありません！それに要件ならあります！先輩！道場に戻って下さい！」

「断る。第一オレは破門中の身だ。仮に破門が取消になっても、あのくそ爺が謝るまで断固としてオレは道場に戻らない。それに道場に戻らなくても、旅をして十分強くなれる事は分かったからな。今更、戻る必要は無い！！」

「そんな」

落ち込んでいる久遠はほっととき、オレが言ったくそ爺とは、青山の道場・最高師範の通称「杖翁^{つえおきな}」推定、九十歳を超える小柄な杖を付いた長い髭の爺だ。オレが最初のまだ道場入りたての頃に稽古してもらった…つまりは、オレの師匠で現・京都神鳴流最高の実力者

京都神鳴流内の位こそ宗家に劣るが、実力としては関西呪術協会の長にしてかつて神童と言われた近衛詠春を超えると目される

年齢的に考えて超えるのが当たり前だと思うが、近衛詠春は才能で爺を超えているからな。まったく才能ある奴は恐ろしい……と、これ以上爺の事なんて語る必要はないな

今は目の前にいる。この鬱陶しい後輩を撒かない事には、すんな

り京都を出られないし確実に本山の手が来る。だから……こいつを潰す事にした

密着しているこいつの頭を鷲掴み体を持ち上げて、アイアンクロ―を放った。掴まれたこいつの頭をかち割る気でやったが、存外に頑丈な頭蓋骨だった

「痛い！いたたた、痛いです！！頭碎けます!？」

「ちっ！思いの他、硬いな鳥頭」

ギチギチ……ミシミシ……ビッキ

「ほ、本当に割れちゃいますから」

「……本当に硬いな、頭皮の下に鉄板でも仕込んでいるのか？」

「仕込んでませんー!!」

久遠の頭の中から音が聞こえているのに割れない……仕方ない

オレは手を離すと、久遠は地面に尻餅を着きながら頭を押さえていた

「はあ……久遠。とりあえずお前はオレが姉の刹那を襲撃したの知
っているんだろ？」

「いたた…はい、知ってます。ですが、私には関係ありません。私としては全然、まったく刹那が傷つく事に特別な思いも感情もありません。先輩だって知っていますよね？私が刹那を恨んでいる事」

「知ってるよ。お前が自分で話したんだろ…こつちが聞く気もないのに勝手にな」

「はは…すみません」

笑いながら、小さく久遠は頭を下げるが、本気で謝罪する気は微塵も感じない…されても困るが…こいつを見てて思う。多分、こいつはオレを見つければ何処までもついて来る。それこそ本当に地の果てまでも

だとしたら…きつく突き放すよりは、傍に置いた方が楽か。多少、オレが我慢すればいいだけだし

「久遠。オレと来るか？」

「え！？あ、はい！どこへでも、どこまでもお供します！例え、火の中、水の中、草の中、森の中、スカートの中どこでも！！」

行かねえよ！スカートの中ってどんな変態だよ

盲目なのに、目を輝かせきつと子犬のようなつぶらな瞳でオレを見つめてるような久遠の気配に耐えられず、久遠を視界に外しなが

ら、とりあえず荷物袋を差し出して

「じゃあ、持て」

「はい！」

何で嬉しそうなんだよ。荷物持ちなのに

「先輩、まずはどうします？」

「ん？そんなの決まってる。とりあえず京都を出る」

そして、オレは荷物持ちの盲目の後輩を引き連れてとりあえず京都の外へ向かった

- s i d e e n d -

？ 戦いの後（後書き）

という訳で、月詠・千草両名には退場してもらいました。その理由は追々、説明するかもしれないのであしからず

？ 殺す覚悟・進む決意

- side 亜子 -

「はっ、くっ…へっ、へっくしゅー！」

「？、風邪ですか？」

「う、うん…きつと、誰かが噂してるだけやと思う」

多分、兄貴やる噂してるの

「そうですね。風邪はかかると治り難しいですから気をつけて下さい」

「うん、ありがとう。ネギ先生」

昨日の戦いから翌日の午前、旅行四日目。五日目は学園に帰るだけなので事実上の旅行最終日。昨日に引き続きの自由行動日、ウチはネギ先生達と共にこのかのお父さん詠春さんが、管理を預かっているネギ先生のお父さんの四階建ての展望台まである別荘を訪れていた。中は屋上まで吹き抜けで外から入る光でとても明るく開放感があつて、とても気持ち良かった

ネギ先生や図書館三人組（のどか・夕映・ハルナ）は玄関のほぼ正面にある三階ぐらいまである大きな本棚に興味を示していた

アスナとこのかそれにエヴァンジェリンさん茶々丸さんは各自で、部屋の物を触ったりして、朝倉はそんな皆を写真に収めていたりしていた

それとウチと一緒に来た。古菲、長瀬さん龍宮さんは戦いの後に朝のうちにホテルの方へ引き返して行った……そして、ウチは詠春さんが残ってほしいと言うので、一応残る事にした

戻ったら、ウチだけ怒られる事は無いやろか……それにまき絵達に掛けた催眠術まだ解いてへんし、心配や

「おい、和泉亜子」

「はい？」

上を向くと、エヴァンジェリンさんが二階から気だるいように落下防止用の柵に腕を乗せながら手招きをしながらウチを呼び

「ちょっと、三階まで来い。話がある」

「うん」

「ああ、他は来るなよ。うるさいし面倒だ」

その言い方、酷ない？

案の定、ハルナが噛みついたがどこ吹く風の馬耳東風。それはもう適当に聞き流されていた。そんなハルナを見ながらウチは階段を上がって三階に行くと、下に居なかった他の皆が三階でウチを待っていた。ウチが来るのを確認すると、詠春さんがお礼の言葉を告げた

「皆さん、今回の件に協力してもらい本当にありがとうございます。呪術協会の長として木乃香の父親としてお礼を申し上げます。本来なら長たる私が下の者を抑えられなかったのが原因で…」

「そんなお礼はいらんし、原因など貴様がいたらないただそれだけだろ。それよりもささつと情報を寄越せ」

エヴァンジェリンさん、一応聞いてあげよ……情報って何？

「ははは、手厳しい。まあ、情報と言うよりは手掛かりなんです
が…」

そついいながら詠春さんは、部屋の奥に行き数秒で戻りその手には丸めた少し古びた大きな紙をネギ先生に手渡した

「これは？」

「昔、ナギが調べていた物です。細かい事は調べてからと…」

中身見てるなら、教えてくれればええのに……何で言わへん？

渡された紙を見つめるネギ先生を余所にエヴァンジェリンさんが、兄貴たちのその後を詠春さんに聞いた

「彼女達の事ですか？彼：犬神小太郎君以外は、目下捜索中です」

「だろうな…仮にも神鳴流の剣士だ。協会の追跡のぐらいいは逃れて当然だな」

「ええ、恥ずかしながら。天ヶ崎千草の雇った月詠・和泉直人の両名は色々な意味でこちらにも名が通っていますから」

兄貴、有名なんか、そう見えないけど……

とりあえず、兄貴の事を聞こうと手を挙げて質問するとすんなり詠春さんは答えてくれた

「ええ、まず月詠はあの歳で既に宗家の【弍の太刀】を会得している才能に富んだ秀才です少々、性格に難がありますが…そして、亜子君の兄、直人君は神鳴流宗家の道場に通っていた非常に優秀な人物です」

「え、通っていた？じゃあ、今は通っていないんですか？」

「……昔に宗家の者を模擬戦とはいえ、あまり過剰なほどの攻撃で半殺しにして破門扱いになってからは、一度も訪れていないみたいです」

破門って……何してるんや、バカ兄貴

そんな酷い事をした兄が情けなく思うと失望しか湧かない……それが表情に出たのか、詠春さんが弁解した

「ですが、それも彼に理由があつての事です。ただ、その…確かにやり過ぎだった事は否定できませんが…」

「そうですね…それで兄貴は今どの辺に？」

「つい先ほどまでは、京都都内で雑貨などを買っているのは確認出来たらしいのですが、今しがた完全に行方を眩ましたそうですね…探すだけ無駄に終わると思います…」

「なんだ、随分と諦めているな。さつきは逃れて当然と言ったが、それなりに追跡に富んだ奴の一人や二人いるだろう？」

エヴァンジェリンさんの言葉に詠春さんは苦笑しながら

「はは…確かにいないわけではないのですが、直人君を捕まえるとなるとその者達だと、その役不足と言うか………」

「？、どういう意味だ？はっきり言え」

「捕まえるとなると、返り討ちに遭う可能性が高いんです。それに彼はどうやっているのか、遠距離からの追跡する者に対して呪詛返しのような攻撃法も持っていて目視による追跡しか出来ないんです」

「…情けない。大の大人がだかだか二十歳そこいらのガキに手出しができません」とは

「そう言わないで下さい。彼はあの筋肉ダルマも認める才覚の持ち主なんです」

あの筋肉ダルマ？誰？

筋肉ダルマと言う言葉にエヴァンジェリンさんは少し意外そうに眉を若干上げ、二人の会話を静かに聞いていたネギ先生達は疑問に首をかしげていた。気になってネギ先生が聞くと

「私達、^{アラルフラ}紅き翼のメンバーの一人ですよ。この…写真のこの剣を担いだ一番背後の大男です」

近くの机に乗せてある写真を手に取り写真の人物を指さしながら詠春さんは答え、それを聞いているエヴァンジェリンさんは不満そうだった

「名はジャック・ラカン。有名な通り名は【千の刃のラカン】【伝説の傭兵剣士】【つかあのおっさん剣が刺さんねーんだけどマジで！】などが有名です。仲間の私としては、あのバカの予測できない行動はついていけませんでしたが、実力と他者の力を見る眼力だけは認めます」

最後のは通り名やないやろ……それにバカなんか？

「その点は私も認めている。あの筋肉ダルマと賭け事をしてしまったせいで何度、酷い目に会った事か……その内、お礼をしてやらねば……ふふふ」

「ええ、ぜひあのバカを氷漬けにしてください。その時は協力しますよ」

二人から漏れる黒いオーラに怯えながらも、兄貴が凄い人に認められている事だけは分かった。そんな二人を見て、皇帝の事を知っているかもしれないので尋ねてみるとエヴァンジェリンさんは目に見えて嫌そうな顔をされた

「あいつの事など、聞くな馬鹿者。もう思い出すもの億劫だ」

「まあまあ、エヴァンジェリン……そう言えばあなたが、現在の七つの魔焰の担い手なんでしたね。でしたら女帝と呼んだ方がいいですか？」

「へ？女帝？」

「おや？先代の皇帝エンペラーから聞いていないのですか？」

「特には……ただ、七つの魔焰を使うなら覚悟が必要だっくらいで……女帝エンプレスとかは、なんも」

「そうですか……彼もまた随分と何も言わないで……私が言うべきでは無い事ですが、あなたにそれを渡しました先代の皇帝は……恐

らく、もうこの世にいません」

「え？……いない？」

突然の事に、ウチは驚きと呆然と立ち尽くすしかなかった……でもやっぱり死んでしまったんか…何となくそんな気してたんやけど、実際に言われると辛いなあ

「そうなんですか……もし、会えたら助けてくれたお礼を言おう思っただんですか……死んでしまっただら言えへんですね」

「理由は何だ？近衛詠春。曲りなりにもナギや私と互角以上の実力を持つ奴だぞ？」

「七つの魔焰セラン・ブレイズを持てるのはこの世界に一人だけ。その時代の持ち主は、次の世代に七つの魔焰継承してこの世を去るのが決まりだと先代の皇帝エンペラーから直接ナギが聞いたそうです。ですから、あなたを助けた彼はもうこの世には……」

「……なるほど、そういう事も考えられるか……」

「何がそういうなのよ。エヴァちゃん？」

一人だけ何かに納得しているエヴァンジェリンさんにいつの間にかちゃん付けで呼んでいるアスナ

「私をちゃん付けするな。年上だぞまったく…お前は」

「いいじゃない別に、で？何がそういう事なの？」

「七つの魔焰セブン・ブレイズなどという、人外極まりない能力を私に奴に出会うまでの数百年一度も聞き覚えがないのを疑問に思っていた。単一の属性を七種類に分割し七つの能力をそれぞれ付け、さらにそれぞれに悪魔の名を冠する人格まで持たせるなど魔法理論的に不可能だ。そんな力・技術があれば各国の魔法研究者が血眼になって探しているはずだからな。だが、実際は奴が公に現れる二百年ほど前まで単語の一つさえ出てこなかった」

「それがなんだって言うのよ？別にその継承して来た人達がずっと隠して来ただけじゃないの？」

「あほ。今ある全ての存在には、始まりがある。お前が普段から使っている携帯電話だって、始まりはモールス信号でそれが発展して今の形になったんだぞ」

「へーそうなんだ。さすが、エヴァちゃん物知り」

エライエライとエヴァンジェリンさんの頭をなでなでするアスナ、それが嫌だったのかエヴァンジェリンさんはアスナを、いともたやすいくほおり投げた

やっぱり、魔力使うと体格差あってもあんなに簡単にほおり投げれるんやな

「話がそれた。とにかく、七つの魔焰セブン・ブレイズの能力は魔法という名の常識、その枠の外側の能力だ。それに和泉亜子の七つの魔焰セブン・ブレイズはそれぞれに読心と固有能力さらに対価を払う事による【真名の焰】という

三つの能力まである。これは進化だ。この事から私が導く答えは一つ。七つの魔焰セブン・ブレイズは継承する事、代を重ねる事に強くなり続ける能力があり、その能力に必要なのが一つ前の継承した…後継者の命だ。故に七つの魔焰セブン・ブレイズを持てるのは、ただ一人だけなのが理由だ」

「なるほど、確かにそれなら担い手が一人だけなのも分かります。【進化する魔法】…七つの魔焰セブン・ブレイズも元々は進化する魔法を付加された炎の魔法だった。それが時代と共に継承され続け、その内に人の背負う七つの大罪を持つ七つの焰に分かれ、力を持ち人格を持った。そして、その進化に必要なのが後継者の命と？」

「そう私は結論する。だが、そうすると別の疑問が生まれる…それは」

エヴァンジェリンさんの言葉の続きを一緒に考えていたのかネギ先生が答えた

「どうして、そんな魔法が生まれたのか？存在理由…始まりは何なのか？…ですか？エヴァンジェリンさん？」

「その通りだ。はっきり言って、この魔法はまるで今は倒せずとも時間をかけてでも確実に何かを必ず殺す為に生まれた魔法…そう私には感じられる」

「そ、その何かって何よ」

「知るか。だが…少なくとも、まだ七つの魔焰セブン・ブレイズの存在意義は消えていない。つまり、まだその何かはこの世界にあり続けているのは確実だ。つまり、和泉亜子。お前には義務が生じる」

「義務？」

「そうだ。七つの魔焰セブン・ブレイズを使いその何かを殺す義務が……もし殺せずとも、その命を捧げて次なる世代に繋ぐという二つの義務がな」

「そ、そんな事急に言われても……ウチ」

突然の事に動揺するウチに対して、エヴァンジェリンさんは遠慮も容赦も加減も微塵もなく言い続ける

「そうしなければ、お前を助けた皇帝の行為は無駄に終わり、そしてそれは恐らく膨大な年月をかけて繋いできた後継達の命を全て無駄にする事と同意義と思え。それともお前はそんなのは知らないと、吐き捨てるか？」

「そんな、捨てるなんて事……」

「なら、決める。繋いできた願いに応える為叶える為に殺す覚悟を。誰かを傷つけ悲しませ、それでも前に進む決意を。そして繋いできた願いに応える事が出来ず、次に託す事しか出来ない事の後悔と悔しさ苦しさを」

「……………」

エヴァンジェリンさんの言葉に答える事が、出来なかった。エヴァンジェリンさんの言う通り、ウチがここで「捨てる」と言えばそれは命を懸けて助けてくれた皇帝に対する侮辱する発言で、そして

同時に繋いできた後継者達の願いを捨てる事

でも……「継ぐ」と言えば、それは生きているかもしれない命を殺す事を決めた事で、その途中で誰かを傷つけてもどこまでも、願いの為に進み続けたいといけ……もし、ウチが願いを達成できなくてもウチの命で誰かに託さないといけなくて……どうしたらいいんや。あんな辛い思いを、誰かに受けてほしくない継いでほしくない。でも、皇帝の命を無駄にたくない……でも、誰かを殺したくない

出口のない迷路に迷い込んでしまったウチの考えを表情から察したのか、エヴァンジェリンさんは軽いため息を吐き

「はあ……まあ、いい。ろくに裏の世界の事を知らんお前に、急に決めるなどと言うのは少々酷だったな。時間をやるしっかり考える」

「うん……」

「だが、忘れるな。このまま魔法の事に関わり続けるなら、どちらにせよ、覚悟も決意も力ある者には必要不可欠だ。そこは良く覚えておけ……行くぞ茶々丸。せつかく学園外に出られたのだ。久しぶりの京都を満喫しに行くぞ」

「了解です。マスター」

そして、エヴァンジェリンさんは茶々丸さんを連れて階段を降りて

行った……

誰か殺す覚悟：ウチにそれは持てるのかな……：兄ちゃん

- s i d e e n d -

- s i d e 木乃香 -

覚悟も決意も必要不可欠……か

エヴァちゃんが亜子に言った言葉は、ウチの心に深く届いた。ウチも力あるから、持っているから……その力に対する覚悟がないから、ウチはくーちゃんを救おう思っても結果。逆に傷つける事になった。傷つけた力をちゃんと使えるように努力する決意をしないで、お父様に泣きついたから、お父様はウチからくーちゃんの事も魔法の事も封じた

それでくーちゃんと再会しても、くーちゃんはウチの事を嫌いにならなはったんは当たり前や、だって……ウチは約束したんやから、眼を治すってそれなのに、それなのにウチはすっかり忘れて……最低や

自分の当時の意思の弱さに失望しながらも、せめてそれくらいは記憶を封印されてもうる覚えでも残ってほしかった……と切に思う

でも、くーちゃんはウチに償う時間をくれた……。それでもくーちゃんは許さんかもしれん。でも、ええ……。せめて、せめて、今ウチの近くの人達を助けられれば……

単なる自己満足……。そう言われればそれまで……。それでも、許されるなら、償えるなら……。そう思う事も全部、自己満足。それも分かっている

「木乃香、どうしました？」

「お父様……？」

気が付くと、三階にはウチとお父様の二人だけになっており他の皆は下の階に移動しているようだった。そして、ウチを見つめるお父様の表情はいつもの優しい表情から真剣な眼差しと少しだけ強張った表情だった

「木乃香、このまま魔法の世界に関わり続ける気ですか？」

「……うん、せつちゃんとくーちゃんのいる場所にウチもいたい。だってそれしか償えん気するから……」

「木乃香、そこまで自分を責めなくても」

「だって……約束したんよ。眼を治すって……でも、このままやったら約束を果たせへん」

「その為に力を求めるのですか…木乃香、私は力を求め破滅していった者を何人も見てきました。そして、その者達を仲間と共に打ち倒して来ました。今の木乃香はその者達と同じ道を進もうとしている…そういう風に私には見えるのです」

お父様の表情はどこか暗い影が落ちていた。それでもウチは

「大丈夫、お父様。ウチには皆がおるし、もし道を間違ってもせつちゃんがきつと、ウチの目を覚ましてくれると信じてる。だから、お父様…お願いがあるんや」

「………何ですか？」

「せつちゃんを今のウチで出来る限り治したい…だから、力を貸して」

「木乃香、それは、また久遠君のように癒えぬ傷を彼女につけるかもしれないのですよ？」

「でも…いつまでも怯えて恐れて、自分の力を使えんとずっとこのままやから…エヴァちゃんが言うてた。力ある者は、覚悟も決意も必要つて…だから、ウチはこの生まれ持った力を決意を持って使いたい。そして、もし…傷つける事になってもそれでも前に進む覚悟を持ちたい。自分勝手も分かってるでも…それでも…ウチは………」

- s i d e e n d -

？ 治療と百合疑惑（前書き）

これにて京都編終了！

次話は原作七巻の話飛ばして、その間に過去編みたいな話を三・四話入れる予定その後、ヘルマン編をするつもりです。予定なのでしないかもしれませんがご了承下さい。それではどうぞ

？ 治療と百合疑惑

- side - 刹那 -

お嬢様は、無事に旅行を楽しんでいるだろうか……今日で旅行の四日目……

病院のベットの上から、遙か先にある流れる白い雲眺めながら、守るべき人を思いながら、私は何処かうわの空だった

今のする事も出来る事もなく、ただ窓の向こうを眺める……こんな事は私の人生の中で、一度もなかった。これまでは、お嬢様の為を守る為に一心不乱に剣技を磨き高め、また磨いては高める……ただ、それだけの繰り返しだけの人生だった

いや……違う、お嬢様よりも私は傷つけてしまった久遠の……妹の為に歩んできたんだ。傷つけて妹から光を未来を消してしまった。そんな自分が許せなくて情けなくて少しでも、ほんのわずかでも、妹に許してほしくて慰めてほしくて……ただその二つだけに私は

でも、それはきつと無駄だった……私には己の身を守る事さえ出来なかった。ただ一度の油断、ただ一度の隙……ただ一度で私は戦えなくなかった

私の眼に映る包帯とギプスが巻かれた手足……それはまるで、分厚

く決して解けることのない、雁字搦めの鋼鉄の鎖のように見えた。もう戦えないと訴えているようにも見えた

いや、そんな事を考えるな…怪我が治れば、またお嬢様を守る日々が始まる。こんなくだらない事を考える暇があれば、少しでも今出来る事をすべきだ

そして私は、今出来る。氣の鍛錬をする事にした。もつと密度を高め極め完成させ、より高い領域へと……そう、思いながら願いながら鍛錬を始めて数十分が経って少し体から汗がにじみ始めた頃、ドアをノックする音が聞こえた

定期的にある検温の時間にはまだ早い。それとも面会時間にはまだ一時間以上先と思いつつも、私は返事をした。するとドアの向こうからよく知っている顔が二人姿を現した

「長、お嬢様!？」

「せつちゃん、お見舞いに来たえ」

笑顔を浮かべながら、お嬢様は私のベットの隣に座り私の手握った。長はお嬢様のそっと寄り添うように立っていた

温かい…

ほんの二日、いや一日、お嬢様の姿を声を笑顔を見ないだけで、それだけで私はお嬢様の持つ暖かさを優しさを忘れていた

「お嬢様、長。今日はどういった御用で？ご覧の通り、私は…」

「今日来たのは刹那君、君のその怪我を治す為に来たんです」

「え、いや、しかし長。私の怪我は天ヶ崎千草の呪符の力で、魔法や護符の治癒効果は効かない身になって……」

「確かに…ですが、何事にも限度という物があり限界があります。その呪符の力が打消し処理し切れないほどの治癒の魔力を一度に大量に流し込まれば、呪符の処理容量は壊れ、その効力を失う事でしょう」

「確かにそうかもしれませんが……あ、長。まさかお嬢様の力を」

「これは木乃香が決めた事です。私はあくまでサポートをするだけですよ」

長の言葉に私はお嬢様の顔を見た。その顔は私を治す事に覚悟を決めた決意の表情……そして、それはお嬢様と出会い初めて見た真剣だった

「せつちゃん…ウチを信じてくれる？」

その言葉と裏腹に、私を握る手はほんのわずかに震えていた。それはきつと、久遠の時のように、癒せても治しても消えない傷を残すかもしれない。そんな恐れから来るものだ……私は思った。ここで応えなければ私は進めないお嬢様も進めない

私は応える為に、手を握り返して答えた

「はい、この桜咲刹那。お嬢様を信じ疑わずに守る事を誓いました。最初は久遠に対する償いの気持ちで護衛を引き受けました。それでも、お嬢様を見て見守る内に決して、償いの気持ちではなく、心からあなたを守りたいと本心から思い始めてました。ですから、お嬢様。どうか恐れずに私に力をお使い下さい。私はあなたを信じます。必ず成功すると……」

これが私に言えるお嬢様への精一杯の励ましの言葉、口下手な私の心の本音……お嬢様は目に薄ら涙を浮かべながら頷いてくれた

「せっちゃん……うん、ウチがんばる」

「はい」

「木乃香、準備は出来ましたよ」

いつの間にか、長はベットを円で囲うように等間隔に護符を配置していた

「木乃香、思いつきり全力でやりなさい。呪符の力で膨大な魔力は丁度いい具合に削られ、その残りの魔力でも十分に刹那君を癒す事が出来るでしょう。もしも場合も、護符が手助けしてくれるでしょう」

「うん、お父様」

そして、お嬢様は両手で私の手をしっかりと握りながら目を閉じる……それと同時にお嬢様の体から魔力が溢れてきた。それは、大河を流れる清流のようにとても澄んで清らかでそれでいて、母なる海に抱かれるような安心感と心地よさを兼ね備えていた

それに反応するように私の体から天ヶ崎千草の呪符の力が湧き出し、お嬢様の魔力と触れた瞬間に打ち消していく、それは私の考える以上の速さと勢いを兼ね備え天ヶ崎千草の陰陽師としての力量の高さを物語っていた。だが、それをもつてもお嬢様の魔力の放出力はそれを凌ぎ、徐々に押していく……

私は改めてお嬢様の底なしと呼べる魔力の多さに驚き、そしてこの魔力があればどんな事でも成し遂げられると思ってお嬢様を狙う者が後を絶たないのも頷けた。そして同時にいかなる者の手にも、この力を渡せない。この力はお嬢様のみ使う事を許された唯一無二の清らかな力だと改めて思う……そして、それを守る事を、お嬢様を私の剣で守れる事を誇りに思えた

魔力の放出が始まって、数分が経ち呪符の力は目に見えて弱くなりもう少してお嬢様の力が打ち勝つ寸前まで来ていた

「木乃香、もうすぐです」

「お嬢様、頑張ってください」

励ましに答えるようにお嬢様はさらに魔力の放出をする。正直、少し怖いほどに大量の魔力とその魔力に触れたら私が浄化されるのではないか、そう思えるほどに穢れを知らない淀みの無さすぎる清らかな魔力

そしてその瞬間、呪符の力は完全にお嬢様の魔力に負け微塵も残さずに霧散した。それはこれから、治癒が始まるという事そう思うと私はある事を思い出した

……
ん…完全治癒の場合、骨折・裂傷などの損傷・破損箇所を傷の周辺の骨や肉を異常成長させて塞ぎ治す力だったような…確か、それは無理やりの部分があつて……凄く痛いと言ったことがあるような

……
「お、長……」

「どうしました刹那君、もうすぐ治癒が始まりますよ？」

「確認したいのですが、完全治癒は猛烈な痛みが伴うと聞いた覚えが……」

「ええ、そうですよ。傷周辺の筋肉や骨を傷口に引き寄せて治癒

させるので、引き寄せる際に神経なども引つ張るので、それはもう痛いですよ。でも刹那君の傷は骨折の類なのでそれほど痛くはないでしょう……精々傷口を刃物で抉られる程度の痛みでしょう」

え、抉られる……長、それは程度で済むレベルではないと思います
……うっ

長との問答をしている間に、治癒が始まったのか一瞬怪我の箇所
に鋭い痛みが走った……私は悟った、次の瞬間に私はきつと味わった事のない痛みを味わうとそして、それは治癒を得られる為の代償
であると……痛みなくして得られる物はない。そんなセリフを言った
漫画を唐突に思い出していた

そして、その後私は襲い掛かる痛みに人生で初めて絶叫というものをした。それはもう良く病院中に響き渡り、入院している患者さん達を驚かせ迷惑をかけてしまった……そして私は常々思った……
怪我をしないように気をつけよう

- side end -

side 夕映 -

さて、どう切り出した良いでしょうか……

昨日の夜の信じられない一夜から、すでに半日が経ち四日目の正

午過ぎ。私は四班の部屋で売店の自動販売機で売っていた【ホット抹茶ミックスカフェオレ】を少しずつ飲みながら、昨日の説明を誰にしてもらうか思案していた

単純に考えれば、ここはネギ先生なのですが生憎とエヴァンジェリンさんに連れられ京都を観光中ではありません。アスナさんも同じく…このかさんは、桜咲さんのお見舞いで病院に行ってしまったですし…現在、ホテルにいるのは、和泉さん、楓さん、龍宮さん、くーふえさんの四名…あ、朝倉さんもいたですね。この五名の中から誰に聞いたらすんなりと教えてくれるでしょうか…和泉さんはエヴァンジェリンさんに呼ばれた後から、何か酷く悩んでいるようですし、龍宮さんは寡黙ではぐらかすような気がするです。朝倉さんはタダで教えるとは思えません…と、なると。やはり、ここは我らバカレンジャーのイエローとブルーに聞くのが一番無難です

そうと決まれば善は急げ。ホテルの中を探し回ること約五分ほどで、くーふえさんと楓さんの二人がロビーで何やら談笑しているのを見つけ、いつも通りに話しかけてみた

「くーふえさん、楓さん」

「ん？これは夕映殿。何用でござる？」

「どうしたネ？夕映？」

「はいです。昨日のこのかさんの実家で起きたことについてお尋ねしたのですが……」

「「え!?!」」

私の言葉に二人は声を揃え分かりやすく明らかに動揺した声を出したが、いつも冷静な楓さんは、すぐに心を静めた。ただがくーふえさんは明らかに動揺を続け目が泳いでいた

「昨日の事でござるか〜う〜ん。拙者達も詳しい事は知らないでござる。そつでござるな古?」

「そ、そうアルネ楓。わ、私にもさぱり分らないヨ」

やはり何か知っているみたいですね……ならば、この手を使つです

そして私は普通の人ならず、通じないであろう手段でくーふえさんの純粋な心に訴えかける戦法を取つた

「……本当ですか。くーふえさん。その言葉が嘘をだつたら私はとても傷つくです……それとも、私のようなアスナさんやまき絵さんのような運動能力の無いおでこが広いだけのバカには教えられないと、それとも学園四天王と言われるお二方とは住む世界が違うから教えないと言つのですね……ううう」

「な、なつ!?!そんな事は言つてないヨ。バカブラック!?!」

「では、教えてくれるのですか?」

「えっ、むむむ…それは……」

「それは？」

もう少しでクーふえさんを落とせると確信した私はクーふえさんに迫り寄る。その横の楓さんは気持ち諦めているように見えた

もう少し、もう少しで……ん？

「これは何ですか？」

「あっ」

私はクーふえさんの服のポケットから、何か角ばった薄い物が飛び出ているのを見つけ、思わずクーふえさんから取ってしまった、そしてその正体に驚愕と驚嘆を同時にした。それは一昨日の夜、朝倉さん主催で行われたネギ先生の唇争奪キスゲームで、親友のどかが優勝賞品で手に入れたカードと絵が違う以外まったく同じものであった

「こ、これは…どうしてクーふえさんがのどかと同じ優勝賞品を持っているんですか!？」

「あっいや、これは…しの……」

「まさか…くーふえさん、あの後ネギ先生と……」

「ち、違うネ!?こ、これはネギ坊主ではなくアスナとの……」

「アスナさん!?く、くーふえさんまさかあなた……」

まさかくーふえさんとアスナさんが百合の関係とは…ハルナや朝倉さんがよだれを垂らしながら飛びつきそうなネタを

純粹で単純でバカなくーふえさんとアスナさんの意外過ぎる秘密の関係を知り、これからどうやって接していけば分からないと、頭を抱え悩んでいる私に必死に弁解しようとするくーふえさんとさて、どうするかと口に手を当て悩んでいる楓さん

そして、くーふえさんは私の肩を掴みそれはもう震度5くらいにとても激しく私を揺らしながら顔を真っ赤にして弁解しようとする

「違うアル!間違がうてるヨ!夕映の考えているような不適切な関係では断じて決して違うアル!!」

「しっ…しかし、それは…キスをしないと……」

揺らすのやめて下さいです

「確かにアスナとキ…キスはしたアル。でも、それはアスナとノーカウントにすると決めた上での事ヨ!!だからキスはしたが、していないアル!!」

意味が分かりません……そしてそろそろ、気持ち悪くなるです

とりあえず、私は肩を掴むくーふえさんを引き剥がして、くーふえさんが落ち着くまで待った……さすがにカードの事でまた興奮されても困るので、その間に楓さんに昨日の夜の事を聞くことにした。楓さんは槍を持った男性と戦っていたので

「楓さん、昨日の怪我は大丈夫ですか？」

「心配ご無用。箇所こそ多いでござるが、傷は極浅いゆえ心配せずとも大丈夫でござるよ。ニンニン」

「そうですか。しかし、四天王の楓さんや龍宮さん相手にあの槍の人は圧倒していたです」

「確かに、あの者と拙者達とは格が違いすぎるでござったから…随分と手心を加えてもらったでござる」

「手心……手加減していたですか！あれで!?!」

「うむ、間違いなく。あの者の実力ならば、拙者達を十秒もあれば確実に殺せただはござるから。恐らく拙者達が亜子殿の級友だからこそ、生き延びたというもの」

「え、和泉さん？」

「うむ、あの者は亜子殿の兄上の直人殿というそつでござるよ。いやいや、真の強者というものは真、底が知れず見えずの者ばかりでござるよ……」

そう言いながら楓さんは、そそくさとまだ顔が赤いくーふえさんを連れて逃げてしまった。咄嗟に追う事を考えたが足の速い楓さんに追いつくのは、さすがに私には無理なので諦めるしかなかった

「二人は諦めるしかないですね。となると残るは……」

「やつほー。綾瀬、何してるの？」

後ろを振り向くと、そこにはカメラを持った朝倉さんが笑顔で近づいてきた

朝倉さんですか……タダで教えてくれるでしょうか……

「朝倉さんそこ何をしてるです？」

「私？私はクラス皆の写真撮ってるの。明日は帰るだけだし記念にね」

そう言いながら、私の写真を数枚連続で撮る朝倉さん

ダメもとで聞いてみますか……

「朝倉さん、実は昨日の件についてお聞きしたいのですが？」

「あゝ聞きたい？聞きたい？うん、どうしようかな」

案の定、もったいぶってきたので、あまり気は進まないがつい今しがた、手に入れた情報を提示しようと思った

すみません、くーふえさん。あなたは必要な犠牲なのです

そして、私はアスナさんとくーふえさんがキスをしたこと。ともしかすると両者が百合関係なのではと、推論を付け加えて朝倉さんに教えると、案の定メモをしながら聞き入り、その情報の報酬として私は昨日の夜の真実を知った。それは予想を超えた真実だった

まさかおとぎ話の魔法使いが実在して、しかもそれがネギ先生とは

……

- s i d e e n d -

青髪と赤毛 〱十年前〱（前書き）

過去編をやることに決めました。
時系列はバラバラに投稿します

青髪と赤毛　　十年前

沸き立つ土煙、轟く雷鳴、吹き上がる黒炎、ひっくり返る大地、空気震わす空、燃える森林……背の高い木々が生い茂げる大地、緑あふれるその地を木端微塵に粉碎し蹂躪するが如く爆発と轟音。その中を雷と焰が縦横無尽に大地を駆け破壊粉碎していく、その力に一切の躊躇いなどなく、ただ破壊の力を示さんが如くに蹂躪を続ける。その地に住む命など瞬きする間など無いほど、刹那の速さで命を散らしていくだろう……

そんな命が刹那に消えていく場所で、二人の人間が大暴れしていると知れば大層驚く事だろう……その二人こそ、諸悪の根源

一人は二十代前半の見た目にも悪そうな人相の赤毛の青年、その手に柄の部分を抱帯で巻かれた木の杖を携え、もう一方の手には小さな手帳が握りながら、その青年は叫んだ。破壊される大地の中に響き渡る声で、盛大に力強く

「来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹けよ南洋の嵐！」

そして、もう一人の人間。こちら二十代前半のいかにも偉そうな口ぶりをしそうな、青い髪に青い瞳、体には銀の髑髏のネックレスを付け似合わない赤いマントを羽織る青年。赤毛の青年に答えるようにこちらにも空に響く渡る声で叫ぶ

「来たれ炎精、風の精。炎を纏いて吹き荒れる北欧の厄災!!!」

赤毛の青年の杖の先端には、風が集まり始めその中を雷の球体が電気を送りながら解放される瞬間を待ち望んでいるように見え、青髪の青年の手には触れればすぐさま燃えるような高温の炎の球体を作られその周りを風が吹きすさぶ

二人は互いを睨むと同時に集まった力を相手に向けて解放した

「雷の暴風!!!!」

「炎の旋風!!!!」

放たれた風を纏う雷の砲撃と同じく風を纏う炎の砲撃はぶつかりあい、ほんの僅かな均衡を保ったうちに、大爆発を起こし空にきのこ雲を浮かべた。爆心地の土は爆風によって空へ打ち上げられ、霧雨の雨のようにぼつぽつと降り注ぐ……だが、二人には露ほども関係なく降り注ぐ、土の雨を直進しながら互いの敵に向かって行く

そして、互いに申し合わせたように大岩を豆腐のように簡単に粉碎する拳を同時に放ち、互いの頬に打ち込む。打ち込んだ衝撃で、二人は大きく後退するもすぐに地に足を杭のように打ち込みブレーキをかけてながら止まるといなや、再び殴り合いを開始した

赤毛の青年の手には雷が帯、青髪の青年には炎が宿り、ボディーを打たれれば同じくボディーを打ち返し、顎を打たれれば顎を、頬なら頬を……それを何百回ほど繰り返したのちに、互いの頬や体は

痣だらけになりようやく離れるやいなや、再び二人は
叫んだ

「契約により我に従え、高殿の王！！来たれ巨神を滅ぼす。燃ゆる立つ雷霆！―百重千重と重なりて走れよ稲妻！！」

「契約に従い我に従え、炎の霸王！！来れ浄化の炎！燃え盛る大剣、ほとばしれよ。ソドムを焼きし火と硫黄！ 罪ありし者を死の塵に！！」

赤毛の青年の手の上には触れれば肉を焦がし焼くほどの高圧の電流を帯びた球体が作られ、それは徐々に巨大化してき青年の大きさの数倍まで膨れ上がる

対して、青髪の青年の両手には先ほどとは段違いの高温を秘めた炎が纏わり徐々にその炎の色を変えていき、ひとたび放たれればそれこそ一瞬で人など炭に灰に出来る熱量を秘めている

そんな膨大な力を秘めた雷と炎を互いにぶつけようというつもりなのだから、この大地の草花や命は死に絶えるだろう……しかし、そんな事は二人には関係ない。ただ目の前のむかつく野郎をぶちのめす……それだけに頭と体はフル回転・全稼働しているのだ

キラキブル・アストラペー
「千の雷！！！！」

ウーラニア・フロゴシース
「燃える天空！！！！」

そして二人は二つのとんでもない大破壊能力を秘めた力を渾身一滴の力で放つ……千に匹敵する轟音の雷達は、鼓膜が破けるような雷鳴と共に空から降り注ぎ、大地を砕きながら木々を粉碎しながら、標的である青髪の青年に襲い掛かる

空をも焦がす炎は、音を置き去りにしながら大地を溶かし溶岩に変えながら行く手を阻む、木々や岩を瞬時に溶解し消滅させながら、赤毛を灰にするが為に襲い掛かる

そして最早数えるのも、馬鹿馬鹿しい回数を重ねたひっくり返された大地は二か所同時にひっくり返えされる……この二人の戦いはすでに開始から十時間近くが経過している。それなのに二人は疲れこそ見せるが、戦いを止める様子は微塵もなく自然破壊を続けている

だが、二人とも不死身ではない。今の一撃は互いに響いたようで赤毛の青年は杖を支えに、立ち上がるうとするが体を所々焼かれた痛みの為か立てず、青髪は雷で体が痺れているのか、両手両膝を着いて立ち上がるうとしない

「くそ野郎が……」

「黙れ鳥頭…燃やすぞ」

互いに口では罵倒し合い強がるが、他人の眼にもはつきりと分かるほど疲弊している。だが、それは互いに誇りが許さないのか、意地でも立ち上がるうとする二人

「てめえ……おい、エンペラー皇帝。何で七つの魔焰を使わねえ、手え抜いてるんじゃないあねえ……」

「あん？つるせー鳥頭。てめえ如き……相手に俺様の本気を出す訳ねえだろ」

「ああん？この俺の力を舐めんじゃあねえ……すぐに立ち上がって、その面ぶん殴ってやるよ……」

「おもしれえくな。なら俺様はてめえの心臓くり貫いて、あの女の前に晒してやる」

そう言いながら、二人は立ち上がろうとするが立ち上がれず逆に地面に倒れてしまった

「痛っ……エンペラー皇帝てめえのせいで全身が痛えじゃねえか……」

「はっ！ざまあ見やがれ……俺様を舐めるからそんな目に遭うんだよ……痛っ」

最早、互いに強がりだけを支えにしているのか。顔以外動く様子はない

「ちくしょう……今回は引き分けにしてやるよ。エンペラー皇帝」

「ほざくなナギ。どう見ても俺様の勝ちだろうが……が、こんな薄汚れた状態で勝ちを誇っても何も嬉しくねえ、だから今回だけは特別に引き分けにしといてやるよ」

「へっ！口の減らない野郎だ。いいさ、またてめえと勝負すれば」

「……機会があれば、相手にしてやる。今度は俺様の完全勝利だろうがな」

その時、微かだが女性の声が森に木霊するのが聞こえた

「おい、迎えが来たぞ」

「ああ……そうみたいだな。おい、エンペラー皇帝」

「あん？」

「お前は何で戦うんだよ？」

「……さあ、な。クソむかつく神様がいるからか、それともお前みたいな分をわきまえない不埒者がいるからじゃねえ……かな」

「……」

その言葉に対して赤毛……ナギは何も答えず、そうしている間に仲間が来て傷だらけのナギに「バカ」だの「愚か者」など罵倒を浴びせた後に細見で長身の男が背負って立ち去って行った……その前に

金髪の女がビンタで気絶させたが……

一人残された青髪…エンペラー皇帝は仰向けになりながらつぶやいた。誰もいない、雲で覆われた曇り空に向かって

「悪いナギ。てめえと殺り合うは機会ももうねえよ」

思い浮かべるは自身が託した次なる世代の少女、そして今度こそあのクソ野郎を殺せるように願いながら、エンペラー皇帝は静かに目を瞑った

荒れた地の少女 〱 2XXXX年前 〱 (前書き)

三回連続投稿

荒れた地の少女　〜2XXX年前〜

そこは荒涼とした大地の上だった。荒れ果て乾いた大地に生える細々とした暗い色の木々はわずかな葉を付けてはいるが、風が吹けば抗う術もなく飛ばされる事は目に見えていた。そんな細々とした木々が荒れた大地に無数に生えていた

その大地をぎゅつと踏みしめながら一步一步進んで行く、人影が一つ。小柄な体格に痩せた体、歳は十に満たないかもしれない少女だった

少女の眼は暗くこの世の悪を垣間見てそして絶望しているような、死んだ眼をしていた……彼女に行くあても目標も目的もない、虚無。空っぽ

そんな少女が、乾いた大地を歩いていると知ったらきつと善良な人間は助けに来るだろう……しかし、彼女の周りには誰もいない、誰も来ない、誰も知らない

少女が歩くのは同じ所にいたくないからか、それとも何かから逃げる為なのかは分からない。でも、彼女は歩く、踏みしめ、進むを繰り返す

その内に空は青から黒に変わり、空には丸い光る球体が浮いている。少女はその時、初めて上を向いた空を眺めた。されど少女の瞳に光は無く、鏡のように瞳に映るは空に浮かぶ光る球体

ほんの数秒で少女は空を見るのをやめ、前を向き歩き出した。広

がるはどこまでも続く、色を変えた荒涼の乾いた大地

普通なら挫折し挫けその場で座り込むかもしれないほどの終わらない大地。それでも少女は歩き続ける……空っぽで虚無で心に何もなくても

そんな少女にも名はあった。偉大なる母からもらった人としての名。使う機会がないかもしれない、もしかするとあるかもしれない、誰かに呼ばれるかもしれない……かもしれないで付けられた母からの唯一の贈り物

少女の名前はアマテル……天に輝く意味を持つ。されど少女の心に光なく輝やくことはない……空っぽだから虚無だから

雪の日　〜十一年前〜（前書き）

四連続投稿なので短いです
次で追懐記？は終わりです

雪の日　〜十一年前〜

世界を染めるは一面の銀世界。空からは白い雪がゆつくりと降り注ぎ世界をさらに白に染めようと必死に降り注ぐ、雪が降り始めておよそ十五時間ほど世界全体を染めるには余りにも短い時間、それでも雪は降り続ける少しでも早く少しでも広く世界を自分の色に染め上げる為に……

その雪の中を三人の少女が仲良く手を繋ぎながら歩いている。両手に毛糸の手袋を付けて、耳に耳当て、首にはマフラー体は幾重にも服を重ねて風邪をひかないように

歌を歌いながら、三人は雪道を歩く、左端の雪のような白い髪の少女は手に枝を持ちながら指揮者のように枝を振るいながら、真ん中の艶のある黒い髪の少女は両端の少女達の手を握りながら満面の笑みを浮かべながら、右端の綺麗な黒い髪を片側に束ねた少女は恥ずかしいのか、頬を赤めながら少し小声で歌う

三人の歌を妨げる物はいない、少女達だけの世界……その中を少女達は寒さなど忘れるくらいの陽気さと楽しさを持って進んでいく

左端の少女は言った「明日も積もるかな？」空を眺めながら二人に話しかけ、真ん中の少女は「うん！きつと積もる！」と笑顔で答え、右端の少女は「じゃあ、雪だるま作る……」と明日の予定を考える、それに声を揃えて答える左端の少女と真ん中の少女

そして三人はまた歌い始める。明日を待ち望みながら、明日の雪だるま作りを楽しみながら、少女達は歌いながら歩き続ける

……
三人どこまでも一緒と手を繋ぎ互いに信じながら歩き続ける……

操者の意思の思い 〽1XXXXXX年前〽 (前書き)

次より2章に入ります

操者の意思の思い　　1XXXXXX年前

余の名は操作機関、三つからなる機構マキナの最上位に座する機械仕掛けの存在：余は元々他の二つの機関、消去機関・製命機関と三位一体で存在していたが、長い年月と時間の流れの中で「自己」と呼べる意思が生まれた

それに伴い、消去と生産の両機関は余と別離。だが、両機関の操作を司る事に変わりなし：よって今後も製命機関と消去機関を操作し、この母なる世界の未来は決して揺るぎわしないのだ

余がいるこの世界は、悪く言えば箱庭と呼べるほどの小さく広大な船の中なのだ。この船の外は遙かに広く果てのない世界が広がっているらしい……らしいとは、余には目と呼べる視覚器官が備わっていない故に想像するしかない、海と呼ばれる巨大な水溜まり、空と呼ばれる濃い蒼で構築された見えぬ大気の壁、大地と呼ばれる微生物の住処があるらしい……

そして、これは余しか知らない機密事項、近い将来母は自己崩壊を起こし現在着陸している星の大気中に溶け込むというのだそれに伴い母に住む船員三万六千五体、約五十万と九千六十体の避難民達はこの星に永住する事になるだろう……

もっとも近い将来と言っても、今から千年以上先の未来だが幾十万の月日を稼動し続けた余にとっては近い将来と呼べるだろう

さて、この呟きもここまでとしよう……どうやら日課と呼べる定時検査の時間。最後に一つだけ、余達が保護し養っている避難民の人

種の呼び名くらいは伝えておこう。人種名はアクマ、ついでに伝えて言つと星のもつとも優れた知性動物をネアンデルタールと呼ぶ

？ 敗因と苦痛（前書き）

PVが十万を突破しました。
本作を見ていただきありがとうございます！

? 敗因と苦痛

- side -
ネギ -

「フルグラティオー・アルヒカンス
白き雷!」

修学旅行五日目の翌日、僕はエヴァンジェリンさんに弟子入りを申し出た。京都の戦いで自分がどれほど弱く未熟だと分かったから……僕の申し出にエヴァンジェリンさんはテストとして、従者の茶々丸さんと勝負して一撃を入れることが出来れば弟子にするといい一週間の猶予をくれた

茶々丸さんの実力は大停電の時に分かっているので、このままでは勝てないと思い僕は白い髪の少年フェイトと戦った古菲さんに、一週間の稽古をつけてもらうことにした。古菲さんもフェイトに負けたのが悔しかったらしく僕に稽古をつけながらも、自身はさらに苛烈な特訓をしていた

それから一週間の稽古が終わり、茶々丸さんとの勝負は僕がボロボロに殴られながらも、最後の最後でビンタが届きエヴァンジェリンさん……^{マスター} 師匠の弟子入りをした

その後は、修行は師匠^{マスター}の別荘がある魔法球の中（巨大な筒状の塔が一つあり、周りが海で囲われている）で行われた。その中は時間の流れが外とは違い、外の一時間がこちらでは一日になるとも凄いものだった

それから先生の仕事をしながら、仕事が終わればマスターの修行の毎日が始まり、修行開始から外の日数で一週間ぐらいが経った。その間の修行は、言うのも恐ろしく語るのもおぞましいくらいに修行内容だった

そんなある日の休憩時間マスターに師匠が亜子さんを連れて来た。僕の練習相手と亜子さんの七つの魔焰セブン・ブレイズを研究したいらしい……亜子さんは何も聞かされずに連れて来られたみたいで、この別荘に大層驚いていた

マスター 師匠は早速、僕と亜子さんで模擬戦をやらせた。最初亜子さんは戦いが嫌いと言っていたが、マスター 師匠から何かワイロを無理やり渡されたらしく、渋々僕と始めた

僕は亜子さんの実力は良く知らない事と、戦いが嫌いなので僕より下じゃないかと高をくくっていた

いざ、始めてみて亜子さんは僕の考える以上に強かった。純粹な体術で古菲さん並の実力を持っていて、氣の強化は古菲さんほどではなかったけど七つの魔焰セブン・ブレイズの赫灼アシュタロスの炎を纏った亜子さんの能力は間違えなく古菲さんや茶々丸さんよりもずっと能力が上で、不利になった僕は少しむきになって僕は覚えたばかりの無詠唱の魔法ギタ・マジカの射手ウチ・ルクスの光の一矢を近距離で放つてしまいそれが直撃コースだったが亜子さんはかわさないで、そのまま受けたがダメージは無かった

その後は、亜子さんに体を地面へ抑え込まれて僕の負けだった。模擬戦後に知った事だけど、赫灼アシュタロスの九泉天日は敵意ある魔法・氣の攻撃を吸収する能力があり、吸収したダメージ分を強化に当てる事が出来、しかも一度能力が上がると解除しても上がったままらしい。その分、赫灼アシュタロスの九泉天日の炎に攻撃能力はないので、触れても熱い

だけで火傷などはしないらしい……

正直、凄い能力だと思った魔法使いのような遠距離で呪文詠唱を武器に戦うタイプの人には凶悪な能力だった。攻撃すればするほど相手は際限なく強くなるのだから、相対した瞬間に自分の武器を封じられたも同じだから

それから数時間後、二度目の模擬戦をする事になった。前回の失敗を生かせるように、威力を上げた魔法を使う事にした。手を抜いたりしたら師匠マスターに怒られるので僕は亜子さんに罪悪感を感じながらも、使える魔法で対生物の殺傷力が高い白き雷を放った。僕の手から放たれる電撃は、亜子さんの手から放出する黒炎に触れた瞬間に氷が衝撃でバラバラに割れるように粉々に砕かれた

それは京都の決戦で鬼神スクナを殺した時の炎と同じ色をしていた。亜子さんは黒炎を僕に放ち、慌てて障壁で防御した瞬間に障壁がさつきと同様に粉々に砕かれその黒炎を煙幕替わりにして、その際に亜子さんは僕の背後から僕を地面に抑えつけた

「そこまで！」

「またウチの勝ちや、お疲れ様ネギ君」

「うっ…負けました…」

落ち込む僕を余所に師匠マスターが、やっぱり少し怒ってるようでまるで頭から二本の角が生えているように見えた、僕は体が強張った

「ぼつや、敗因は何だ」

「……はい、僕が亜子さんの薄紅アシユタロスの炎を警戒し過ぎて他の炎の事を考えなかったのが原因です」

「確かにそれもある……が、まだある。白き雷を砕かれた際に動揺し、守りに入り足を止めたことだ。体技でいえばお前より和泉亜子の方が格段に強い、つまり強敵だ。強敵と相對した時に立ち止まる事は敵の的になる事だ。立ち止まらず動き続け、敵の的を絞らせるな。これは格上の相手と對する際の基本だ。覚えておけ」

「はい。師匠マスター、次から氣を付けます」

「そうしろ。出来が悪いと修行は無しにするぞ……今日の修行はここまでだ」

「はい、お疲れ様でした」

そして、師匠マスターは別荘の下の階層、書庫スペースへの道を歩いて行つた。残された僕は亜子さんに頼んでもう一度、黒炎を出してもらいその炎の説明をしてもらった

名前は常闇ヘルフェゴールの辺獄烈火。修学旅行の三日目に亜子さんの元に戻つて来た二柱目の悪魔。能力は赫灼アシユタロスの九泉天日とはまるで違い魔法や氣弾や靈体を完膚なきまでに破壊が無効化する能力を持った黒い炎。その代わり、物理的な攻撃に対しては全くの無力らしい

そして、亜子さんにとって最も使いにくいのが六柱目の悪魔、晴

アラストール

天の煉獄業火。常闇の辺獄烈火とは逆に、着火するといかなる技術・魔法でも消し去ることができない『絶対焼殺』の炎を持ち、霊体のように実体を持たない存在に対してはまったく効かないが、対物に対して例え、燃えない素材でも必ず燃やす事が出来る青色の炎

僕はこの三つだけでも、敵はいないと思った。例え強力な魔法でも、常闇の辺獄烈火で破壊して、いかなる障害も晴天の煉獄業火が燃やし赫灼の九泉天日で敵を倒す。これだけでも、必勝が出来ると思った。さらに後、四種類の能力の炎があるのだから、七つの魔焰は師匠の言う通り人外極まりない能力だと思い、その使い手の皇帝と引き分ける強さの父さんが少し恐ろしいと思いながら、亜子さんに他の四種類も聞こうと思った

「亜子さん、他の四種類も教えて下さい。どんな力があるんですか？」

「……………あゝ、ごめんなネギ君。ウチ実は他の四柱の能力は知らん」

「え？」

「実はアシユタロス、ベルフェゴール、アラストル以外の炎と固有能力は使った事ないんや。だから、ウチも知らん」

「そうなんですか……………」

ちよつと残念だな

「ごめんな、ネギ君」

「いえ、そんな、僕の方こそ大切な力の事を馴れ馴れしく聞いて
…」

「別にええよ。言うだけならタダやから……」

笑顔で答える亜子さん。でも、僕は時々どこか遠くを見ている亜
子さんを知っている。その理由も……マスター師匠に言われた殺す覚悟と前
に進む決意だ。きつと、それで一人で悩んでいるまき絵さん達には
言えない事だから、そしてそれは僕にも口を出せる事でも挟める事
じゃない。亜子さんが考えて決める事だから……

- side end -

- side 亜子 -

ふう、嘘つくのも気が引けるなあ

ネギ君と別れてウチはエヴァンジェリンさんと同じ塔の下層の書
物スペースへ続く階段を降りて行く最中だった。階段は螺旋状にな
っていて降りるのも、随分と体力を使うと思った

《別にあの少年に我らの全能力を教える必要はない。ただでさえ、真名の焔を教えただけでも、重大な情報の漏えいだ》

アラストル、重要なんかな？ウチは読心の方が重要と思うんやけど
プライベートもあるし

《問題だ。読心などは対抗策などいくらでもある。だが、真名の焔は我らの全てだ。色の焔はあくまで真名の焔の一部に過ぎない。真名の焔の存在だけでも知られるのは正直、痛手だ》

色の焔って真名の焔の一部だったんか、初めて知った

《魔界よ。何の為の対価だ。魔界から生まれた我らが、母たる魔界に取引を持ちかけ、その上で使用させるのだ。こちらにとって重要であると気づいてほしかったのだがな》

なるほど、それもそうやね。でも、何で他の四柱の力黙っておけと言ったん？

《言ったはずだ。真名の焔は我らの全てと、色の焔とは言え真名の焔の一部なのだ。そこから真名の焔の一片でも知られるのは、のちのち大変になるかもしれないからだ》

のちのち……って、ウチは別にネギ君とは戦わんよ。それはさっきみたいに、模擬戦くらいならするけど、フェイト君の時みたいな命を懸ける事しないよ

《今はそうでも、我らの存在意義が何かを殺す為にあるのだったら魔界は手を血で染めるかもしれない……もしかするとその何かが、少年の大切な物かもしれないし親しい知り合いかもしれない……それ

を考えれば、敵対する可能性は捨てきれない》

……嫌な事、言っんやなアラストル

話してる間に、書庫スペースにたどり着いた。そこは学園の図書館島と引けを取らないほどの、本棚の高さと書籍の多さを持っており向こう側がまったく見えないほどの広大さを秘めていた。多分、この別荘の外みたいに空間やら、何やら手を加えていると思った

入口から、数分歩くと大きな机がありその上にあぐらを掻きながら本を読んでいるエヴァンジェリンさんがいた

「来たか、遅いぞ」

「ネギ君と話をしてて……」

「まあ、いい」

本を閉じ雑に机に本を置いたエヴァンジェリンさんは、ついて来いとはかりに無言で手招きしてウチをさらに奥へ連れて行った……
そして

「着いたぞ」

「え、……」

さらに進むと、そこは周りとは明らかに違う場所だった。さっきまでは高い本棚と本棚に詰められた本が通路に沿って永遠と並び続いていたが、今ウチのいる場所は同じ書庫スペースとは毛色がまるで違う

一言で言えば研究スペース。天井からの明るい光に照らされた部屋は無重力状態なのか、ビーカーやフラスコや試験管ははメスにはさみに謎の緑色の液体が入った瓶が宙を彷徨っているのだ

「どこ何？」

「見てわからんか。ここは私の研究室だ。無論、秘密のな…ふふ」

何でそこで笑うん？さっきまで本ばかりやったん

ウチの疑問を見透かしたのか、エヴァンジェリンさんはさも当然、当たり前のように答える

「書庫から直接ここに来れるように、空間転移魔法の要領で作ったんだよ。別荘に入る時と同じだ。もちろんこっちは決まった歩き方をしないとダメだな」

「そ、それでウチに何する気？」

解剖でもされるのではないかと、クラスメイトの葉加瀬聡美と同

マッドサイエンティスト

類ではないかと、内心怯えながら尋ねるとエヴァンジェリンさんは呆れたようにため息を吐いた後に

「あほ、大方私を葉加瀬^{ハカセ}聡美と同じマッドサイエンティストと思っただか：安心しろ。別にメスもはさみも使わない、そんな物を使わずとも爪で皮膚を裂き、指で臓腑を掻き分けるだけだ」

その瞬間、ウチは脱兎のように逃げようとしたが、見えない何かで動きを封じられて研究室の中へ投げ込まれ、その瞬間に体が浮き空中で身動きが取れなくなった

「何だ。無重力ぐらいで慌てて」

普通の学生は無重力なんて経験した事はない！

「まったく……だが、丁度いい。そのままじっとしてる」

「え！？いや、バラすのはかんにんしてや〜！！」

「あほ、さっきのは冗談だバカ者。私は女・子供は殺さない主義なんだよ」

ため息を吐きながら、無重力の部屋へ入り優雅にウチのいる所まで泳ぐエヴァンジェリンさん。そしてウチを掴むと仰向けにした

「……ほんまにバラさへんよね？」

「くどい。本当にやるぞ？」

「すみません。ごめんなさい。もう言いません」

ドスの効いた脅しに怯えて縮こまるウチを余所に、エヴァンジェリンさんは何やら古ぼけた巻物を取り出し巻物を開きながら、ウチにやろうとする事を説明した

「今からお前の精神に触れる。最初は嫌な感じだが時期にその違和感は消える。消えたら、そのまま心を私に委ねろ」

「でも、アラストルが言うてたけど、我らはウチの心から生まれ たって言うたから心に精神に触れるのは不味い気がするけど……」

「……だろうな。七罪の欠片なる物だけで七つの魔焰セラフ・ブレイズが生まれるとは思っていない。七罪の欠片は植物に例えたら種で、心という水を栄養に育ち、精神という土を苗床にして初めて七つの魔焰セラフ・ブレイズという花になる。そんなところだろう」

「もし、違ったら？」

「そうだな。精神その物が七つの魔焰セラフ・ブレイズとしたら触れた瞬間にお前の中の悪魔の攻撃を受けるだろうな……だが、安心しろ伊達に数百年は生きていない引き際は心得ている」

「数百年……？」

数百年、その言葉にウチは非常に引っかけた。どう見てもエヴァンジェリンさんはとても数百年生きたようには見えなかった

「ん、何だ知らなかったのか？私はこれでもざつと六百年近く生きる。不老不死の真祖の吸血鬼にして、闇の女王。【闇の福音】ダイク・エヴァンジェル【悪しき音信】【童姿の闇の魔王】などと呼ばれる。それはそれは恐れられた悪の大魔法使いなのさ」

「……………そうは見えへんけど？」

ウチの薄い反応に、少し不満なのか

「ふん。今はぼつやの父親に力を封じられてこの程度だが、封印が解ければお前が腰を抜かすほどの迫力と魔力を見せつけるのだが……それはいいそろそろやるぞ」

「まだ。心の準備が……………」

「知らん」

エヴァンジェリンは巻物をウチの上に乗っけると、何やら呪文を唱え始めた

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック。開け、心の錠、鍵よ。我が名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。我が心を受け入れ、心なる世界に入る事、世界の根幹に触れる事を許したまえ。リック・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

呪文と共に巻物は紫の光、いかにも怪しげな輝きを放ちはじめ。それを確認したエヴァンジェリンさんは手を挙げた挙げた手は淡い光を纏っていた。それを見たウチは何となく次に起こる事が分かったが、体が金縛りのように指一本と動かない

ちよつと！？待って〜？！あかんよ！それはあかん！？

ウチの眼からの心の叫びと訴えは、空しくもエヴァンジェリンさんには届かずにエヴァンジェリンさんは高々と挙げた手をまるで、その手を泥の中に思いきり突っ込むかの如く巻物ごとウチの体にめり込ませた

その瞬間、自分体の中に異物が無理やり入り込むのを感じて思わず声を出そうとするが、声がちゃんと出ずに微かに喘ぎ声が出るだけだった

その短い間にも、エヴァンジェリンさんはすでに巻物の半分と共に二の腕までウチの中に入り込んで、内臓を探るように手を指を動かしていた。それはとてつもない違和感と嫌悪気持ち悪さが一拳に来るような、ときかく味わいたくない感じだった

「あつて……やめ……え……ぐつ……て」

「我慢しろ。存外にお前の精神世界が広大なんだよ……腕だけで探るのは無理か……仕方ない、少々私が危ないが体を入れてみるか……」

「へっ？……なひい？……ぐつあえ！」

自分でもどうしたらあんな声が出るのかと疑問が考える思考よりも気持ち悪さが上回り、次に脳が壊れるのではないかと思えるほどに頭痛と全身を剣で貫かれるたような鋭い痛みが津波のように激しく鉄槌のように重く強く何度も押し寄せた

その痛みはエヴァンジェリンさんが巻物と共に完全にウチの中に入っていく事と分かり、入り終わると同時に痛みは無くなったが、信じられないほどの痛みと気持ち悪さに涙を流しながら放心状態のウチは体を動かせず、ただ無重力の空間を漂っていた……

天井の光を見ながら思った。きっと……ウチはもう壊れているんだ。そうでなければあの痛みに自我が残るはずないと……でも、生きていて良かったとも思った

- side end -

？ 敗因と苦痛（後書き）

感想でも評価でも、どちらでも構わないので宜しければ
入れてくれると嬉しいです

? 心の世界

- side エヴァンジェリン -

ここが和泉亜子の精神世界か……なんという広さだ……

私は今、和泉亜子の精神世界に体全てを入れて、七つの魔焰セブン・フレイズの事を知りたいが為に危険を冒し入り込んだ。最初は手の触感から情報を読み取り探っていたが、和泉亜子の精神の領域の広さが広大で手だけでは何も分からない為にだ

具体的な危険はこの世界、精神世界に取り込まれ一部になる事だ。そうなつたら最後例えこの私でも、自我はなくなり世界の糧になるしかない。一応、それを防ぐ為に侵入の際に対精神浸食回避の為にスクロール巻物を持ってきた

正確に言えば、精神に物理的な物は持って来れないのでその術式だけだ。無論、私も着ていた服はなく全裸だ

精神領域…精神世界とも言うべきここは当然ながら個人差があるが、共通していくつかの階層に分かれている。それは深く潜れば潜るほど、その人間の本质と本心が見えてくる。和泉亜子の場合七セつの魔焰フレイズの影響か、七階層になっているのは視える

そして今、私は表層心理に一番近い第一階層着いた。そこは一言で言えば静寂。音の無い世界というべき静けさしかない夕焼け空と草原の世界。私の心臓の鼓動がはつきり聞こえるほどに世界は無音

を保っていた

確か、最初の悪魔はアシユタロス…怠惰か…景色があるとはいえ、この無音。寂しさの表れか？

とりあえず、少し歩いて行くがひたすらの草原、風も無ければ草の擦れる音も聞こえないここは音の概念がないのか、それとも時間を固定して変化が無いようにしているのか…分らない。心の中ほど常識の通じない場所はない。心こそ人の全て、心こそ真の変幻自在一瞬として同じ姿はない、絶えず変わり揺らめき続ける。さながら万華鏡のような物

長い時間を生きた私の心に対する価値観。もう変わることはないだろう…そんな事を考え歩く内に、私の前に変化が現れた。それは大きな動物：熊、全身を黒い体毛で覆われた五mはあるだろうか、それが立ち上がり私を待っていた

お前がアシユタロスか？

《そつだ。吸血鬼、オレがアシユタロス》

私を追い払いに来たのか？

《いや、めんどくさい事はオレはやらない。好きに潜れ》

その言葉と共に、アシユタロスの背後に大穴が開き、アシユタロ

又はそのまま何処かへ歩いて行く……私をその穴を覗きながら、少し意識を入れ直し穴へ飛び込んだ…

穴を抜け第二階層に広がるのは、紅い空と文字通り足の置き場など無い黒く暗い火が燃え盛るの火の海、体が触れた瞬間に心に強烈な性的な感情の飢えが全身を駆け巡り、心に深々と入り込んで来る。回避しようとするが逃げ場所などあるはずもなく、仕方なく内側から湧く身を焦がすような性情の熱さに我慢しながら火の海を泳ぐ

現実なら私は泳げないが、心の中は強く願ひ念じる事でそれを世界に体現する事の出来る場所……故にここで自身は死んだと認識した瞬間に、心と肉体の死に直結する

数？ほど泳ぐが、この主であるだろう色欲のベルフェゴールの姿は影も形も見えない…この場合は、少し強引だが世界を構築する物と逆の事を願えばいい。現在は色欲の心、簡単に言えば欲望であり執着心の一種

執着の逆……無関心、関心を持たない事…難しいな

とりあえず、この世界を否定し、拒絶し、不要でいらないと目を閉じて強く念じて見た……五秒ほどの眼を開けると、世界そのものに変化はないが、ただ一つ目の前には先ほどまで影も形も無かったベルフェゴールが正面に佇んでいた。全身を黒で統一した服装に鮮血のように赤い眼と瞳がこちらを見つめて、そして陶器のような白すぎる肌と妖艶な極まりないスタイルをしていた

私に比べたら劣るがな

《どうしてここにいるの?》

貴様らの存在に興味がある…まあ、探究心だな

《強欲な人…後悔するよ》

ほう、おもしろいならばこの私を後悔させてみる

《…でも、私はやらない。だから、出て行って…》

ベルフェゴールが手を火の海に向けると、海から大穴が口を開ける…だが、それは先ほどと違い穴の周りを三重の線で囲まれていた

先ほどと違うな

《三層から五層まで誰もいない…それらに落ちたら戻る術は無い。穴は層に住む者にしか開けられないから》

なるほど、一気に六層まで落とすつもりか…一応礼を言うべきか?

《いらない。あなたが戻らないと母さんが悲しくなるだけだから》

それを最後にベルフェゴールの姿は歪み、火の海と同化し消えた

私は穴を覗きながら、飛び込むか迷っていた。本来なら一層ずつ

降りて行き心が耐えられるようにするのが定石。一度に三層も飛ばして行くのは経験がない、上にそして第六層に住むは憤怒のアラストルであり、恐らく浅い層に住むアシユタロス・ベルフェゴールとは一線を違える存在だ

だが、飛び込む以外に私がこの精神世界を出る方法はない。巻物スクロールの精神浸食回避はあくまで、この世界からの浸食を抑えるものであり決して防ぐ物ではない

だが、行くしかないな……

意を決して私は穴へ飛び込んだ。三層分の為か落ちる時間は明らかに長い……穴の中は当然、暗く光もない暗黒の世界、ただ落ちる感覚だけが自分があると認識させる。それがなければ恐らく虚無に耐えられず、自我の崩壊を招き瞬く間に世界の一部として取り込まれるだろう……最も私の場合は、吸血鬼故か闇に対して恐怖よりも安堵の感じしかないが

しばらく、落ちていくと底の方に光が見え出口が見えた。そして同時に覚悟を決める出た瞬間に、心を潰されないように憤怒アラストルと相対した時に心を持っていかないように気を引き締めた

そして…穴を抜けると第六層・憤怒の世界に出た。空は淀みのない青空がどこまでも続き、その下には鋭く尖った剣山のような山が並びその間を溶岩の川が流れる。それは清流のように静かではなく、濁流のように荒く激しく

山の中の岩場に降りた私を最初に襲ったのは、京都の時に和泉亜

子がベルフェゴールの真名の焔で現れた時のような冷酷な殺意そして死を直感させるほど冷たい殺気が私の体を貫き、精神浸食回避の術式はその一瞬で碎き散り私は無防備になった。そしてその瞬間に私の、心を魂を粉微塵にする為のように恐怖が怒りが悲しみが苦痛が無理やり心に螺子込まれる……それは私の心の容量を超えるほどの感情の瀑布

抑えようにも圧倒的な質量差にいくら心の扉に鍵をかけようとも扉ごと粉碎し容赦なく私の中に入ってくる。どれほど、それを拒絶し否定する願いを込めても全てが無駄に終わる……当然だ。ここは精神の最下層の一つ前、いくら願おうと異物の私は勝てなどしない。そして私はそれが分かって、承知でここへ踏み込む飛び込んだ

間違えなく私の考えが甘かった。そして気づくべきだった……この七つの魔焔セブン・フレイズは何人も人間が時代と共に継承してきた進化の力、そしてその為には命が必要と、考えていたのはこの私自身だ。だが、もし進化に必要なのが命ではなく心ならば一七罪の欠片……七つの魔焔フレイズは心の結晶とも呼べ、そして七柱の悪魔とは、歴代の皇帝達の魂の集合体がそれぞれの心になぞられて生まれた物ではないかと……ならば、私に勝てる道理は何処にも無い私の心は一つに対して七つの魔焔フレイズは数多の心、質と量で私は敵わない

《その通りだ。愚かな吸血鬼。我らの領域を探究心という欲望で安易に踏み込んだ事を後悔しているだろう》

声が聞こえたと同時に、感情の瀑布は消えたがその時には私の心は潰されかけ岩に倒れた。倒れた体を隠すように影が生まれ私の前には銀の鱗で覆われた十mほどの青い瞳の竜が私を上から見下して

いた

《一応、賞賛の言葉をかけよう吸血鬼。今だこの世界で自我を持つ事と、長い間後継者達しか理解しえなかった我ら七罪の悪魔の源を理解した事を》

答える事は出来なかった。今の私はこいつの前では塵芥アラストルに等しい吹けば消える心に過ぎない自我を保つのでやっとなのだから

《答えらぬか……まあ、いい。知っていると思うがこの精神世界から出る方法は一つだけ、それは現在いる階層の主、つまりここは我だが……我的手で力で戻してもらおう以外に出る方法はない。その為には我を屈服させるか対価を払い帰還への道を作ってもらおう以外にない……問おう愚かな吸血鬼よ。お前は帰りたいか？それともここで我が魔界の一部になるか……選べ》

………帰る……今の私にもう力はない。対価は可能ならば………いくらでも払おう

それは完全なる降伏で敗北宣言でもあり、屈辱でもあった……それでも、戻れるならと私は納得した。そして二度と、この精神世界には入らない事を誓いする事でもあった

《いいだろう。ならば対価はその命………と言いたい所だが、お前にその身に生死はない。時間を固定され生を歩むわけでも、死へ進むわけでももない。ただ、その時に止まった時間に居続ける存在でし

かないお前に命など払えはしない》

良くわかっていると思った。こいつの言う通り、私には生も死ない。十歳の誕生日に吸血鬼にされた私は不老不死……決して生へ死へ進めない存在になった……いや、されたか……それによって、私は十歳の誕生日の時間の私に固定された。だから、この身が焼かれても強制的に十歳の誕生日に戻され、指を怪我しても十歳の誕生日の私の指に戻される。変化する事を許されない魂の牢獄、それが私の体なのだ

それを知らない者達は私を殺そうとしたり、不老不死の法を手に入れようと捕まえようとするのだ。私からすればそれは単なる終わらない苦しみの入口に過ぎないのに……

《だが、ここでお前を帰さないと我が魔界の機嫌を損ねる……それは、この世界の存続に関わる事……お前から貰う対価はその身の一部だ》

いいのか、そんな物で……

《構わない。その身……時間に縛られた肉があれば少々試したい事が出来るからな》

何をする気だ……

《気にする必要は無い。なに、少々我らの自由度を上げるだけのこと。魔界には何のデメリットはない……さあ、帰るといい……さらばだ。我が友キティよ》

！？、待て貴様！今、私の事を……

その瞬間に私は弾かれるように空へ飛ばされた……

アラストル、お前は一体……何だ？

- s i d e e n d -

- s i d e アラストル -

もうここへ来るな。我が友キティ……

空へ上げられ、瞬間に小さくなって行く昔の我の友の姿を見ながら、似合わない哀愁を漂わせていた。そして、対価として頂いた彼女の手足の一本ずつが我の目の前にある。本当は魂を削り糧にする事も考えたが、知り合い故の情がそこまで非情にはなれず、その代りに生身の肉体の一部を貰った

これがあれば、後はこの手足の肉にある魔法がどうにかするだろう……魔界の驚く顔が目に浮かぶ……くくく

《あまりワタシを虐めないでほしいな……アラストル》

振り返るとそこには、奴が宙に浮いていた。我ら七つの魔焰セラン・ブレイズとは、さらにその存在を違えるもう一つの炎……

《虐めるとは心外だな…我はただ少々の道楽を楽しみたいだけの事》

《それが虐めるだよ。ワタシはあまり心が強くないから…あんまり酷いことをされると泣いてしまうよ》

《くっはは！なんと心の世界で心の無いセリフを言うのだな！》

我が声を荒げながら笑い奴を挑発するが奴から感情は見えず、やはり奴は虚無のままのようだ。我が見つめていると奴はため息を吐き

《アラストル。いくらワタシが優しく皆に接しても本当のウチは私だけなのを忘れないでね》

《その言葉は間違っているぞ。和泉亜子という存在を形作るのは、お前のような深淵の底で外を眺めるだけの存在にあらず。魔界のように外の世界に触れ感じここにいる事を噛み締める魂の存在をいうのだ！断じて貴様ではないぞ！！万魔殿バンデモニウム》

《……そう……でも、それは分からないわ。いずれ、ワタシと私は相對するその結果次第でワタシがウチになるか、私がウチになるかもしれないのだから……》

そう言い残し、バンデモニウム万魔殿は再び深淵の底へ帰って行く……再び空を
見上げるがキティの姿はない

魔界よ……お前はその手に抱え切れないほどの運命を握っている。
願わくば、今度こそ叶えておくれよ。その為なら我らは……喜んで
存在を捨てよう……なあ、ベリアル

- side end -

？ 朝の日常・夜の非常（前書き）

タイトルは気にしないでください

年初めに投稿しすぎたせいで製作スピードダウン

? 朝の日常・夜の非常

- side ????

あなたは誰？

上からスポットライトの光が私だけを照らす、周りは暗く誰もいない……でも誰かはある……もう一度

あなたは誰？誰なの？

返事は無い、でも誰かいる間違いない……確信があった。すると突如、向かい会うように光が現れ、その下には一人の少年。金色の髪の少年が私を見て笑ってる……私は彼を知っている。昔に別れたきり……のような気がした

少年は何か口を動かしながら、私に手を差し出した。それに応えて私は手を伸ばす……でも、届かない。どんなに手を伸ばしても届かない

その内、少年は手を伸ばすのをやめて、そそくさと私を置いて走り出した

待って！……ねえ、待って！！

必死に少年を追いかけても追いつけないどんなに走っても、叫んで呼んでも、少年には届かない……その内、少年は暗闇の中へ消えてしまった

私はそれでも、少年を探した。暗闇を当てもなく……その内、私は疲れて座り込んで上を見上げるあるのは私を照らす光だけ……星も無ければ月も無い

急に一人でいるのが寂しくなった。だから、私はまた少年を探し始める……この心に訪れる寂しさを消したい為に……そして、今度こそ少年の声を聴く為に

- s i d e e n d -

- s i d e 明日菜 -

「へんな……夢……」

「ん……アスナおはよう」

「おはよう。このか」

「今日は珍しく、ぐっすり寝とったな」

二段ベットの上から乗り出して窓を見ると、外は快晴。外では雀を鳴いていた。私は枕元の時計を見ると、時刻はすでに朝の七時を過ぎていた

そっか、今日はバイトお休みだった。それにネギもベットに潜りこんでこなかった

いい事だと思いながら軽く寝癖を直して、下を見るとこのかがエプロン姿で台所に立ち、何か料理を作っていた。その表情はとても楽しんでいて、まるで夫に愛妻弁当を作る奥さんみたいだった

私はベットを降りてパジャマから制服に着替えながら、部屋にネギがいない事に気づいた

「あれ、このか。ネギは？」

「ネギ君は何んや、急用で先に行ったえ」

「ふん。先生は大変ね。このか、今日のご飯は？」

「フレンチトーストと目玉焼きにウィンナーにサラダ。それに今日はコーヒーゼリーつきや」

いつも部屋の真ん中にあるテーブルに、食器を並べながら答えるこのか。食器からはこのかの作る、少し砂糖多めなのに、それでいて決して甘すぎないフレンチトーストと綺麗に丸い半熟の黄身と真っ白な白身が分かれた目玉焼きとその横で存在感をしっかりと出す大き目のワインナーと小皿に盛られたサラダ。そしてデザートのカリームの添えられたコーヒーゼリー

それらを見てつくづく思う。やっぱり、このかには料理では勝てないと。どうしたらこんな綺麗に作れるの？どうして私の作る目玉焼きは焦げるの？……そこで考えるのをやめて、出来立ての内に食べる事にした

「いただきます」

口いっぱい広がる美味しさを噛み締めながら、これを食べずに学校へ行ったネギが可哀そうと思いつつもネギの分まで食べてちやおうとも思った

食べ始めてから十分くらいして料理もサラダ以外はほとんどなくなつて、残すはデザートのコーヒーゼリーだけになった時、このかがとんでもない事を言い出した

「……なあ？アスナ？」

「何？」

「かずみから聞いたんやけど、アスナとクーへって、百合関係な

ん？」

「ぶーーーー!?」

その瞬間、私は食べていたサラダを盛大に吹き出した。朝の優雅な一時を完膚無きまでに徹底的にこれでもないくらいに盛大にぶち壊した

吹き出したサラダがこのかに付いたのには目もくれず、私は立ち上がり部屋を飛び出し怒りのおもくままに、あのパパツラツチの部屋を目指して靴も履かず裸足のまま廊下を全力で走り出した

「朝倉~~~~!!!!」

- s i d e e n d -

- s i d e 亜子 -

「朝倉~~~~!!!!」

「ひゃ!」

「何?アスナ?」

まき絵と共に朝食を食べていたら、突然廊下からアスナの大声で叫ぶ声が聞こえてまき絵は朝食を食べるのをやめて、何事かとアスナの様子を見に部屋を出て行った……しばらくして、まき絵が戻って来た

「なんなん？」

「何かねー、アスナが朝倉を突然強襲したみたい」

「は？」

「やんやねん。強襲って朝倉、アスナに何かしたんか？」

「まき絵の言葉にウチが疑問を浮かべていると、まき絵が何か思い出したのか閃いたのか、手を合わせて

「多分ねー、あれだ。アスナとくーへがキスしたとかの話だ」

「はい？キス？」

「そうキス。なんかねー、京都の三日目にアスナとくーへがこっそり隠れてキスしたって話がでてきてねー。多分、アスナはそれをこのかから聞いて激怒して話の発信元の朝倉に強襲したみたい」

「アスナと古菲がキス……それってもしかして、バックタイオー仮契約の件？」

京都の戦いが終わって、このかの実家に泊まった時にネギとアスナが仮契約パクテイオーの話をしていて、思わず立ち聞きしてしまった。最初はパクテイオーと言う単語が何なのか分からなかったが、話の内容からアスナが誰かとキスをして、どうか……正直よく分からなかった。話の途中からアシュタロスが説明してくれたのでパクテイオーが魔法を使つての一時的な契約で契約の契りの方法は色々あって、一番簡単なのが皮膜接触つまりキスらしい……などを思いだしながら、まき絵に強襲したアスナのその後を聞くと

「その後ね、いいんちよが来てアスナを止めに来ただけだ」

まあ、当然やな。いいんちよの性格からして

「そのまま今度はいいんちよとアスナが喧嘩を始めて……」

やっぱり、あの二人は水と油やな

「しばらく、続いた後に管理人のおばちゃんに来て叱られた……でさ、亜子？」

「ん、何？」

「あれ、どうしたの？」

「あゝあれな……うん……まあ、何や……」

唐突なんやから……

ウチとまき絵の視線の先には、細長くて背の高いダンボールがひ

とつあった。それはウチがエヴァンジェリンさんからもらった報酬
というか、対価というか…とにかく、中身はなんなのかと言つと…
テレビ

「テレビ……それもプラズマテレビや」

しかも、壁かけタイプ

「え、亜子。そんな高いのどうしたの？」

「秘密や。秘密」

「秘密……じゃあ、聞きたいけど聞かない」

まき絵は優しいなので、秘密と言つばまず誰にもしゃべらない。
これがゆーなだったらすぐにしゃべってしまう。でも、秘密にして
も結局はこの部屋に来たらバレてしまうけど

まあ、ええけど。友達やから……でも、こんな高いのもらって良か
ったんかな。結局あの一回でエヴァンジェリンさん研究諦めたみた
いやし…

- s i d e e n d -

「マスター。ネギ先生に今日は休むとお伝えしました」

「ああ。分かった」

椅子に座りながら茶々丸からの報告を聞き、私は精神世界脱出に
払った現在再生中の手足を見るがまだ完治にはほど遠く、手足は共
に三割ほどしか再生していない

これも代償か…再生能力…いや、時間回帰が遅いな。幾分か取られ
たのか？

他者から見れば、再生しているように見える時間回帰を見つめな
がら、私は和泉亜子の中にいるアラストルの正体について考えてい
た。私の事を子猫キネコと呼ぶ奴は何人かいた。だが、そいつらは皆すで
にこの世にはいない。ある者は時と共にその生涯を閉じ、ある者は
戦いの中で命を散らし、ある者はいつの間にか何処かへ行ってしま
った……

今、生きている奴……いや、死んだ奴……いや、それよりも奴らは
読心が出るならば考える必要もないか……だが、あの呼ばれた感
じ前に何処かで……

思案しながら記憶の糸を遡るとやはり、所々忘れていたものかとさらに考えていると、茶々丸が話しかけていた

「マスター、この再生速度から完全に再生するまでの時間は明後日の夜には治ると推測します」

「ん……そうか……」

つまり、外で二時間程度か

「しかし、思いのほか落ちたものだ」

「?」

「この十五年で私の腕（実力）がだよ。昔なら精神世界の一つくらい楽に征服できたんだがな…結果はこのさま。私も少々昔の勘を取り戻さないといけないな」

和泉亜子の精神世界にはもう行かないが

昔の闇の王たる威厳と何者も寄せ付けない強さの自分を思いだしながら、今の自分の体たらくも自傷しながら私は茶々丸に指示を出す

「さて、茶々丸。私はもういい。お前は学校に行け」

「しかし……マスター」

「後の面倒はお前の姉達に見てもらおう。お前はしっかり授業を受けて来い。これは命令だぞ」

私の言葉に茶々丸は少し迷いを見せたが、命令通りに学校に行く為、別荘を出て行った。私は一人になった所で、再び記憶の糸を遡るする事にした思い出されるのは戦いの日々ばかり、我ながら飽きずに続けたものと思いつながら、さらに昔の記憶を辿って行く……思い出されるのは戦場跡を歩く私、飢えと疫病に蝕まれ滅んでいく村を通り抜ける私、人間の争いが世界にとってどれほど小さい事かと考えさせられる自然の生み出す景色に感動する私など……結局何も手掛かりは思い出せなかった

やれやれ、やはり歳は取りたくないものだ

- s i d e e n d -

- s i d e ? ? ? -

「ほお、何とも大きな樹だ」

私は全身を黒で統一した帽子と服装を纏い、空遠くから一つの学園都市を見下ろしている。その中心には凡そ常識の範囲の成長では説明し辛い、巨大な大木が堂々と根を下ろしていた

「あれが神木・蟠桃。なるほど神木に相応しい堂々とした樹だ」

あそこが今回の目的地。そして依頼内容、大罪を背負う少女と英雄の息子の現状調査とおまけ扱いの少女の能力の確認の三つ

潜入する場所の割にはとても簡単な仕事内容であり、悪く言えばありきたりな仕事だ。だが、一つ個人的に興味をそそられる事がある英雄の息子…ネギ・スプリングフィールド

あの日から六年…一体どんな少年になっているだろうか

個人的な感情は仕事に禁物だが、この少年ばかりは興味をそそる得ない。心から湧き出す興味という名の水と戦いが始まるという期待感が、私の老いた体に染み渡る……

ああ、楽しみだ

何せ、彼の息子なのだ。あの暴力的な力で人ならざる我らを退ける圧倒的な存在を示す彼の忘れ形見。これを期待しないで何を楽し

みに生きるべきなのか

期待に胸を膨らませながら、私は都市を囲む湖の外側の砂辺まで飛びそこで降りるここから先は簡単に近づけない。何故なら、ここから先は結界に触れるからだ触れれば途端に、魔法使い達が飛んで来るしかも、この結界には人ならざる我らを弱体させる魔法まで付加されているだが、それも結界に触れなければいいだけの事。その方法ももうすぐ私を迎えに来る

そろそろか……………む

学園の方から、水の存在など無視した者が水の上を歩きながらこちらへ近づいて来る今回の雇い主が用意してくれた協力者。私は帽子を脱帽して胸に帽子を当てながら彼女に挨拶をする

「これはこれは初めまして御嬢さん。私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマンシがない没落貴族だ」

「……………」

ほう、これはこれは

彼女は声を発してないで私に挨拶した。これは我らが用いる独特の意思伝達方法。魔法のような念話などではなく、細胞が固有の振動を発し意思を伝える方法で大昔には言語同様それなりに我らの世界に広がっていたらしいが。今それを出来る者も少なくまた伝える

者は皆無だ

それが出来るという事は。彼女はそれなりに歴史と地位を持つ所の出だと伺え、そしてこの学園都市を覆う結界をもつものでもない強力な魔力を備えている事も良く分かった。私は彼女に興味を持ったが彼女は協力者であるので戦いは出来ない

「……………?」

「いや、いや何でもないよ」

「……………。」

「ほう、それはまた大胆な。しかしそれだとバレるのではないか?」

「……………。」

「それは凄いです……………ではお言葉に甘えさせてもらおう」

「……………」

彼女の提示した侵入方法に驚きながらも、彼女の言葉から取れる自信に私は賛同して彼女の言う通りの方法で学園に入る事にした

「……………?……………?」

「ああ、そう言えばそうだった。彼女達も一緒にお願いするよ。何、邪魔にはならないから安心しておくれ」

「……………」

「ああ、雇い主にはちゃんと君は良くやったと伝えるよ。ザジ君」

「……………」

そして私は学園に侵入を開始した

- side end -

そこは雲の中だった

それは雲の中を飛ぶ何かだった

雲の壁など歯牙にもかけずに突き破りそれは猛スピードで進む

飛ぶ鳥は塵のように羽で払い飛ばして、それは突き進む

目指すは己の生まれた場所であり、憎み殺すべき故郷でありそして自身を縛る鎖

怨嗟の言葉を大気に空気に吐きながら、その場所を想い憎む

それが何かの源。思考の最優先事項であり喉の渴きを癒す唯一の方法
休む事など、決してせず愚直までに突き進む

目指すは神木が守護する地。殺すは後継者。縛るは万魔殿

「邪魔をするなら全てを喰らい滓に変える」それが今の行動原理で
信念

進む。耳にざわつく羽音を立てながら、雲を突き破り進み続ける

何かの名前は七つの魔焰セブン・ブレイズが『暴食』のベルゼブブ

？ 朝の日常・夜の非常（後書き）

感想待ってます

？ 使者

- side 亜子 -

「あ、ネギ君にこのか、桜咲さん」

「亜子さん、亜子さんも学園長に呼ばれたのですか？」

「うん…じゃあ、ネギ君達も？」

「はい」

アスナの朝倉強襲から翌日の放課後。ウチは学園長に呼ばれて校長室へ廊下を歩いていると、丁度階段の所でネギ君、このか、桜咲さんの三人に出くわした。ネギ君達も一緒という事は魔法関係何だとすぐに察しがついた

もしかすると、兄貴の居場所が分かったのかもしれないと期待しながらもまた戦いをするかもしれないという不安もあった。それにその事を考えるとエヴァンジェリンさんの言葉が嫌でも思い出す「願いに応える為に殺す覚悟」が頭の中で復唱される……そして現在、いまだ答えは出せないでいる

相談してもいい相手はネギ君達ぐらいでもし。相談して「やるべき」と言われたその時、自分が素直に受け止め決意出来るのか…と言われれば答えはいいえと言うに決まっています、「やめるべき」と

言われれば皇帝達の思いを無駄にしたいと思つて違くない。結局は同じ事の繰り返し

「はあ、どうすればいいんや」

「亜子？なんかいつた？」

「え！？ううん、何も」

悩んでいる間に校長室の前に着き、ネギ先生が代表してドアをノックした。それに答えて学園長の声が聞こえて、ウチらは部屋へ入った

そういえば、校長室入るの初めてやった

部屋に入り最初に目につくには麻帆良学園のシンボルの世界樹の全体がスッポリと視界に収める事が出来るほど大きな窓に床には綺麗な赤い絨毯が部屋いっぱい敷かれ、客人用の長いソファも黒い革張りでいかにも高級品に見えた

そして、窓の前には外を眺める学園長と壁際に静かに立っている高畑先生と、もう一人黒い髪の少年がいて、ウチらと目が合うと親しみやすそうな笑顔で挨拶してきた

「よお、ネギ。元気にしとったか？」

「こ、コタロー君！？どうしてここに!？」

コタロー？誰やったけ？

《直人と一緒に雇われていた奴の一人》

ああ、そうやった。ありがとうアシユタロス

アシユタロスにお礼を言っている内に桜咲さんがいつも竹刀袋に入れて持ち歩いている刀を抜き、このかの前に立ちネギ君も構えた。それを見た小太郎君はとりあえずと降参を示すように両手を上げて

「そんな構えんでいいわ。別に今日は戦いに来たんやのうて長の使い。つまり使者やから、そんな警戒するのやめてくれや」

「でも、君は捕まったんじゃあ…」

「そらそうやけど、長かて鬼やない。更生する約束すればその一環として使いの用事くらいはくれる。カの方は封じられるけどな」

ネギ君は学園長に視線を送り確認しているように見え、学園長も特には何も言わなかったが、警戒してる様子もなかった。なのでネギ君は構えを解いてそれに続いて桜咲さんも、刀を鞘に納めた

何かネギ君、気が立ってる？

《だろつな。京都ではほぼ負け寸前まで追い詰められた相手だからな》

なるほど

「…………ふむ。そろそろ、よいかなネギ君？」

「あつす、すみません学園長」

頃合いを見てネギ君に話かけた学園長を見てネギ君は急に大人しくなり、横にいたウチは凛々しいネギ君より少し反省していることちのネギ君の方が可愛いと思った

「では、ネギ君達も来た所で小太郎くん、話を聞こう」

「ああ、そやな。じゃあ、今回オレが来たんはさつきも言っただけ長の使いや。内容は京都での一件の追加報告や。まあ、当事者の一人の俺が言うのも何なんやけど」

「兄貴の居場所分かったんか？」

「ん？ああ、直兄ちゃんの妹やろ。初めまして、小太郎やよろしく」

「あ、初めまして和泉亜子や」

「挨拶はいい」

ウチの後ろにいる桜咲さんはまだ警戒しているようだった。それも仕方ないと思ったウチのバカ兄貴は、桜咲さんを病院送りにしたのだから普通はその元仲間には敵意を抱いても好意は抱かない。それを察して小太郎君は少し困った様に髪が触りながら

「そないに気い立てんでええやろ。別に直兄ちゃんかて仕事やったからねえちゃんの腕と脚潰しただけで、ほんまは妹の友達を相手するんは面倒って愚痴ってたんやで。それにオレにぶつけんといてなあ」

「……………すまない。少しイラついていた」

「まあ、気持ちは分からんでもないからええけど。じゃ、改めて言わせてもらっわ。とりあえず事件の首謀者の千草姉ちゃんなんやけど……………死んだわ」

「「「え!?!?」「」「」」

「驚くのも無理ないわな。俺も聞いて驚いたから…簡単に死ぬよ
うな姉ちゃんには見えへんから」

「どっして……………」

ネギ君の言葉に小太郎君はジェスチャーで分かんたと表現しながら
も少し真剣な顔で答えた

「多分やけど、フェイトの奴かもしれんな。直兄ちゃんは雇い主に手を出す人には見えんし、もう一人の月詠の姉ちゃんも根っからの戦闘狂バトルマニアやけど、千草姉ちゃんに刀の切り傷は無いらしいからちゃう。なら残るはフェイトの魔法や……あいつは、はなっから別行動しとったから一番怪しい。多分やけど」

言葉が出なかった、急に敵同士だったとはいえ知り合いが死んだと言われ何か言葉を言うべきだろうと思うけど何も出てこない……もし、小太郎君の言う通りフェイト君が天ヶ崎さんを殺したとしたら、もしかすると一歩間違えれば自分が死んでいた。そんな可能性の中に自分がいると思うと、ここにいるのが怖くなったそしてウチ以上に兄貴はその中に深く関わっていると思うと、心配で堪らなくなつた

そんな家族を内心心配するウチを余所に小太郎君は話を続ける

「続きやけど、フェイト・直兄ちゃんは・月詠の三人は依然行方知れずやな。フェイトに関しては、俺が千草姉ちゃんに聞いた事の裏付けする為に調べたみたいやけど偽装だったらしいし、月詠の姉ちゃんもさっぱり影も形も無い……で、直兄ちゃんなんやけど、なんや女連れて京都出たみたいやな」

「はあ！？なんやそれ、バカ兄貴！何、女の……あつ……すいまへん」

逃走してるのに女の人連れて逃げている事に驚き思わず。声に出してしまつてそれに気づいて皆の視線がウチに向けられている事に恥ずかしくて赤面しながら顔を隠す

「あゝなんや。直兄ちゃんの妹やから、女連れてとか言いたくない気持ちには分らんでもないから、そんな顔赤くせんでも」

「……………うん」

「……………とにかく、直兄ちゃんの連れてる女なんやけど……………どうやら神鳴流の人みたいで……………それも相当の使い手らしいで」

「誰なんだい？」

高畑先生の質問に小太郎君は少しバツの悪い顔をしながら、ウチの後ろにいるこのかと桜咲さんを見ながら少し小声で

「……………桜咲久遠」

「なっ！久遠が！？」

「くーちゃんが！？」

「桜咲……………久遠さん？刹那さん親戚の方ですか？」

ネギ君の質問に桜咲さんは顔をしかめながらもネギ君の問いに答えた

「私の双子の妹です。私よりも才に溢れ本来なら、久遠がお嬢様の護衛をやるはずでした……ですが、十年前に稽古の怪我で目が見えなくなり、代わりに私がお嬢様の護衛の任に着きました」

「えつ、目が見えなくなつた？その状態でも神鳴流を出来るんですか？」

「非常に難しいです。ですが、久遠なら死にもの狂いで喰らいついて神鳴流に居続けたはずですから」

「みたいやな。宗家の道場に席を置いていたみたいやから尋常やない特訓してきたんやろうな」

「なあ？コタローくん。何でくーちゃんが亜子のお兄さんと一緒に？」

「んゝさすがにそれは分らん。でも、長の話やとそのねーちゃん
は直兄ちゃんの後輩でなんや直兄ちゃんの事を滅茶苦茶慕っていた
みたいやからあれやないかな。惚れてるとか」

それはないやろ。妹のウチが言うのは何やけど、兄貴の顔は普通よりは上やけどイケメンと言われる部類やないし特別優しい性格でもないし恋路には無頓着。それに彼女が出来てもすぐに別れそうやし

そんな事を思いながらも、もし本当に桜咲さんの妹さんが兄貴に惚れていて付き合いでしてもして、そのまま結婚という展開になったら、桜咲さんを「お義姉さん」と呼ぶのかなと、あり得るかもしれない

が低い可能性を考えていると、まるで心を読んだかのように桜咲さんがこちらを見ながら

「私は別に構いませんよ?」

「へっ!?!?」

心読まれた!?!??

《顔に出てたぞ》

- s i d e e n d -

- s i d e 明日菜 -

「あゝ。疲れた」

指をブラブラさせながら私は寮にあるお風呂場に向かって歩いていた。もうすぐ始まる学園祭に向けて所属する部活、美術部の絵の展覧の為の放課後から今まで絵を書いていた。とりあえずモデルはすでに決まっていたから、そのポーズに悩みいざ描き始めた方がいいが、どうも色合いがうまく出せず手こずりようやく出せた頃にはす

で日は沈み真っ暗になっていた

やっぱり、ほぼ幽霊部員だから他の子達みたいにすぐに色出せないな

学園祭が近づくとバイト……新聞配達のおじさん達は気を利かして、休日を増やしてくれる。でも、さすがにそれ以外の日は夕刊の配達などがある為部活には出られない

バイトと掛け持ちし始めた時は部活をやめようかと考えたが、そもそも絵が幼稚園のラクガキレベルの私が苦手な美術部に入った理由は、その美術部の顧問が愛しの高畑先生だった訳で……ようは、少しでも長く高畑先生と一緒に居たいから部活に入ったのだ……悩んだ末、バイトとの掛け持ちを続けた

絵出来上がるかな？せめて中学最後の学園祭くらいは、絵の一つでも完成させたて出展したい……それに

私には絵の作品展と並び学園祭でやる事があった。それは小学校から片思いの高畑先生に告白する事。いや、それよりも前にデートの約束を取り付ける事だ。去年の学園祭の時は高畑先生と話す事すら出来ずに終わってしまい、そのまた去年は出張で会えずじまい。今年こそはデートの約束をすると心に誓いながら私は寮の風呂場に着いた

中に入ると丁度、そこにいたのは服を脱いだばかりの古菲と鉢合わ

せした

「古菲も今、お風呂入るところ?」

「そうアルよ。アスナもアルか?」

「まあ、そうよ」

「そうアル……」

「……」

気まずい空気が充満し始めていた。これも全ては朝倉がどこから情報を仕入れたか、私と古菲のキスの事をバラした為だ。お互いノーカウントと決めたはいいが、いざ会うとあの時の事が頭に鮮明に蘇ってしまう。そして改めて思う、もっと殴っておけば良かった朝倉!!

終止無言のまま、私達はお風呂場に入ると先に入っていた3-Aの皆が一番大きな浴槽近くで集まって何か騒いでいた

何かと思い近づくと、ゆーながどうやら通販で美肌になるドロドロ又メヌメな入浴剤を持ってきららしくそれを直接肌に塗ると通常よりさらに美肌効果があるらしい

「皆、好きよねー。ああゆーの」

「アスナは苦手アル?又メヌメが」

「あんまり好きじゃないわね」

ゆーな達を尻目に私と古菲はお湯がたつぷりと入った浴槽に浸かった。力を抜いてリラックスしながら反対側に目をやると、そこにいたのは朝倉と夕映ちゃん本屋ちゃんの三人だった

向こうもこっちに気づいたのか、朝倉がワザとらしく笑顔で手を振ってきたのだ。それを見た私は無性に腹が立ち思わず三人のもとへ走り朝倉に拳骨を喰らわせた

「あいた〜!!」

「朝倉!! あんたよくも」

「アスナ…ぐるしい…ギブ、ぎブ…」

今だ収まらない怒りのあまり、朝倉の首を片手で掴みながら、持ち上げると苦しいそうに私の手を叩いて降参を表現していたので、手を離して朝倉を問い詰める一体誰が情報を教えたのか

「朝倉。一体誰があんたに情報を教えたのか、教えてくれるわよねえ?」

「……記者がネタ元ばらすわけないじゃん。守秘義務だもん」

「へえそう……………仕方ないわね」

朝倉の口を割らせる為に私はさらなる拳骨に気合を入れようと腕を振り回していた時、急に背筋に寒気を感じ振り向き、目に入っていたのは水色の膜が私達に襲い掛かる瞬間だった

- s i d e e n d -

- s i d e ヘルマン -

さて、準備は出来た

夕方に急に降り出した雨に打たれながら私は神木・蟠桃の下に建てられたライブステージにネギ君の為に人質を五人ばかり用意した。彼が情報通りの人間なら見捨てる事など出来ず、間違いなく助けに来るだろう。その為のメッセージも送った

人質は女子寮の風呂場にいた四人と仕事内容のおまけに入っていた少女、カグラザカアスナの五名だ。他の四人は一人を除き、無関係だと思われる

「コラ！ヒゲー！！これ外しなさいよ！」

「すまないね。カグラザカくん、それは出来ない。君と後ろの四人は人質なのだから……ああ、それとその古菲くん。やめたほうがいい君の氣の拳でも、すらむいの粘度質の水牢は破れない」

「え！何で私と古菲の名前を知ってんのよ！！」

カグラザカくんを天井から鎖で吊し上げその後ろステージの奥には、私と共に今回の仕事に参加する彼女達、低級悪魔・スライムの少女達。現在、体を水牢に変えて風呂場の四人の人質（古菲くんとおでこの広い子・前髪で顔隠した少女・動じずに私を見てる少女）を閉じ込めるすらむいと水牢の前にいるあめ子とぷりんの三匹だ

しかし、わざわざ風呂場の中で誘拐する事もなかったらうに。脱衣所でもいいと思うのだが……まあ、過ぎた事は仕方ない。彼女事は事が済み次第、学園の判断に任せよう

私は人質の彼女達を見ながらネギ君達が来るのをただ待つのは退屈なので暇つぶしに、人質の四人の元へ歩き会話で時間を潰そうと決めた

「やあ、お嬢さん方すまないね。君達には彼らをおびき出す圈をやってもらうよ。一応聞かれると思うから先に言っておく、君達の身の安全は保障しよう」

「信用しろ言うんですか？」

おでこの広い子は私を睨みながら確認をしてきた。思いの他この子は冷静だと思いつつも少し淡々と言った

「誘拐の首謀者も同然の私が言うのも何だがね。信用して構わないよ、私は君らに興味はないからね。それに無暗に人を傷つけるのは私の趣味じゃない」

「すでに心が傷つきましたです」

「おや…はははは、それはすまない事をしたね。しかし、君は随分と冷静に私と話すのだね…君はすでに私の見当が付いているのかな？」

私の言葉におでこの広い子は一瞬だけ驚いた様子を見せるが、すぐに先ほどと同じ少し無愛想で顔を睨んだ……確信した。彼女は魔法についてある程度把握していると

そして少なくとも、その隣で前髪で顔隠した少女の隣にいる最初から動じていない少女も魔法を把握しているからと思った

ふむ。どうやらネギ君は自分が魔法使いだと生徒にバレているようだな……む。

「…さて。お嬢さん達には、これから起こる戦いの観客になってもらおう。何、心配する事は無い君達には害が及ばない、安心して裏の世界の戦いを観戦してくれたまえ」

「どういう意味ですか!？」

彼女の問いを無視し私は身を翻して観客席の方を歩きながら空を見上げると、空から彼が杖に跨りながらこちらに向かって来るのが見えた……どうやら、彼女達に魔法を隠す気はないようだ。彼は手に練習用の杖を持ち、それを私に向けると同時に杖の先端から光が飛び出し私に飛んで来た

無詠唱の光の矢か、だがこの程度……

私は向かって来る光の矢に手をかざして、事前に準備した策を使い彼の放った一条の光の矢を防がずに打ち消した

うむ、仕掛けはきちんと作動しているな……さて、ネギ君見せて貰おう。君の力を可能性を!

- s i d e e n d -

? 観客たち

- side - ネギ -

防がれた!...いや、打ち消した!?

牽制のつもりで放った無詠唱の光のウナ・ルーキス一矢は黒服の老人の前で、打ち消すかのように霧散した。それを見て僕は予め何か特別な準備をしていると思ひ、老人と距離を取り観客席の中段に降りた

その老人は僕を見つめながら、帽子を取りあいさつをしたそれは明らかに余裕があり、そして自身の力に自信がある表れに見えた

「初めましてネギ・スプリングフィールド君。私の名はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン。しがたない雇われの身の老人だ。私の事はヘルマンと気軽に呼んでくれて構わないよ」

「.....あなたは一体何が目的ですか!」

「何、単なる仕事だよ。君と七つの大罪の炎を使うイズミアコくとそこに吊るしているカグラザカくんの現状の實力及び能力の確認だよ」

「!...、その為ののどかさん達を人質に!!!」

僕が叫ぶが、ヘルマンさんは動じず帽子を被り直しながら僕に尋ねた

「さて、君一人ではあるまい。イズミくんはどこかな？」

「貴様に答える必要はない！！」

同時に刹那さんが、一瞬でヘルマンさんの背後に立つと同時に閃光のような速さで抜刀しそのまま斬る、居合切りを放ちヘルマンさんを仕留めようとしたが、刃は届かずに何かに弾かれた

「退魔の太刀…そういうえば、君もいたね。サクラザキセツナくん」

「くっ！！」

居合を弾かれた刹那さんは、すぐに後ろに飛び反撃に備えるがヘルマンさんは何もせず刹那さんを見つめながら、薄く笑い

「後ろにも気を配るべきだよ。セツナくん」

「！？」

気配を察して、振り向くと刹那さんの目線の先に二人の五歳くらいの半透明な少女が二人今まさに刹那さんめがけ蹴りを加えようと

していた

「きゃはは」

「きゃはは……」

「させんわ!!」

刹那さんの影の中から、コタロー君が飛び出して二人の少女を吹き飛ばすように鋭い蹴りを放ったが腕を交差して、コタロー君の蹴りを受け止めながら後ろに飛んだ

「すまない」

「気にせんでええ」

背を合わせる二人と僕を見ながら状況を確認している、ヘルマンさんは静かに

「ふむ、三対三か……あめ子、ぷりん。君達はそこの二人の相手をしてくれないかな。私はネギ君を相手にしよう。まだ、イズミくん以外に伏兵がいるかもしれないから気をつけるように」

「はい」

「了解」

その指示を受けて半透明の二人は刹那さんとコタロー君に攻撃を開始して、ヘルマンさんは僕の方へ、ゆっくり歩きながら近づいて来た

「さて、ネギ君。君には個人的に興味がある。先ほど挨拶はしたが、実は私は六年前に君と会っているんだよ……あの燃える村の中で」

「え……六年前に？」

そんなはず。だってあの時、村にいたのは僕とおねーちゃんとおじさんぐらいで他に人なんて……いるはずが……！！

「あ、まさか…あなたは……」

「そうさ。私が君の故郷の人達を石像に変えた悪魔だ」

- s i d e e n d -

- s i d e 明日菜 -

何、言ってるのよ…あのヘンタイは。悪魔？

「ちょっと、あんた！何の話をしているのよ！！」

私の声にヘンタイは意外な顔をしながら、私の方を向きそしてもしろそうに笑みをこぼしながら話を始めた。私の知らないネギの過去を

「ほう？君は知らないのかい？ネギ君の過去を。君は彼のパートナーと聞いていたんだが……まあ、いい。知らないのなら話してあげよう。彼の過去を」

「アスナさん！その人の言葉に耳を貸さないでください！」

ちょっと、何よ急に慌てて

ネギは誰の眼にも見えて明らかに動揺していた。それはまるで古傷を抉られるような苦痛の表情でヘンタイを睨んでいた

「彼がまだ魔法学校に入る前の話だ。当時、三歳ほどの彼は親戚と共に暮らしていた。故郷の村の人々は親のいない彼を厳しくも暖かく見守っていた……だが、ある日の雪の降る夜」

「しゃべるな！！」

ネギは突如、怒鳴りながらヘンタイに迫りながら魔法の矢を何本

か撃つがそれは最初と同じで、ヘンタイの前で消え去り同時に私に鈍い痛みが走った

「痛っ！……何？」

胸を見ると、私の胸元に見るからに安そうなひし形のペンダントが付けられていた。それは怪しく光、点滅していた

何よこれ……

「ああ！ネギ君！！」

「……！！」

視線を胸に向けている間に、朝倉の大きな声が聞こえて慌てて前を向くとネギが観客席の方へ吹き飛ばされていた。そしてヘンタイは拳を突き出していた恐らくネギを拳で殴り飛ばしたと思った

「ネギ！！」

「……ふん、さて続きを言わせてもらおう。ある日の雪の降る夜事件は起こった。突如として彼の村を悪魔の大群が押し寄せて村の人々を次々に石に変えて行ったのだ！そして、その中で彼は一人泣きじゃくりながらもこの世にいない父親に叫んでいた「お父さん！！と！！」

ヘンタイはそれを話すのが大層楽しいのか嬉しいのか、私達を劇を見る観客のように演技ががった声と動きで私達に話し続ける

「しかし、そんな時奇跡が起きた。なんと！死んだと言われた父親が現れ村を襲った悪魔達を、一騎当千の武将のように圧倒的で！絶対的に！他の追従など決して許さないかの如く悪魔を殺して行くではないか！！それをまじかで見ただ彼は逃げ出した。あまりに大きすぎる力に怯え、懂れていた父親に助けにくれたのに父に背を向けて……しかし、逃げた彼を追う悪魔もいた。その悪魔は同族が屠られるのを見ながらも、忠実に標的である彼を仕留める為に爪を隠し潜んでいた。そして好機は訪れ、村の人々を石化にさせた閃光を放ったが運よく生きていた彼の親類に阻まれ、失敗に終わり拳句には封印までされてしまった……まったく、あの老人にはしてやられたよ」

「……何であんたが知ってるのよ……そんな事」

そんな事は聞かなくても分かっているはずだった……このヘンタイはさつき自分の事を悪魔と村の人を石にしたと……それでも、私は聞きたかった

「言っただけだが、カグラザカくん。私は悪魔と……ね」

ヘンタイは私に顔を隠すように帽子を取り、そして次に顔が現れ

た時にそれは姿をみせた。それはまるで大きな卵に角を付け八口ウインによく尖った目と口の形にくり貫かれたカボチャのランプ・ジヤックランタンのように、くり貫き目と口の奥を光らせて私を見つめた

その時の私の顔はとても引きつった表情だったのだろう…ヘンタイはその顔で笑いながら、再び帽子で顔を隠しながら帽子を着けるとまたさっきの老人の顔に戻っていた

「はははははは！その顔だよ。カグラザカくん。近頃は「悪魔だー」と叫び町に繰り出し襲っても、如何せん手品の類と思われてあまり怖がれないのですね。実に面白みがなくて…いやはや、君のその顔には実に満足だ」

「…ッ。このヘンタイ！」

「…さて、ネギ君。思い出してくれたかな？」

ヘンタイはネギを吹き飛ばした観客席に視線を向けると、ネギもさっきの顔を見たのか顔面蒼白の表情を浮かべて小刻みに震えていた……

私は声をかけようとしたが、どう言えばいいか分からずにただ見てるしかなかった。対して、ヘンタイは両手を差し出しながらネギを挑発するかのよう問いかけた

「さあ、ここに今。君の憎むべき敵がいる！先生として彼女達を

助けるといふ偽善を義務を捨て、心に沸き立つ怒りに身を任せてみたらどうだ！？そうすれば、今度は逃げずに済むかもしれない！私を倒す事で石になった人々へのせめてもの慰めと償いになるかもしれないぞ……それとも、今度も逃げるのかな」

「…ッ！！」

何？まるでネギに自分を倒させようとしているみたいじゃないの

ヘンタイの言葉に疑問を持ったその時ネギが動いた。一瞬で、ヘンタイの懐に入ると右手を振り上げた。それは、まるで地面から吹き上がるマグマのように膨大な力と威力を携えてヘンタイの鳩尾にめり込み衝撃を地面に響かせ、体をへの字に曲げながら、ロケットの噴射のような速さで、ヘンタイを空に打ち上げた

「ぐっあー！」

さらにネギは追撃をかけに杖を使い猛スピードで追いつくやいなや、普段のネギでは考えられないくらいの暴力的な連続攻撃を仕掛けた。ヘンタイの顔を連続で殴打したと思えば蹴りを入れ、離れようとすれば服を掴み引き寄せさらに全身を殴打して殴り飛ばしてはまた捕まえるの繰り返し

私は堪らず怖くなった。このままじゃあ、ネギが壊れてしまうんじゃないか、もう元のネギに戻って来ないんじゃないかと……

「ネギ!!ダメ!!!」

- side end -

- side ザジ -

ネギ先生……

『ポヨポヨ、随分と荒れているポヨね。お前の先生は』

姉様がワザとヘルマン卿を差し向けるからです

私は現在、戦闘が行われている神木下のライブステージから1kmほど離れた樹の上からネギ先生達を見つめていた。そして、今話していたのは私の眼を通じて遙か別の場所で観戦してるヘルマン卿クライアントの雇い主にして私の姉ポヨ。本当はザジという私と同じ名のだが、二人いる時に大変紛らわしいので、言葉に何故かポヨを付ける姉様をポヨ姉様と呼んでいる

そして私達よりも、ライブステージに近い樹の枝に闇の福音とそダイク・エヴァンジェルの従者の絡繰さんと忍者の長瀬さんの三名が私達同様に観戦している

姉様。彼をどう見ますか？

『将来性は評価出来るポヨが、それ以外はまだヒヨコ同然ポヨ。それに私の本命は和泉亜子と神楽坂明日菜の二人ポヨ』

和泉さんは……私の感知圏にはいません

『恐らくは京都の決戦の時のようにあの姿をやるつもりポヨ』

真名の焰……完全具現化ですか？

『その通り。あの状態で挑まればヘルマンも瀕死は必須ポヨ。例え七つの魔焰セラン・ブレイズの正体が歴代の担い手達の心……魂の集合体であるうと、偽りで悪魔の王達の名を名乗っていたとしても、完全具現化の力は本物ポヨ……ここで真名の焰をヘルマンに使うなら、ヘルマンには悪いが情報収集の為に果ててもらうのもアリポヨ』

姉様は、現在の担い手の和泉さんを計り兼ねている。理由は当時、単なる四歳児の彼女が新たな七つの魔焰セラン・ブレイズの誕生の際に生じる力に耐えられるはずがないからだ

実際、歴代の後継者の中には誕生の際のエネルギーに体が耐えられず、そのまま死ぬ者もいたからだ。その場合、七つの魔焰セラン・ブレイズは最も近い人間に移るらしい……

だから、死ななかつた和泉さんに興味を持ち、何の因果か和泉さんの担任、前の担い手エンペラーの皇帝の宿敵の一人にして、好敵手の一人・ナギの息子と因縁のある悪魔をあえて雇い。さもヘルマン卿がネギ先生に個人的に的を絞っているように演じさせ、本当は和泉さんとおまけ扱いの神楽坂さんの二人が本命だ

姉様の目的は三つ……一、ヘルマン卿に和泉さんを殺させ、その
際人間に移るであろう七つの魔焰セブン・ブレイズを観測する事。二、神楽坂さんの
持つ本人が無自覚で発動している魔法無効化能力マジック・キャンセルの効力の確認。三、
一が達成された場合に七つの魔焰セブン・ブレイズが、神楽坂さんに移った場合に彼
女の魔法無効化能力マジック・キャンセルにどう反応するかの実験

一、は可能であればが前提であり。二、すでに達成している。神
楽坂さんに着けたペンダントは魔法無効化をヘルマンに付加させる
効力があり、最初の攻撃で無効化の効力は確認出来ている。三、可
能性はあるが一が成功した場合のみ、起こる上に移る可能性も低い
でも、姉様。もしネギ先生がヘルマン卿を倒した場合は……

『ありえんポヨ。ヘルマンは没落したとはいえ、一度は公爵まで
昇った男。昨日今日、生まれた雛鳥に負ける事はないポヨ。だが、
お前の言う通り……もし、そうなった場合は彼の評価をFからC
に改めるだけポヨ』

あくまでも、ネギ先生が勝てないと思っている姉様……でも、私は
彼に勝ってもらいたいと、ほんの少しだけ思っている

頑張ってください。ネギ先生

- side end -

- side エヴァンジェリン -

「エヴァ殿、ネギ坊主は一体？」

「抑えていた感情が抑えられなくなって、感情のままに魔力を暴走^{イロド}しているだけだ。だから、打点はズレ決定打が与えられない」

ふん、バカ弟子が暴走などしおつて

「止めなくても良いでござるか？」

長瀬楓は、心配ではないかと言う意味も込めて聞いて来たが私は素っ気なく答えながら釘を刺す

「ほつとけ、ぼーやは自覚すべきなんだよ。自分が何の為に魔法を習ってきたのかその初期衝動、原風景、力の源泉を自覚し認める事をしないとぼーやは精神的に強くなる。仮にあのまま潰れるというなら、所詮はその程度だったと見切りもつく……あいつらは助けてもいいが、ぼーやは助けるなよ。長瀬楓」

「……ふむ、それはまた難しい事でござるな。拙者は未熟ゆえに、ついつい差し伸べる相手を間違えてしまいかもしれないでござる。それが戦闘中であるならば、なおさら相手を間違える確率が高いでござるな」

回りくどい、はっきりとぼーやも助けたいと言えればいいだろうに

「……………ふん。好きにしろだが、もう少し見ている。すぐに助け
てしまうのはぼーや達の為にならん」

「その辺は心得ているでござる」

そして私達は観戦を再開しようとした時、茶々丸が何やら空の方
を向きながら何かつぶやいている。私は不審に思い声をかける

「おい、茶々丸どうした？空など見て」

「……………マスター」

「ん、何だ？」

「現在、私のセンサーの範囲外からこちらに高速で飛来して来る
生物又は物体があります。現在のスピードを維持したまま飛来した
場合、後三分でこちらに到着します」

「何！？何だそれは！」

また厄介事か面倒な

「不明です。ですが全長は推定五mほどの物です……………追加報
告します。現在速度を上げて、後一分ほどで学園の結界に衝突しま
す。対象に高熱と魔力を感知、形状は昆虫の八工に酷似しています」

「五mの八工だと！？どこのB級映画だ！！そんな気色の悪い魔

法生物などいるはずが……待て、高熱だと……」

「はい、表面温度は現在一八〇度を超えています……マスター？」

その時、遠くの方から雨音に混じりながらも虫の羽音が聞こえ、段々と羽音が大きくなるのが分かる。その音に長瀬楓も警戒している

「エヴァ殿、何やら不気味な気配がするでござる」

「そうだな……」

高熱を帯びたハエ……高熱……熱……炎……！？まさか！

その時、学園結界を何か突き破った知らせが届き慌てて破けた結界の方を向くと、私達の上空を高速で何かが通り過ぎながら光線を放ち、ぼーや達のいるライブステージに伸びていき、そしてライブ会場に閃光と轟音と爆発を引き起こした

私は悟った。和泉亜子が学園に来る前に放した七つの魔焰セブン・フレイズの一本が戻ってきたと同時に熱光線を恐らくライブ会場にいるであろう、和泉亜子に向けて撃つたという事に……

- side end -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3053w/>

魔法先生ネギま！ -皇帝の後継者-

2012年1月11日01時58分発行